

城横穴群

菊池川中流域古墳・横穴群総合調査報告書(2)

1987

山鹿市教育委員会

城横穴群

菊池川中流域古墳・横穴群総合調査報告書(2)

1987

山鹿市教育委員会

序 文

菊池川中流域には多くの古墳や横穴群が見られ、その存在は確認されていますが、個々の遺跡の規模や性格については、まだまだ十分な調査が行われておりません。

山鹿市教育委員会では、これらの遺跡を調査し、記録保存するため、昭和59年度から国庫補助を得て菊池川中流域古墳・横穴群総合調査を行っておりますが、この報告書は、この事業の一環として昭和60年9月より12月にかけて実施した山鹿市域横穴群の調査成果をまとめたものであります。

この横穴群は、さきに（昭和57年度）熊本県文化課と熊本大学の合同調査により遺跡の広がり確認されており、実測時の足場の架設作業で難航したことを除けば、条件的には恵まれていたようです。

問題は、岩盤の亀裂などの自然崩壊が随所に見られ、現状保存が困難になっていることです。例えば、県文化課と熊本大学が確認した46基の横穴のうち、今回の調査で明らかに1基が消滅していることが判明しております。二つの調査の間隔はわずか3年にすぎません。この事実は、開発行為に伴う遺跡の破壊を防ぐだけでなく、遺跡そのものの自壊作用による自然的要因に対しても絶えず配慮し、施策することの必要性を如実に示しており、もし、調査時期がもっと早ければ、現数を更に上回っていただろうし、せめて記録保存だけでも可能であったろうことが惜しまれます。

今回の調査で新たに3基の横穴が発見され、現存する実数は、つごう48基と確認されましたが、他の横穴群、例えば鍋田横穴群、長岩横穴群、湯の口横穴群などに比べて、個々の墓室構造が総じて4㎡前後の小規模であることが判明しました。うち複室を有するもの、外壁に人物・武具などのレリーフを施したものが、それぞれ1基しかなく、しかも、これらが優れて特徴的な規模と描法を示していることは、この横穴群のもつ性格と位置付けを探る上で重要な手がかりになるのではないかと期待をしております。

調査に際しては、県文化課の指導・助言や市文化財保護委員会の方々の心温まる励ましをいただきました。心から感謝の意を表し、本書が文化財の保護に、さらに学術研究の資料として活用されることを祈念してやみません。

昭和62年3月31日

山鹿市教育委員会

教育長 弓 掛 正 久

例 言

1. 本書は、山鹿市教育委員会が国庫補助事業として実施した菊池川中流域古墳・横穴群総合調査の報告書である。
2. 本調査は、菊池川中流域に所在する古墳、横穴群の実態を把握することを目的としたもので、城横穴群はその2年目の事業である。
3. 調査に際しては、山鹿市教育委員会が主体となり、山鹿市立博物館において実施した。
4. 本書の執筆は中村幸史郎が行った。
5. 本書の横穴、遺物の実測図作成および、製図は挿図目次に示すとおりである。
6. 本書に掲載した写真は中村と坂本重義が撮影した。
7. 本書の編集は中村が行った。
8. 本書の題字は山鹿市文化財保護委員長、幸平和氏にお願いした。

本文目次

序 文

I	調査の経過	1
	1. 調査に至る経過	1
	2. 調査の組織	2
II	立地と環境	2
III	調査の成果	11
	1. 横穴群の範囲と分布の概要	11
	2. 横穴と遺物	12
IV	まとめ	69
	1. 横穴構築における規格・基準の存在について	69
	2. 奥屍床における石屋形の構築方法について	76
	3. 横穴の内部構造の違いにおける意義について	77

図 版 目 次

図 版	1	1	城横穴群遠景（彦岳山頂より）
		2	城横穴群全景（日輪寺より）
		3	台風で崩壊した崖面
	2	1	4号横穴
		2	4号横穴石枕
		3	6～7号横穴
	3	1	8号横穴
		2	9号横穴

- 3 11号横穴
- 4 1 13号横穴
 - 2 14号横穴
 - 3 15号横穴
- 5 1 16号横穴
 - 2 16号横穴内部
 - 3 17号横穴
- 6 1 17号横穴
 - 2 石屋形
 - 3 右側壁の石屋形
- 7 1 18号横穴
 - 2 19号横穴
 - 3 羨門より内部を見る
- 8 1 19号横穴内部
 - 2 荒々しいノミの痕
 - 3 20号横穴
- 9 1 20号横穴奥壁石屋形
 - 2 装飾文様
- 10 1 21号横穴
 - 2 玄室より羨門を見る
 - 3 壁面に残されたノミの痕
- 11 1 横穴開口状況（24号～29号）
 - 2 23号横穴
 - 3 24号横穴
- 12 1 24号横穴内部
 - 2 25号横穴
 - 3 天井
- 13 1 26号横穴
 - 2 26号横穴内部
 - 3 27号横穴
- 14 1 28号横穴
 - 2 29号横穴（天井に穴がある）
 - 3 30号横穴
- 15 1 30号横穴実測用足場
 - 2 31号横穴内部（礫床）
 - 3 31号横穴

- 16 1 33号横穴
- 2 34号横穴
- 3 34号横穴天井
- 17 1 35号横穴
- 2 36号横穴
- 3 37号横穴
- 18 1 37-B号横穴
- 2 38号横穴
- 3 39号横穴
- 19 1 41号横穴
- 2 41号横穴天井
- 3 42号横穴
- 20 1 42号横穴遺物出土状況
- 2 42-B号横穴
- 3 43号横穴
- 21 1 45号横穴
- 2 玄室より羨門を見る
- 3 変則的な屍床

挿 図 目 次

第1図	周辺遺跡分布図（中村幸史郎作成）	4
第2図	城横穴群位置図（ ）	6
第3図	横穴配置図（「熊本県装飾古墳総合調査報告書」より引用）	7～8
第4図	横穴垂直分布図（緒方久美子作成）	9～10
第5図	1号横穴実測図（坂本重義実測、緒方製図）	12
第6図	3号横穴実測図（中村実測、緒方製図）	14
第7図	4号横穴実測図（坂本実測、緒方製図）	15
第8図	5号横穴実測図（坂本実測、緒方製図）	16
第9図	6・7号横穴実測図（中村実測、緒方製図）	17～18
第10図	8号横穴実測図（坂本実測、緒方製図）	19
第11図	9号横穴実測図（坂本実測、緒方製図）	20
第12図	10号横穴実測図（中村実測、緒方製図）	22
第13図	11号横穴実測図（坂本実測、緒方製図）	23

第14図	13号横穴実測図（中村実測、緒方製図）	25
第15図	14号横穴実測図（坂本実測、緒方製図）	26
第16図	15号横穴実測図（坂本実測、緒方製図）	27
第17図	16号横穴実測図（中村実測、緒方製図）	29～30
第18図	17号横穴実測図（坂本実測、緒方製図）	31～32
第19図	18号横穴実測図（中村実測、緒方製図）	34
第20図	19号横穴実測図（中村実測、緒方製図）	35
第21図	20号横穴実測図（坂本実測、緒方製図）	36
第22図	装飾文様実測図（「熊本県装飾古墳総合調査報告書」より引用）	37
第23図	21号横穴実測図（中村実測、緒方製図）	39
第24図	22号横穴実測図（中村実測、緒方製図）	40
第25図	23号横穴実測図（坂本実測、緒方製図）	41
第26図	24号横穴実測図（坂本実測、緒方製図）	42
第27図	25号横穴実測図（中村実測、緒方製図）	43
第28図	26号横穴実測図（中村実測、緒方製図）	44
第29図	27号横穴実測図（坂本実測、緒方製図）	45
第30図	28号横穴実測図（中村実測、緒方製図）	46
第31図	29号横穴実測図（坂本実測、緒方製図）	47
第32図	30号横穴実測図（中村実測、緒方製図）	48
第33図	31号横穴実測図（中村実測、緒方製図）	49
第34図	31号横穴出土遺物実測図（中村実測、緒方製図）	50
第35図	32号横穴実測図（中村実測、緒方製図）	50
第36図	33号横穴実測図（中村実測、緒方製図）	51
第37図	34号横穴実測図（坂本実測、緒方製図）	52
第38図	35号横穴実測図（坂本実測、緒方製図）	53
第39図	36号横穴実測図（坂本実測、緒方製図）	54
第40図	37号横穴実測図（中村実測、緒方製図）	55
第41図	37－B号・38号横穴実測図（坂本実測、緒方製図）	57～58
第42図	39号横穴実測図（坂本実測、緒方製図）	59
第43図	40号横穴実測図（坂本実測、緒方製図）	60
第44図	41号横穴実測図（坂本実測、緒方製図）	61
第45図	42号横穴実測図（坂本実測、緒方製図）	62
第46図	42号横穴出土遺物実測図（緒方実測、製図）	63
第47図	42－B号横穴実測図（中村実測、緒方製図）	63
第48図	43号横穴実測図（中村実測、緒方製図）	64
第49図	44号横穴実測図（坂本実測、緒方製図）	65

第50図	45号横穴実測図（中村実測、緒方製図）	66
第51図	46号横穴実測図（坂本実測、緒方製図）	68
第52図	桜の上Ⅰ－2号横穴実測図（「熊本県装飾古墳総合調査報告書」より引用）	72
第53図	湯の口横穴群52～54号配置図（中村作成）	78

目 次

表－1	周辺遺跡一覧	5
表－2	桜の上Ⅰ－2号横穴計測値と尺度換算表	73
表－3	城横穴群計測値一覧	74
表－4	城横穴群計測値尺対照表	75

I 調査の経過

1. 調査に至る経過

山鹿市では国庫および県費補助を得て、昭和59年度から遺跡詳細分布調査として菊池川中流域古墳・横穴群総合調査を開始し、今年で3年目に入った。

初年度は溜池によって浸蝕が著しい湯の口横穴群の実測調査を実施し、数多くの成果をあげた。

昭和60年度は城横穴群の実測調査を行い、初年度調査した湯の口横穴群調査報告書の刊行を行った。^{註1}そして今年度は馬見塚古墳群をはじめとした、古墳の測量と石室内の実測調査を行い、さらに城横穴群調査報告書の刊行を行うこととなった。

この事業の目的は、菊池川中流域において多く分布する古墳や横穴群についての基礎資料を作成することである。そのために実測および測量を中心とした調査を実施し、併せてその規模や保存状況等も記録するものである。

幸にして、この地域は古くから学術調査の対象となっており、とくに装飾古墳に関する調査が盛んに行われ、多くの刊行物を見ることができる。しかし、他の古墳や横穴に関する資料は不十分と言わざるを得ない。このような今日の状況に対し、これらの資料の収集および作成作業は、地域に根ざした活動を行っていく博物館においては、重要な仕事であると理解する。

とくに、この調査によって得られた資料は単に博物館資料として活用されるのみならず、学術研究および埋蔵文化財保護行政においても重要な役割を果たすものと確信している。

城横穴群については昭和57年熊本県教育庁文化課と熊本大学文学部考古学研究室の手によって、装飾文様および横穴群配置図の作成を中心とした調査が実施されていた。この調査によって、かつては20余基であろうと^{註2}されていたものが、46基存在していることが確認されたのである。^{註3}

今回の調査はこれらの成果を踏襲する形で、昭和60年9月から12月までの間に横穴全ての実測を行ったものである。

なお調査開始直前の昭和60年8月31日、おりから接近した台風13号によって、城横穴群の各所で崖崩れを生じた。とくに12号横穴周辺では高さ10m、幅20mにわたって、夜半に轟音と共に崩れ落ち、その際12号横穴も消失したものであった。さらに45号横穴周辺においても大木が根本から倒れたりして、自然の力による遺跡破壊の惨状をまざまざと見せつけられた。

註1 「湯の口横穴群」『山鹿市立博物館調査報告書』第5集 1986

註2 原口長之「原史」『山鹿市史』1985

註3 高木正文「城横穴群」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』1984

2. 調査の組織

調査主体	山鹿市教育委員会
総括	弓掛 正久（山鹿市教育長）
調査団長	原口 長之（山鹿市立博物館長）
調査事務	轟木 正斗（ 〃 副館長） 次木万里子（ 〃 〃 事務吏員）
調査員	中村幸史郎（ 〃 学芸員）
調査補助員	坂本 重義（ 〃 臨時）
作業員	大森よう子、緒方久美子
整理作業員	大森よう子、緒方久美子、垣田美穂子、田中理恵子（昭和60年度） 緒方久美子、吉川 純子、西田 美紀（昭和61年度）

II 立地と環境

山鹿市を西流する菊池川には大小65の支流が注いでいる。その中で最も大きいのが全長24.5kmの長さを誇る岩野川である。

岩野川は源を福岡県八女郡矢部村と境を接する、鹿本郡鹿北町大字多久の国見山（標高1,018m）西麓に発している。この川は谷川のせせらぎを集めながら鹿北町の山間部を縫うように流れ、谷底には小規模な河岸段丘を形成している。岩野川が南下しつつ山鹿市に入ると彦岳（標高355m）と震岳（標高416m）が行く手を阻む様にそそり立っている。流れは彦岳北側裾部にぶつかりながら東側に迂回し、さらに、震岳西側の裾部を挟むように進んでいる。ここから先は自らが形成した氾濫原を蛇行しつつ南下し、彦岳西麓から南に伸びた平小城台地に沿うように流れ、台地南端の山鹿市鍋田で菊池川と合流している。

平小城台地東側の氾濫原は古くから穀倉地帯として重要な地域となっている。とくに城横穴群の東に小鳥町という集落が在るが、ここは和名抄に見える山鹿郡緒緑郷に比定され、この周辺には条里地割が存在していたことからも、その歴史の古さを知ることができよう。^{註1}

さて、城横穴群はこの平小城台地の北端部の崖面に開口しており、熊本県山鹿市大字城字城に位置している。^{註2}

先にも述べたように、この横穴について総数が確認されたのは昭和57年のことで、それまでは20基程度を確認していたに過ぎなかった。しかし、これらの中に装飾文様をもつ横穴が存在しているところから、その重要性が注目され昭和34年12月8日、長岩横穴群と共に熊本県指定史跡となった

のである。

横穴は阿蘇凝灰岩崖面の高さ2～6mの位置に開口している。近くに集落があるため昔から子供達の遊び場として利用されたものもあり、横穴どうしを結ぶ穴を穿っているものさえあった。横穴群の範囲と分布の概要については後述することとして、周辺の遺跡に目を転じてみよう。

山鹿市街地の西側に位置する平小城台地には多くの古墳や横穴群が存在している。山鹿市には古墳が多いと言われる中で、この台地が最も密集している所である。さらに、これらの多くに装飾文様を施していることは特筆すべき事実である。また、旧石器時代から弥生時代にかけての遺跡や古代、中世における遺跡も少なくないが、ここでは代表的な遺跡に限って紹介することとする。

城横穴群の直上には城村城がある。この城は菊池三大家老城氏の居城として築かれた。城氏が隈本城に移った後は隈部親安が入城し、天正15年(1587)佐々成政との戦で城村城一帯が戦場となっている。

城横穴群の南約600mの台地上東端部には県指定史跡馬塚古墳が在る。この古墳の北と南には、かつて鬼天神古墳と馬塚南古墳があったがいずれも破壊されて見る事ができない。

馬塚古墳からさらに南へ400m程の台地東端部竹林の中に県指定史跡付城横穴群が在る。ここは昭和42年当時72基を確認していたが、昭和56年の県文化課と熊本大学考古学研究室の合同調査で97基が確認され、このうち3基に装飾が認められる。なお横穴は上下8段にわたって構築されており、城横穴群や鍋田横穴群と比較しても興味深い横穴群である。

付城横穴群の直上には、天正15年佐々成政が城村城を攻めた際築いたとされる東付城がある。記録によれば西付城と共に同年7月13・14日の両日にわたって築かれたとされている。^{註3}

付城横穴群から南へ500mの所に国指定史跡チブサン古墳が在る。昭和50年環境整備事業を実施した際、現在墳丘南側の駐車場敷地南東隅において石棺1基が出土したが、未調査のまま埋めている。また、昭和40年代の前半にも、チブサン古墳北側の山に古墳が存在していたが、削平して今日では畑地と化していることを地元の人から聞かされたことがあり、いずれも未確認である。

チブサン古墳から西へ200mの所に県指定史跡オブサン古墳がある。ここは昭和50年実測調査、昭和59年と60年の二度にわたって発掘調査が行われ多くの成果を上げている。なお昭和61年1月～3月で環境整備工事を実施して、菊池川流域風土記の丘構想の核となっている。さらに、この周辺には西福寺古墳群として円墳2基、石棺3基、方形周濠墓1基が県文化課の手によって確認されている。

チブサン古墳からさらに南へ1,000mの所に国指定史跡鍋田横穴群が存在している。ここは平小城台地南端で岩野川と菊池川の合流点を目前にしている所である。現在史跡公園化しており、その数61基を数える。このうち12基に装飾文様を施しており、とくに27号横穴の装飾は著名である。

鍋田横穴群のうち27号横穴の直上の台地上から昭和47年4月小型堅穴式石室が検出された。^{註4}この形式の石室は筑後地方に多く見られるもので、筑後地方との関連性を考えるうえにおいて一つの資料となるものと思われる。

平小城台地の西側に岩野川を挟んで氾濫原が広がっている。この中にも数基の古墳を見ることができる。



第 1 図 周辺道跡分布図

付城横穴群の東側約250mの水田の中に河童塚古墳が残っている。さらに河童塚へ南約50mに姫塚古墳が存在していたが、畑耕作のため破壊されて残っていない。

馬塚古墳から東へ約600mの杉稻荷神社内に京塚古墳も残っているが未調査のため不詳。

鍋田横穴群の東には臼塚古墳、臼塚西古墳、さらに金屋塚古墳が存在している。

このことから、岩野川の流れは古墳時代においても、今日とほぼ同じ流れをしていたものと考えられる。

註1 工藤敬一「古代・中世」『山鹿市史』1985

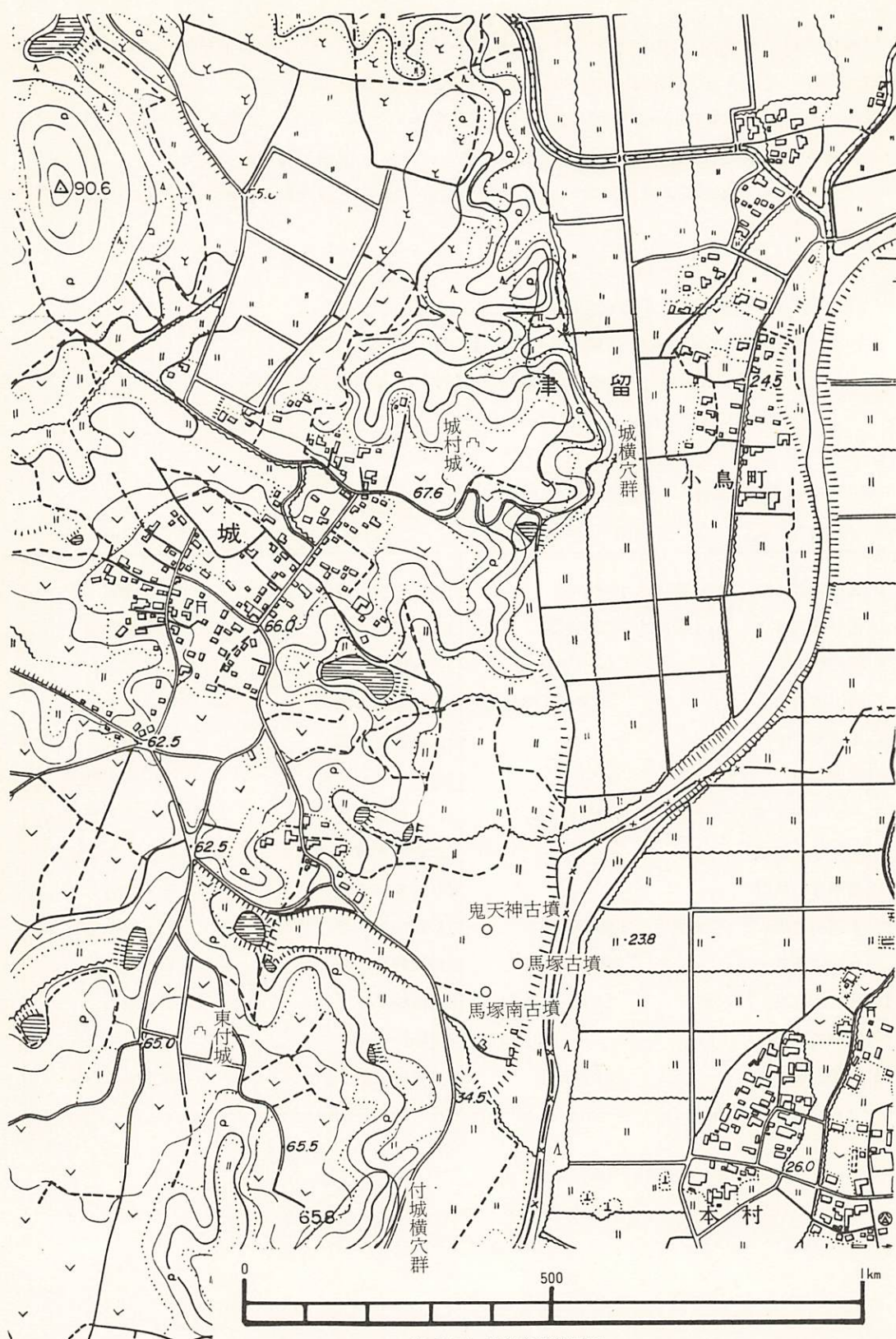
註2 「熊本県の条里」『熊本県文化財調査報告第25集』1977

註3 倉原謙治校訂「山鹿郡城村城之事聞取書」『城村城史考』1986

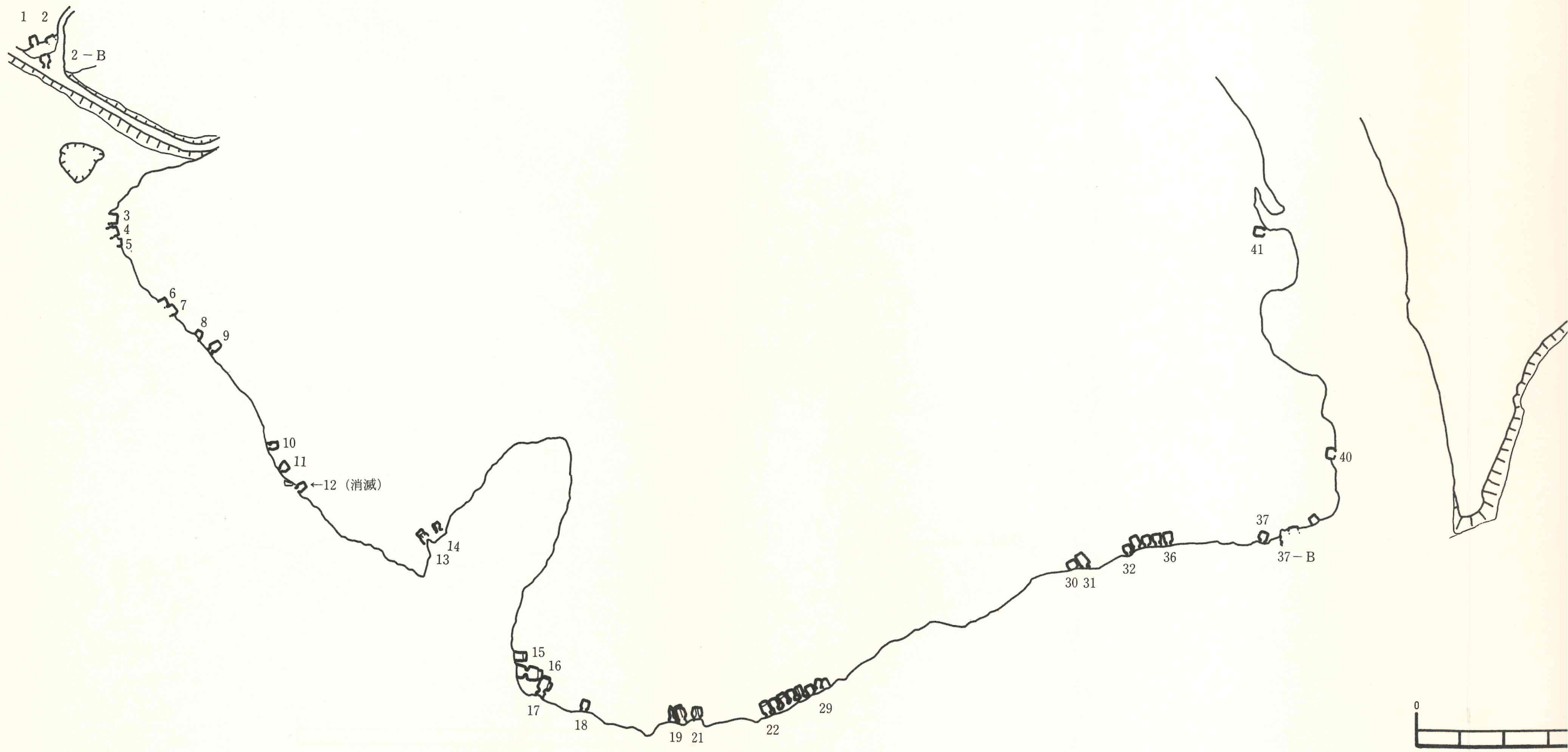
註4 原口長之「原始」『山鹿市史』1985

表-1 周辺遺跡一覧

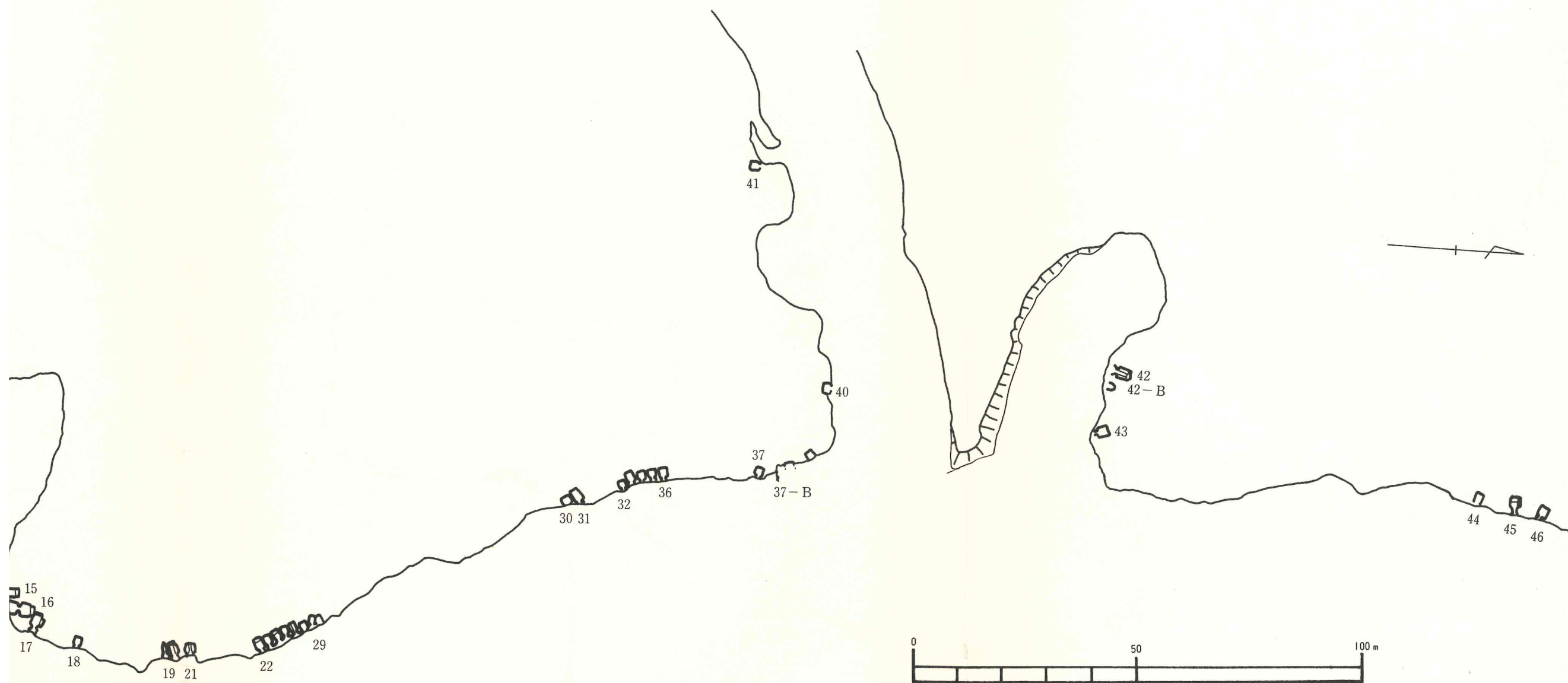
〈遺 跡 名〉		〈所 在 地〉	
1 城横穴群	山鹿市大字城字城	15 臼塚西古墳	山鹿市大字石字臼塚
2 付城横穴群	山鹿市大字城字小原	16 金屋塚古墳	〃 石字金屋塚
3 鍋田横穴群	〃 鍋田字東	17 京塚古墳	〃 杉字平原721-2
4 鬼天神古墳	〃 城字鬼天神(消滅)	18 竜王山古墳	〃 杉字小峯
5 馬塚南古墳	〃 〃	19 御霊塚古墳	〃 熊入字東原721
6 馬塚古墳	〃	20 ビシャモン塚古墳	〃 〃 字上原582
7 チブサン古墳	山鹿市大字城字西福寺	21 乳母塚古墳	〃 〃 字北原(消滅)
8 オブサン古墳	〃	22 倉塚古墳	〃 熊入字戌亥原306
9 西福寺古墳群	〃	23 弁慶が穴古墳	〃 熊入字竹下
10 東鍋田古墳	山鹿市大字鍋田字東	24 観念寺古墳	〃 熊入字中尾
11 五社宮石蓋土壇	〃 鍋田字馬場	25 舞野石棺群	〃 平山字舞野
12 河童塚古墳	〃 杉字古屋敷53	26 城村城跡	〃 城字城
13 姫塚古墳	〃 31(消滅)	27 西付城跡	〃 城字付城
14 臼塚古墳	〃 石字臼塚	28 東付城跡	〃 城字院の馬場



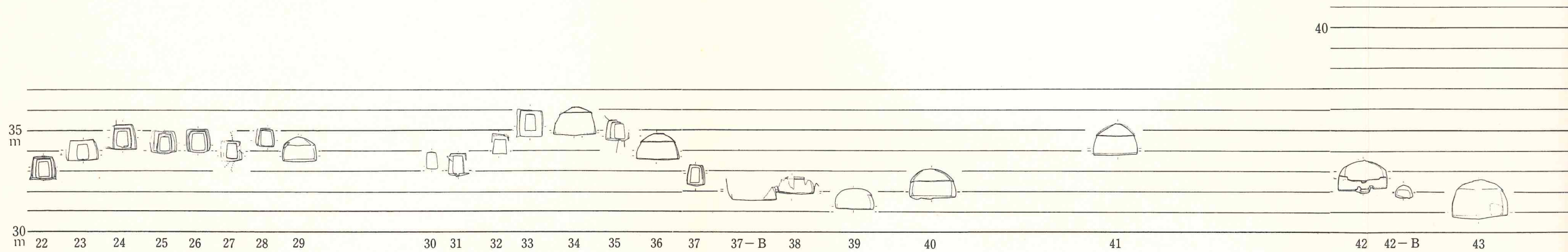
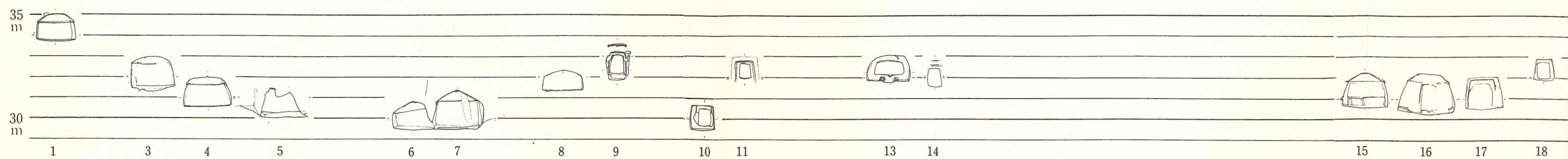
第 2 図 城横穴群位置図



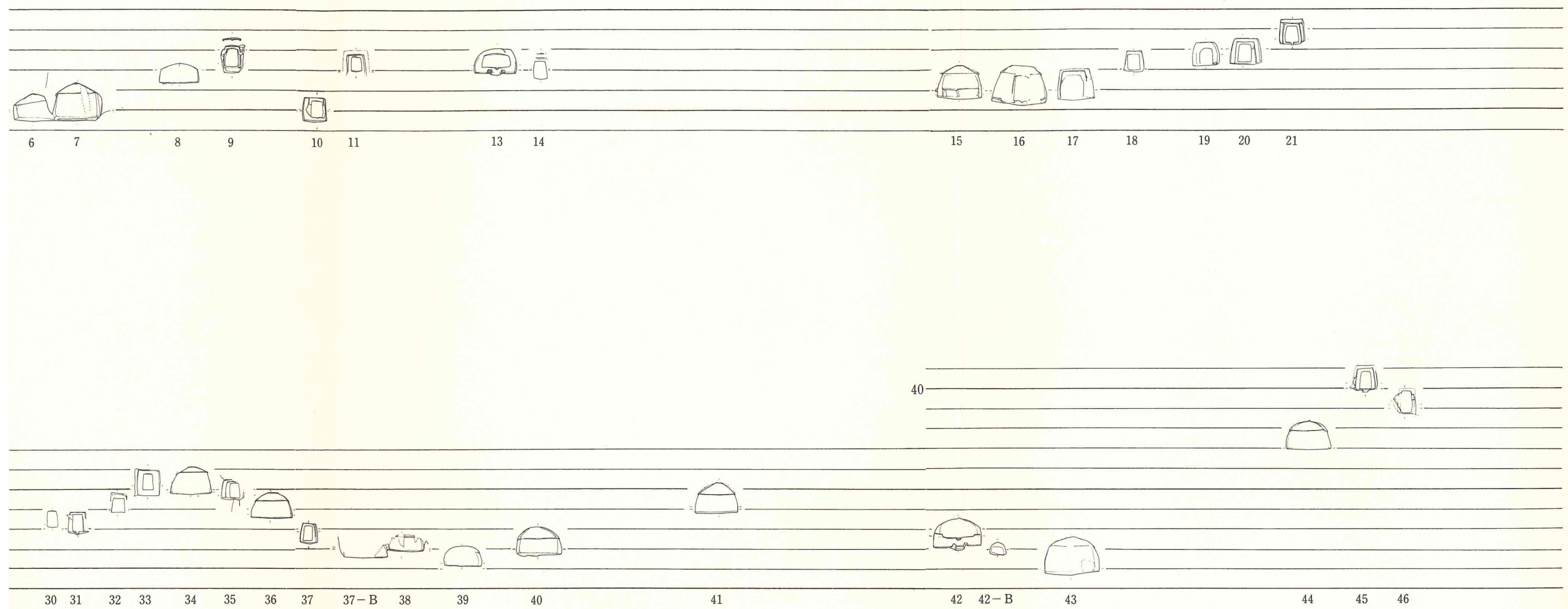
第 3 図 横穴配置図（熊本県装飾古墳総合調査報告書より引用）



第 3 図 横穴配置図（熊本県装飾古墳総合調査報告書より引用）



第 4 図 横穴垂直分布図



第 4 图 横穴垂直分布图

III 調査の成果

1. 横穴群の範囲と分布の概要

城横穴群の範囲と分布に関する調査は昭和57年度事業として熊本県教育庁文化課と熊本大学文学部考古学研究室の手によって実施されている。この時には横穴配置図および装飾文様とその横穴に関して測量・実測調査を行い、その際作成された配置図が第3図に示すものである。

今回の調査はこの配置図を基に全ての横穴の実測調査を実施したもので、昭和57年度確認46基に対し、新たに3基を発見し総数49基が存在していたことが判明した。しかし、残念な事に昭和60年8月の台風により、12号横穴が消失していて、現在48基を数えるのみである。なお、横穴の番号は昭和57年度調査に順じ、新たに発見した横穴には前の横穴の番号にB号として付した。その結果、48基の中で埋没状態にあり実測できなかった2基を除き、46基の実測を終了することができた。

横穴群は平小城台地東側崖面の最も北にあたり、小鳥町の西側の崖面に開口している。その範囲は、南が小鳥町から台地上の城村へ通じる道路の登り口の圓通寺口（地藏口）から始まり、「く」字形に折れながら約550m北に伸びた地点まで分布している。

その間には大小4の谷が存在しており、主に谷と谷の間の崖面に開口していた。以下分布の概要について述べることにする。

南端部の圓通寺口には1号～2-B号横穴までの3基が存在している。ここには北側に谷が在り、その入口を埋めるように道路が登っている。水田面から横穴まで約10mの高さがあり、2-B号横穴のように道路下に没する横穴が他にも存在するのでなかろうか。

南端部の谷と次の谷との間は約120mの崖面が存在し、その中に3号～12号横穴まで開口していた。12号横穴は先にも述べた如く崩壊していたが、3号～5号横穴、6号～9号横穴、10号～12号横穴と3グループに分れて開口していた。これらも現在の水田面からは約10mの高さに位置しており、崖面では2m以下の高さに開口していた。

2番目の谷の入口部分には南側に13号と14号横穴が、北側には15号と16号横穴が開口していた。とくに16号横穴では城横穴群の中で唯一の複室となっていた。

2番目の谷と3番目の谷との間には長さ200mにわたって一直線に崖面が存在している。この中に17号～39号横穴までが開口している。ここもグループで開口し、17号～18号横穴、19号～21号横穴、22号～29号横穴、30号～36号横穴、37号～39号横穴の5グループに分れている。これらは水田面から10m、崖面でも2～5mの高さに開口しており、横穴築造に際してもかなり困難を極めたものと推察された。

3番目と4番目の谷は接しながら存在しているが、3番目の谷の南側には40号と41号横穴が開口している。とくに41号は谷の入口から約70mも入っており、独立した格好で存在している。

4番目の谷の北側にも42号～43号横穴が開口していた。

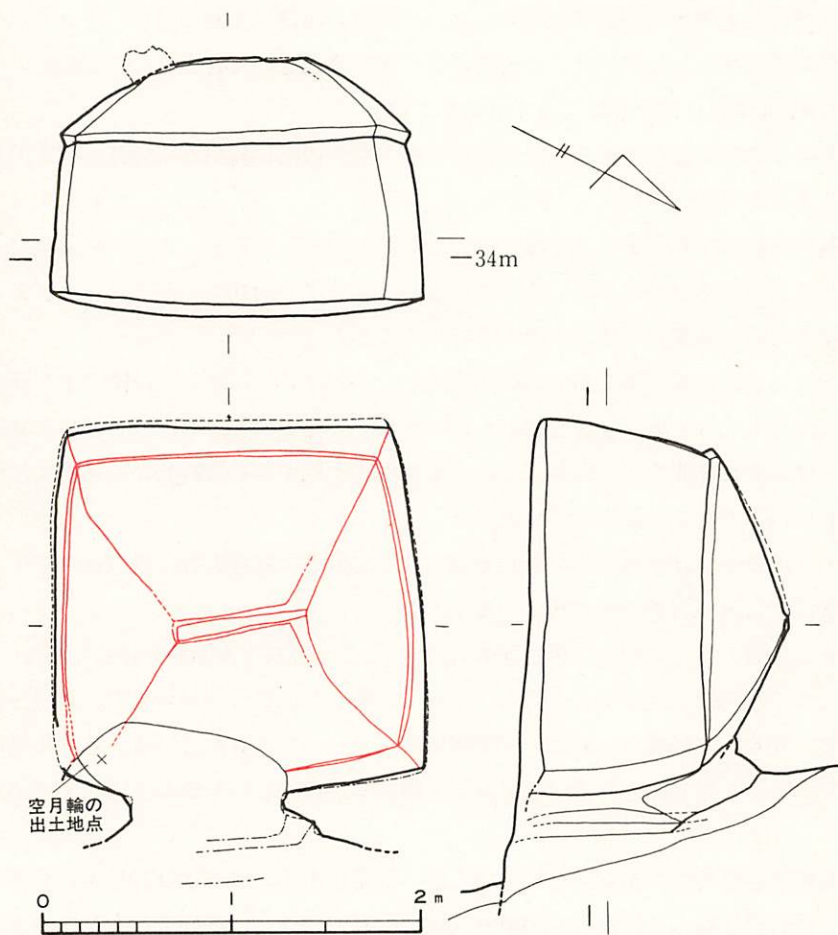
44号～46号横穴は4番目の谷から北へ約100mの所に開口していた。ここでは45号横穴が崖面の高さ6mの位置に開口しており、他の横穴に比べても最も高い位置であった。

城横穴群では個々の横穴の高さは不揃いだが、それらは崖面直下の地形によって左右されており、基本的には横一列に開口していたものと理解される。また横穴の規模等からも鍋田横穴群との共通点を多々見ることができる。

2. 横穴と遺物

1号横穴（第5図）

城横穴群の中で最も南に位置しているこの横穴は、台地上の城村に通じる道路に面している。また横穴の北側では山肌を削っただけの旧道が直線的に台地上へと続いており、この付近は圓通寺と



第5図 1号横穴実測図

呼ばれているが、崖面にお地藏さんが彫られているところから地藏口とも呼ばれている。横穴は道路から約2m程高くなった段上に2号横穴と並んで開口し、主軸はN63°Eにとり、東北東に向けて開口していた。

羨門は竹と樹木の根が張りつき、僅かに飾縁の一部残すのみで他は剥落しているが長方形を呈した羨門になるものと思われる。

玄室内には凝灰岩の礫や河原石が床一面に堆積しており、大きさはこぶし大から小児頭大のものが主であった。そのためボーリングステッキによって床面を探ってみた結果、図に示すように屍床は平坦となり、仕切等は見られないようである。

玄室の規模は入口部分で幅180cm、奥壁幅171cm、奥行200cm、高さ約138cmを測り、ほぼ正方形に近いプランを呈していた。天井は寄棟造の平入りで、四周には軒先線を明瞭に刻んでいる。

遺物

堆積していた礫の中に五輪塔の一部(空風輪)や現代の陶磁器、ガラスの破片等が投げ込まれていた。これらを排除する時間的余裕や排土を置く場所が無く、現状での実測となったため横穴に伴う遺物の出土を見なかった。

2号横穴

1号横穴の北隣りに位置している。玄室の前半分を崩壊し、かなりの量の堆積土が残っている。さらに、道路に面していることもあって、排土を置く場所がなく、さらに排土作業を実施した場合多くの問題が生じることが予測されたため実測調査の対象から除外した。

2-B号横穴

1、2号横穴直下の崖面に小さく開口する穴を今回の調査において発見した。この穴のレベルは道路面とほぼ同じ高さで開口しているが、穴の主体部は道路面より下であることが確認された。このことから横穴の可能性が強く、2-B号横穴として取り扱った。しかし、道路下に羨門等が存在することや、開口部分が非常に小さく作業が出来ないことなどから実測調査の対象から除外した。

3号横穴 (第6図)

1、2号横穴の北側には西に向って大きな谷が台地裾部を刻んでいて、この谷を狭んで対峙するように3号横穴が存在している。1号横穴からは東北東の方向約40mの距離に位置し、隣接して4、5号横穴が続いている。

横穴は玄室前半分を崩壊して、保存状況としては良くなかったが、主軸をN6°Wにとり、ほぼ南に開口していたものである。そのため奥壁幅181cmを測るのみで、他については計測不能であった。

床面は破損が大きく、奥壁から50cmの所まで達していたが、残存部分には仕切の痕跡も見られな

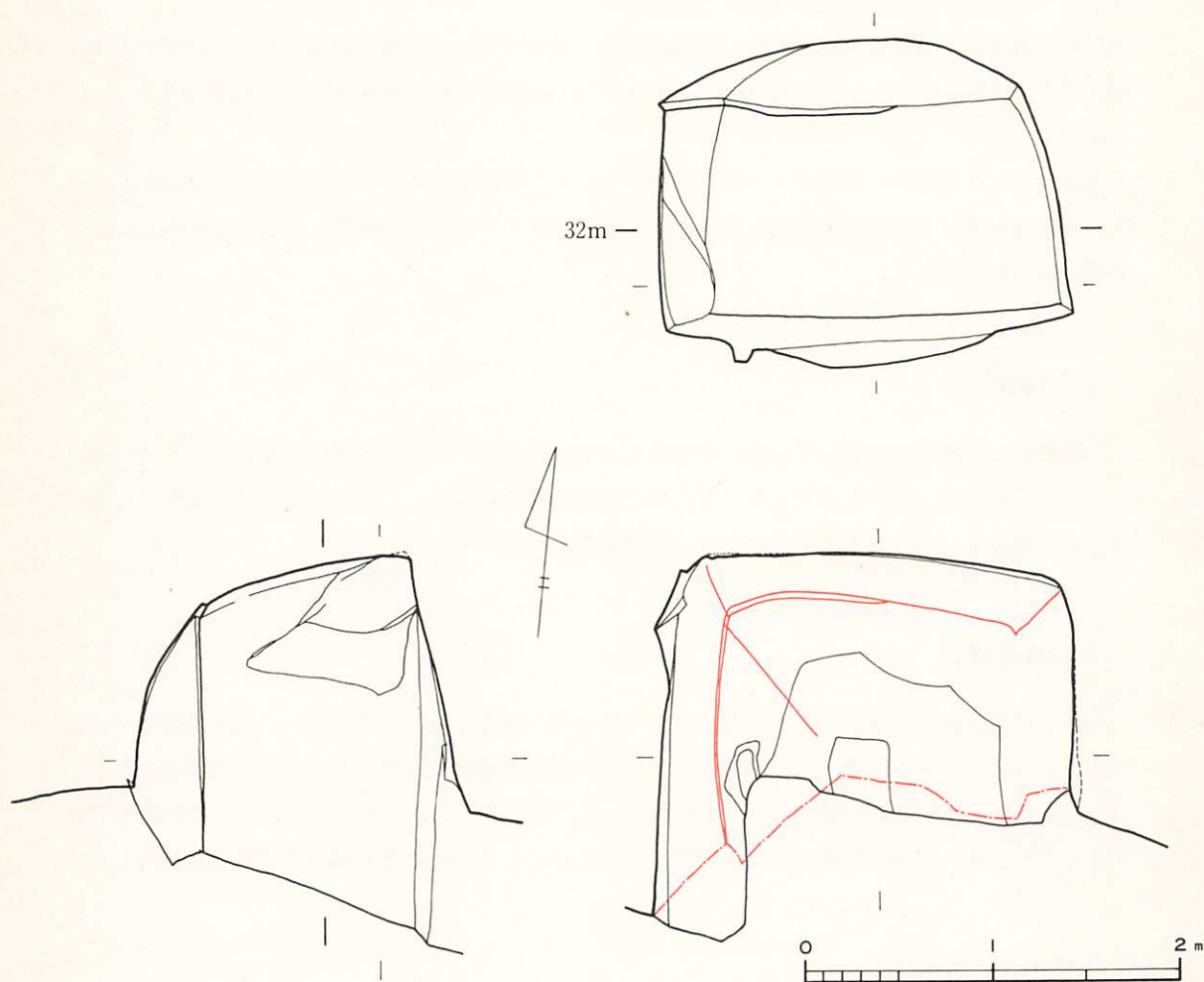
いところから平坦になるものと考えた。

奥壁左側コーナーでは岩盤の亀裂が表われ、壁面の剥離も生じており、将来さらに崩壊する可能性が高いものと思われる。

左側と奥には軒を刻んでいたが、右側には見る事ができなかった。さらに天井の構造も、寄棟造が切妻造かも断定できない程の曖昧な造りであった。

特徴としては壁面の高さに比べ天井の高さが極端に低く造られている。

遺物は出土していない。



第 6 図 3号横穴実測図

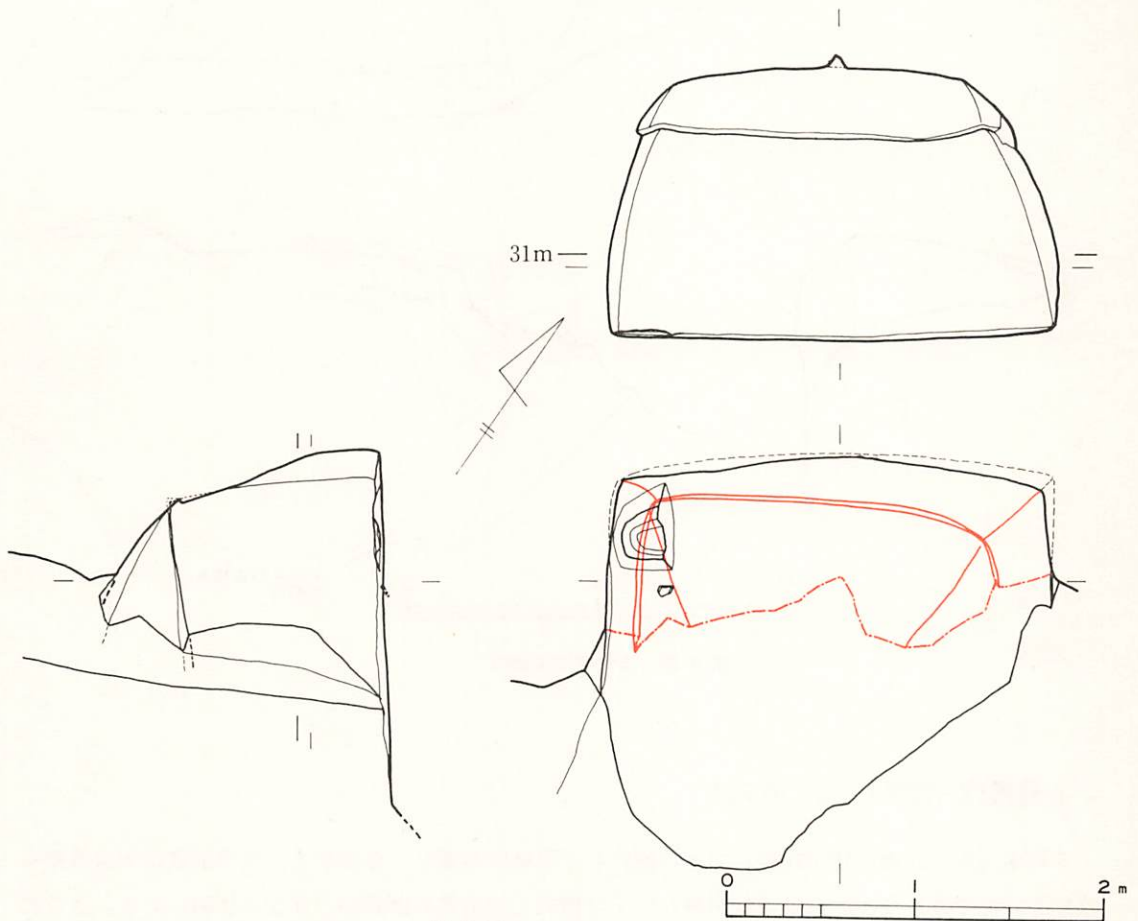
4号横穴 (図版2-1.2 第7図)

3号横穴の右隣りで、5号横穴との間に挟まれて存在している。主軸はN34°Wにとり、南南東に向って開口している。

この横穴も前半分を崩壊し、僅かに奥壁の周辺のみを残していると言えよう。そのため計測でき

たのは奥壁幅230cmのみであった。床面は平坦であるが、奥壁左側に作付の枕を配しており、この枕が浮彫であるところから、横穴築造時のものと断定できた。

天井には軒先線を刻んでいるが、棟の状態については寄棟造の平入りになるものと推察される。



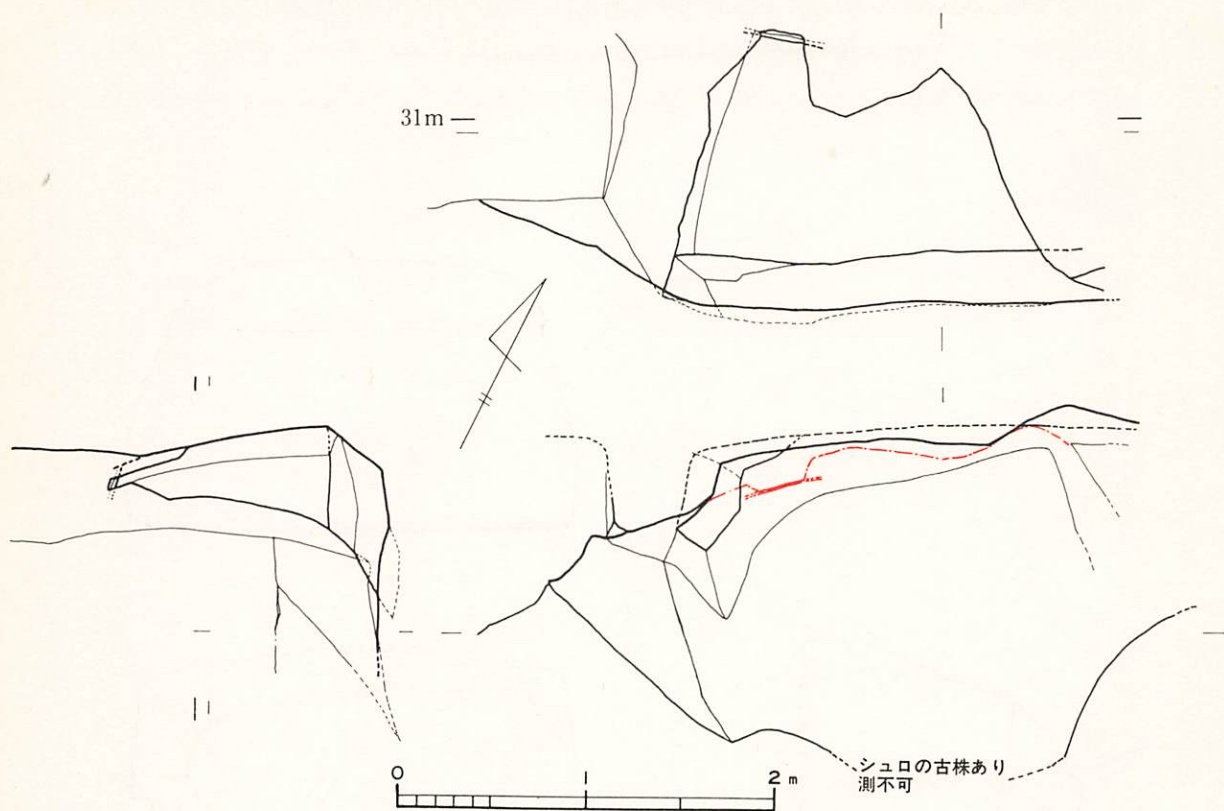
第7図 4号横穴実測図

5号横穴（第8図）

4号横穴の横に位置し、奥壁の一部を残す程度に崩壊が著しい横穴であるが、奥壁から考えて、主軸はN27°Wにとり、南南東に向って開口していたものと思われる。

床面は奥壁に残されたラインから平坦になるものと思われる。また軒先線も僅かに確認することができ、さらに奥壁において丹の痕跡を確認できた。

なお4号横穴と接するように造られ、床面では約55cm程低くなっていたが、このことから横穴築造の前後関係を考えるまでは至らなかった。



第 8 図 5号横穴実測図

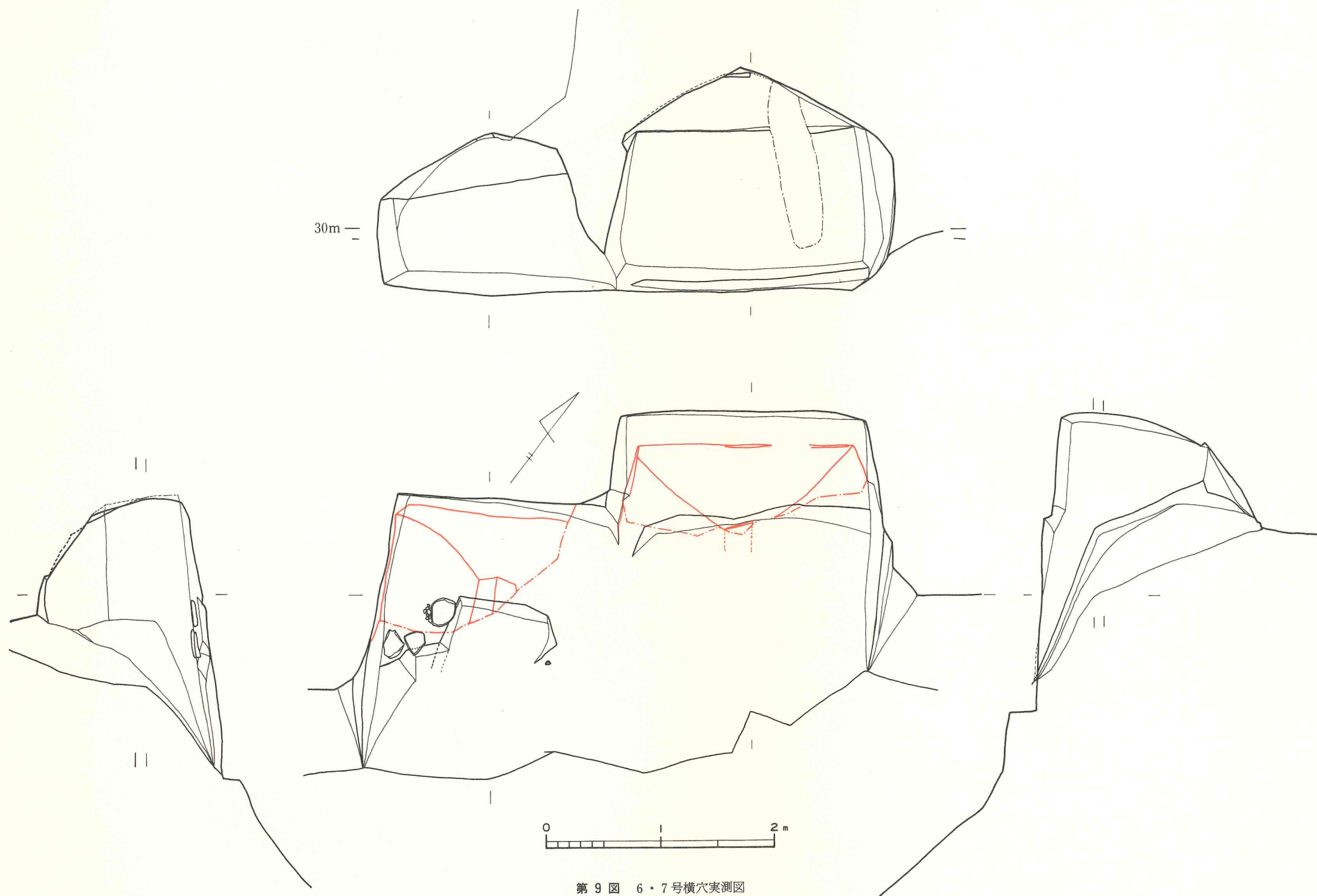
6号横穴 (図版2-3 第9図)

5号横穴から北東に15m程離れて6号横穴と7号横穴が接して存在する。6号横穴は本来側壁を残していたであろうが、今日では崩壊して7号横穴との境界の確認ができない状態にある。さらに横穴自体も前半分を大きく欠いているため、計測に値する部分を何ら残していない状況である。

主軸はN34°Wで南南東に向って開口しており、羨門の形式等は不明である。床面は「コ」字形もしくは「L」字形の屍床になるものと思われる。さらに扁平な礫を床面から20cm程の高さに残しており、二次的な礫床の可能性も残している。

天井は寄棟造の妻入りとなって、線刻様に軒先線を残していた。

この横穴では壁面が直線的に掘られており、その高さが天井の高さに比べると低いのが特徴である。



第9图 6·7号横穴实测图

7号横穴 (図版2-3 第9図)

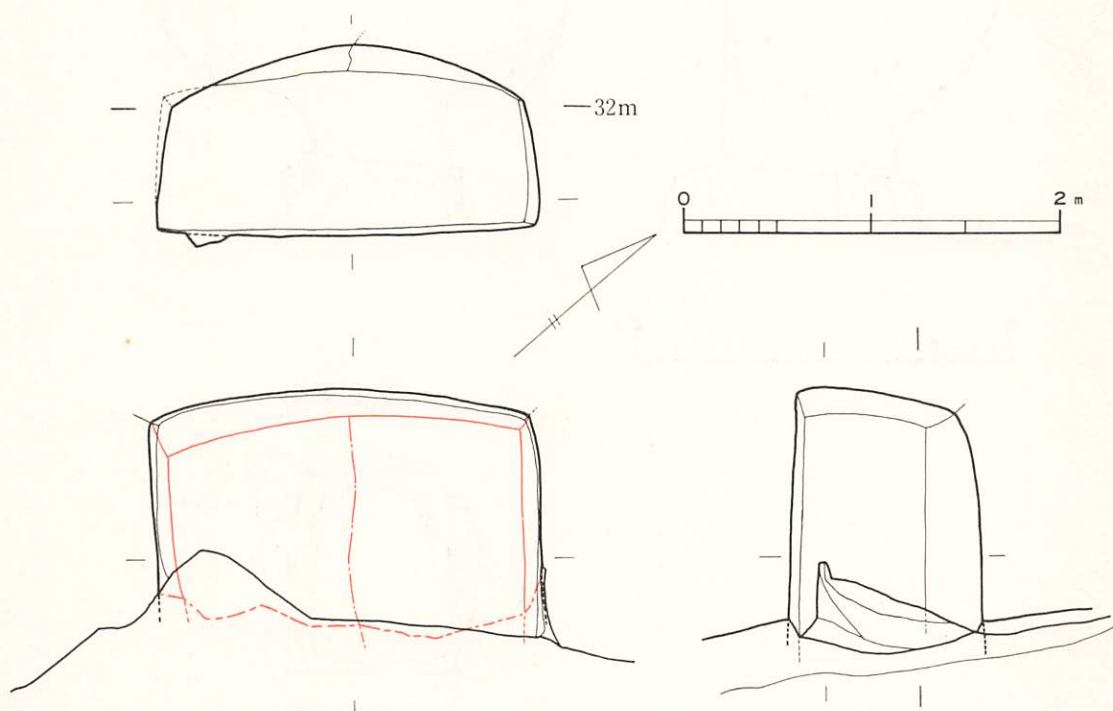
6号横穴と接して存在し、奥壁を中心として残存する横穴である。主軸はN35°Wでほぼ南南東に向けて開口していたものと思われる。奥壁幅210cm、床面から天井まで192cmを測り、他は計測できなかった。床面は奥壁に沿って6~10cmの高さで一段高くなっていた。天井は寄棟造の妻入りで、軒先線を残している。

遺物としては亀甲の細片が散在する形で残っていた。

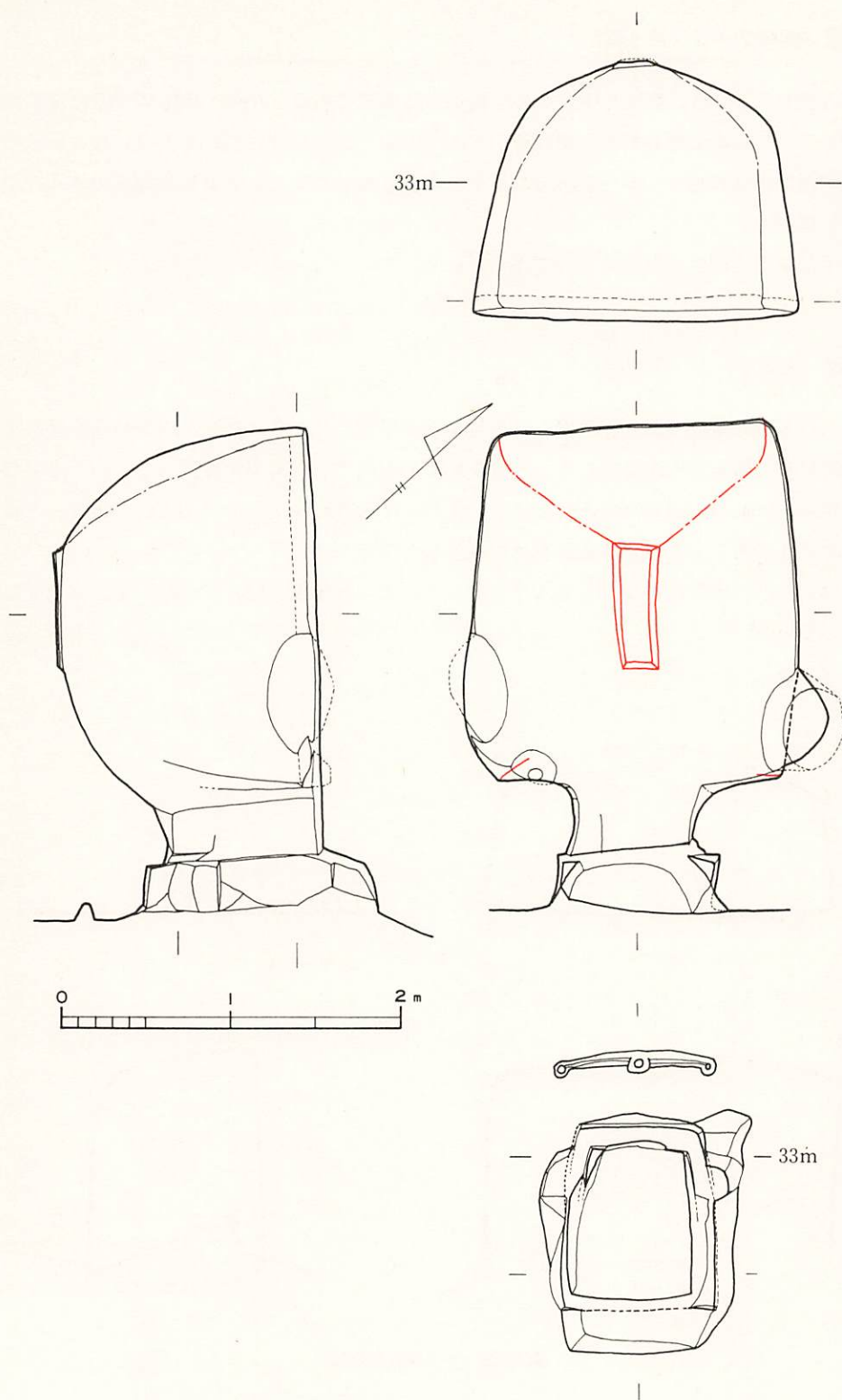
8号横穴 (図版3-1 第10図)

7号横穴から6m程離れており、隣接して9号横穴が位置している。横穴の前半分を崩壊していて、奥壁と側壁の一部を残す程度である。主軸はN50°Wにとり、南東方向に開口していたものと思われる。奥壁幅200cm、高さ100cmを測り、プランに対して天井が極端に低く造られている。とくに壁面高が65cm程度に対し、天井の高さは30cm程度にしかない。

床面は平坦となり、天井は切妻造で妻入りとなっていて、軒先線も刻んでいた。また、全面に丹の痕跡を残していた。



第10図 8号横穴実測図



第11図 9号横穴実測図

9号横穴（図版3-2 第11図）

8号横穴から僅か3m離れている程度だが、約1m高い所に築造され、羨門まで完全な姿を留めている横穴である。主軸はN48°Wにとり南東方向に開口している。

羨門は長方形で飾縁を有しているが、羨門直上と羨門上部に二次的加工が見られる。とくに直上の加工は、3本の釘を水平方向に打ち込み入口の庇とした可能性が強い。なお現状では高さ90cm、幅45cm程度になる。

玄室はやや膨らむ長方形のプランで、入口部分幅166cm、奥壁幅155cm、奥行210cmを測る。

床面は全面にわたり二次加工が施され、約10cm程度掘り下げており、左右の側壁に沿って穴を掘っていた。なお旧床面はその痕跡から平坦であることが判明した。

天井はドーム形だが長さ74cm、幅27cm、深さ5cmの棟を刻んでいるところから寄棟造の妻入りと受け取ることができる。いづれにしても特異な天井であった。

10号横穴（第12図）

9号横穴から約25m離れ、1号横穴からは実に直線で100mを超す地点である。隣接して11号横穴が存在する。

羨門の一部を破損しているのみで保存状態が良い横穴である。主軸をN31°Wにとり、南南東に向開口している。羨門部には高さ125cm、幅123cmのほぼ正方形に飾縁を造り、中心から右寄りに高さ84cm、幅64cmの長方形の羨門を設けている。

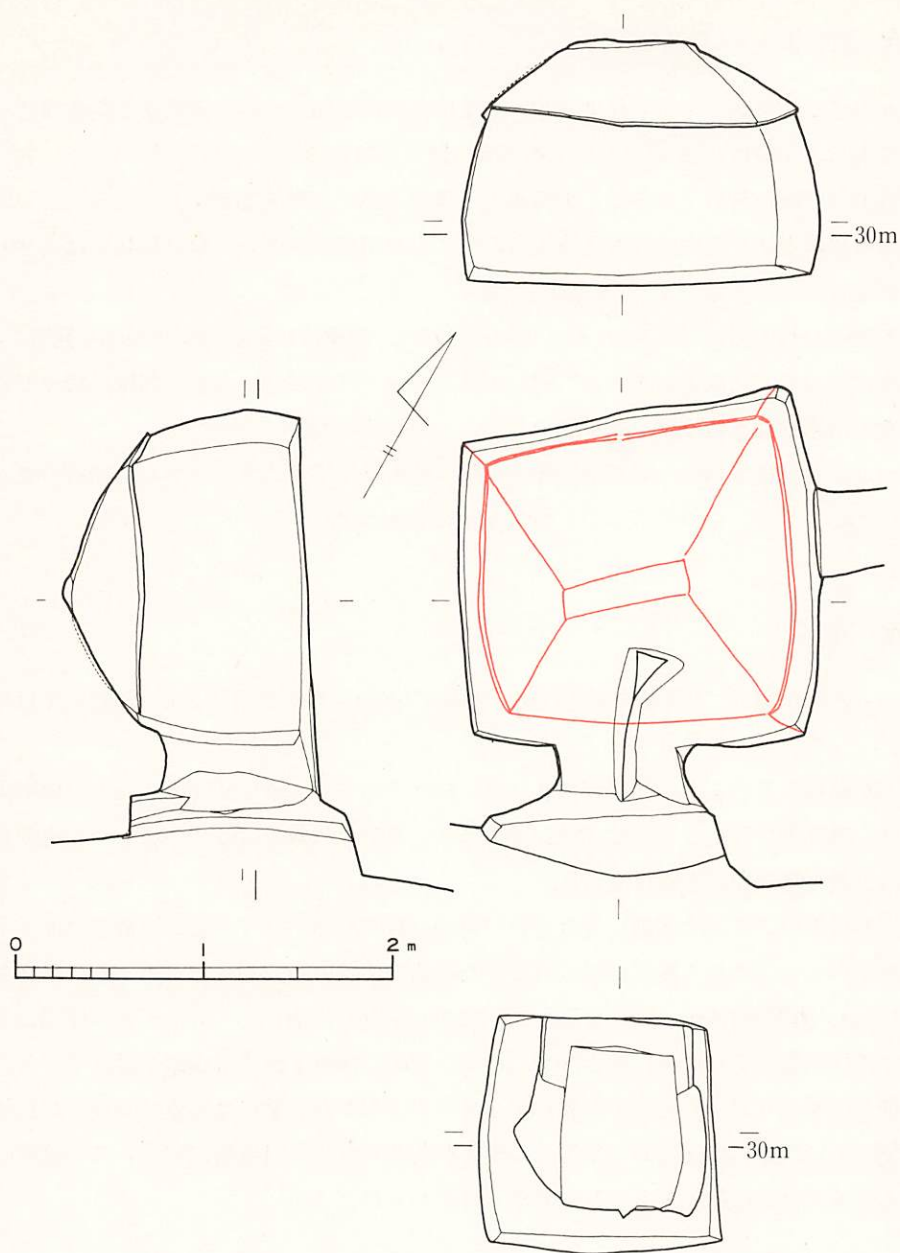
玄室は正方形に近いプランで床面には凝灰岩の角礫が敷き詰められていたが、横穴が地上1mの位置に開口しているところから後世に持ち込まれた可能性が強いので図化しなかった。大きさは入口部分で幅175cm、奥壁幅169cm、奥行175cm、高さ130cmを測り、造りとしては丁寧に仕上げていた。床面は平坦で羨門部近くでは中央に長さ80cm、幅30~12cm、深さ4cmの排水路を設けている。

天井は寄棟造の平入りで、軒先線を四面に刻んでいた。なお右側壁には直径47cmの穴が11号横穴に向かって開いていたが、内面において加工の痕跡が認められず、11号横穴においても奥壁の後を通過しているため人為的に開けたものとは考えられなかった。

11号横穴（図版3-3 第13図）

10号横穴の隣りで、かつては12号横穴との間に位置していた。10号横穴とは5mほどの距離だがレベルは約2mほど高く造っており、地上からも3m程度を測った。主軸をN49°Wにとりほぼ南東に向かって開口している。羨門部は一部崩壊しており、飾縁も一段を残しているが、外側にもう一段存在していたような感じである。大きさとしては高さ73cm、幅55cmと長方形で狭い羨門と言える。

玄室は扇形のプランでは入口部分幅145cm、奥壁幅237cm、奥行200cm、高さ108cmとなり、奥壁が

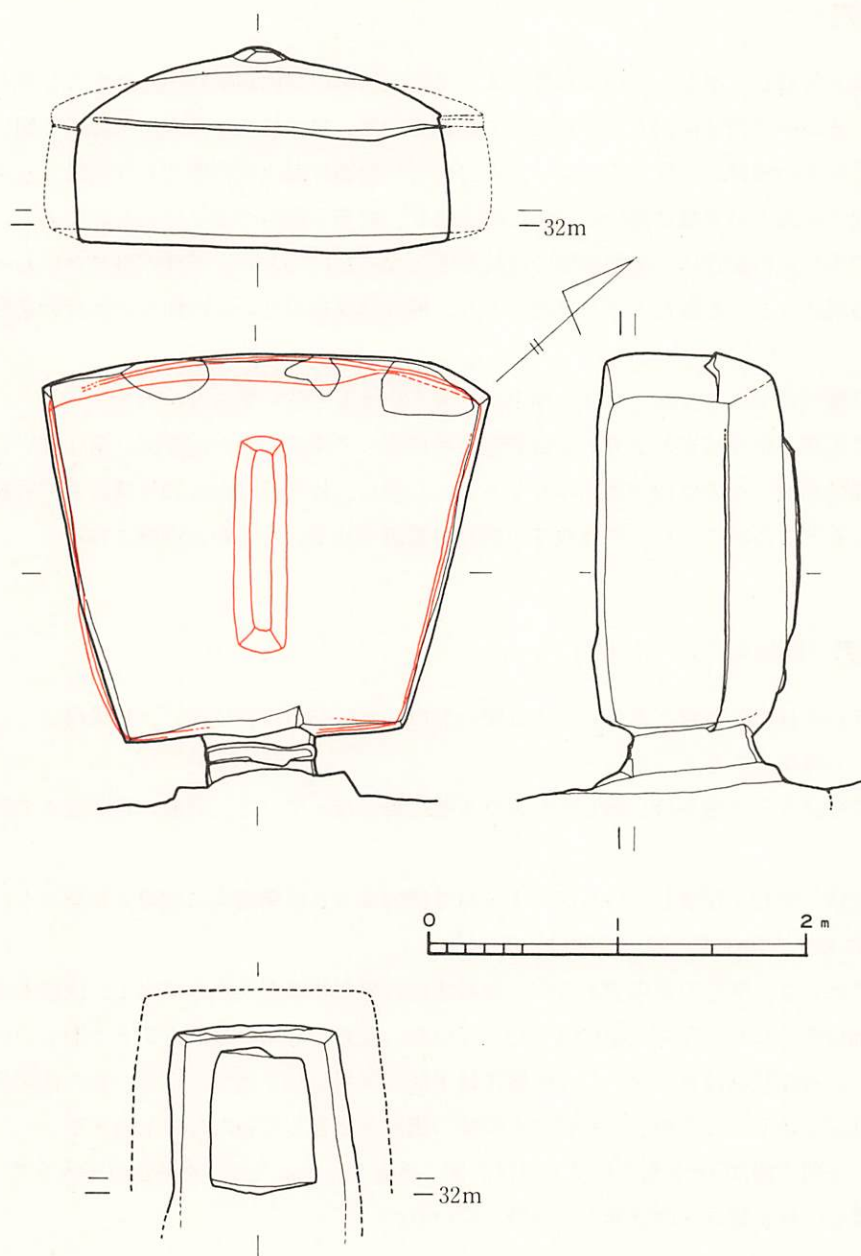


第12図 10号横穴実測図

曲線を描き、天井が極端に低い点に特徴がある。

床面は平坦で、羨門より一段低く造られている点は他に類を見ないものである。また、奥壁と床面の間には3箇所穴が開いており、10号横穴からの穴で自然現象による岩盤の間隙と判断した。

天井には中央に長さ115cm、幅29cm、深さ7cmの棟を刻み、軒先線も四面に刻んでいた。隅棟については棟に達しておらず、奥壁直上においては隅棟が左右一本化している点から切妻造で妻入りと考えた。先にも述べたが、この横穴は極端に天井が低いのが特徴で、天井の構造等も8号横穴との



第 13 図 11号横穴実測図

共通点が多く見られるようで、今後検討を要するであろう。

12号横穴

昭和60年8月31日、接近した台風13号によって高さ10mの崖面が幅20mにわたって轟音と共に崩れ落ちた。その中に12号横穴も含まれていて、かつては、11号横穴から5m程離れて開口していたが、今日ではその痕跡すら残していない。この付近の岩盤は凝灰岩の中でも比較的もろく、さらに崖上に繁茂する大木が岩盤に食い込む様に根を張り、数多く亀裂が生じていたのである。このような状況の中での台風の接近は、崖面崩壊の直接要因となったのである。城横穴群にかかわらず、全ての横穴群の現状はどれも似たような状況にあり、横穴群保存のためには樹木の伐採の必要性を感じた。

さて12号横穴については以上の様な理由から何ら記録をとるに至らなかった。

なお県文化課および熊本大学考古学研究室の手によって作成された配置図（第3図）によれば、今回の台風で消滅したのは12号横穴のみである。しかし、12号横穴から13号横穴まで約40mの距離を有しているところから、かつては数基の横穴が築造されていたものと推察される。

13号横穴（図版4-1 第14図）

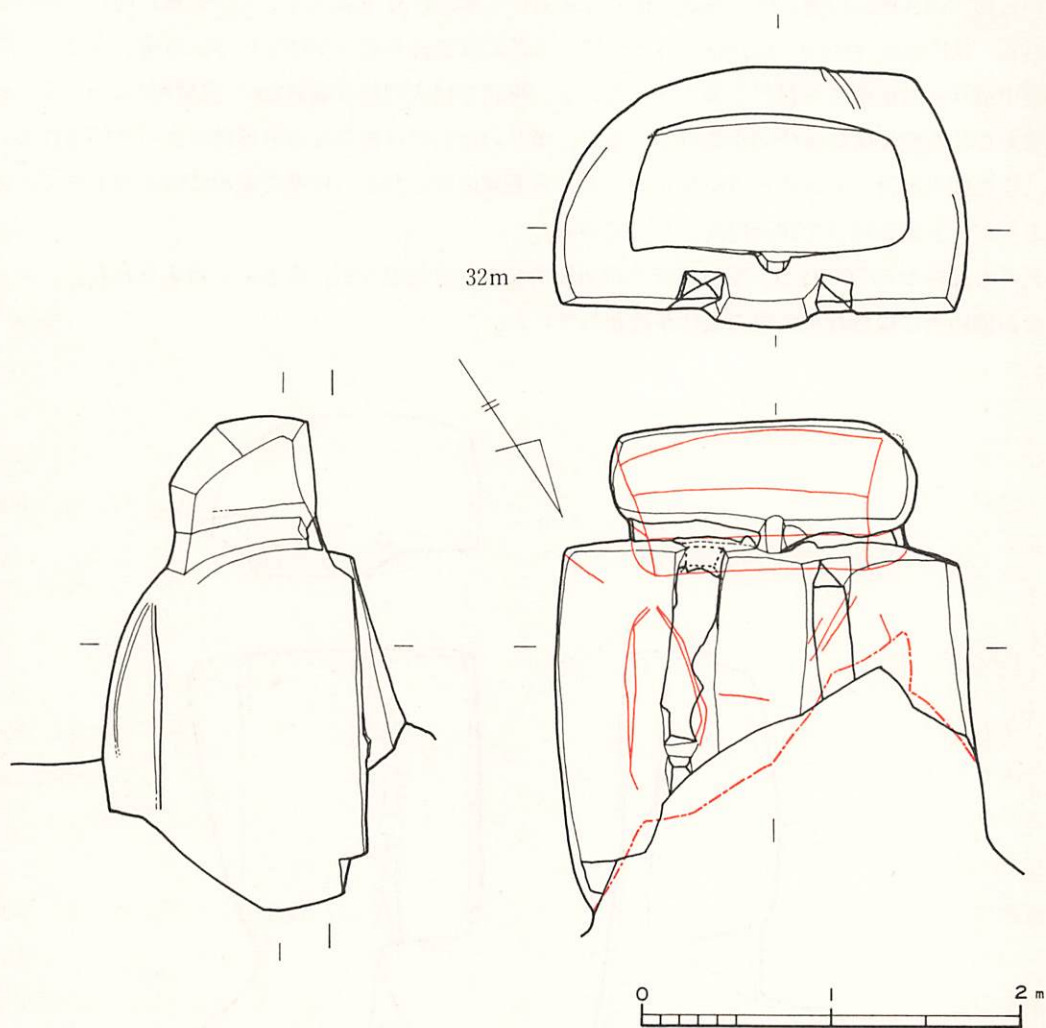
11号横穴から48mの距離にあり、ここは間口23m、奥行45mの谷に面し、14号横穴とともに15、16号横穴と対峙する形をとっている。

この横穴にはガラス瓶をはじめとしたガラス捨て場となっていて、実測に達するまで時間をとられた。

横穴は全体の半分を崩壊しているが、1～11号横穴までとは構造的に相違点が認められる。主軸はN34°Wにとり、北北東に向って開口している。

基本的には「コ」字形の屍床であるが、奥屍床は石屋形状に造り出していて、床面も手前に比べると約20cm程高くなり、天井は逆に低くなっていた。左右の屍床には「ゴンドラ形」の仕切が造られていたが、残存状況は良くない。左側屍床は手前に平坦な枕を造っている、また仕切の中央には排水溝を刻んでいるところから、右側にも同様の施設が存在していたものとする。

奥屍床の手前で幅207cmを測る程度で他は計測できなかった。天井は寄棟造の平入りで、棟と隅棟の一部を残し、軒先線は左側壁面上のみ残っている。



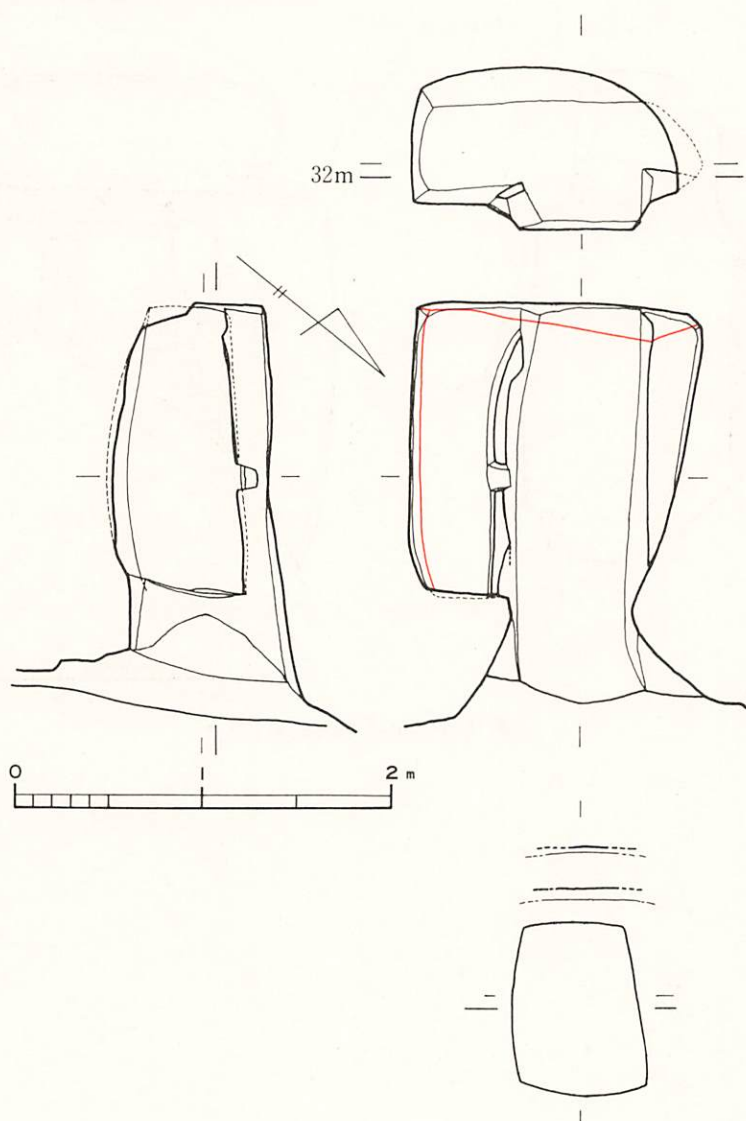
第 14 図 13号横穴実測図

14号横穴（図版4-2 第15図）

13号横穴の西側に位置した未完成の横穴である。主軸はN52°Eにとり、ほぼ北東に向って開口している。羨門は高さ93cm、幅70cmの長方形で、上部には飾縁を造りかけている。玄室は通路と左側屍床を造り、右側屍床へ移行しようとしている。現状では入口部分幅112cm、奥壁幅150cm、高さ84cmである。左側屍床には仕切を造っているが、奥壁の直前では曲りながら通路によって切られている。また中央部近くでは排水溝を刻んでいる。右側屍床はこれから作業を進めていくつもりで、床面のレベルも高い部分で10cm程高くなっている。

天井も通路からでも84cm、左側屍床で70cmしかなく、今後掘り広げるものと考えられた。

なお通路上には無数の亀甲の破片が散在していた。



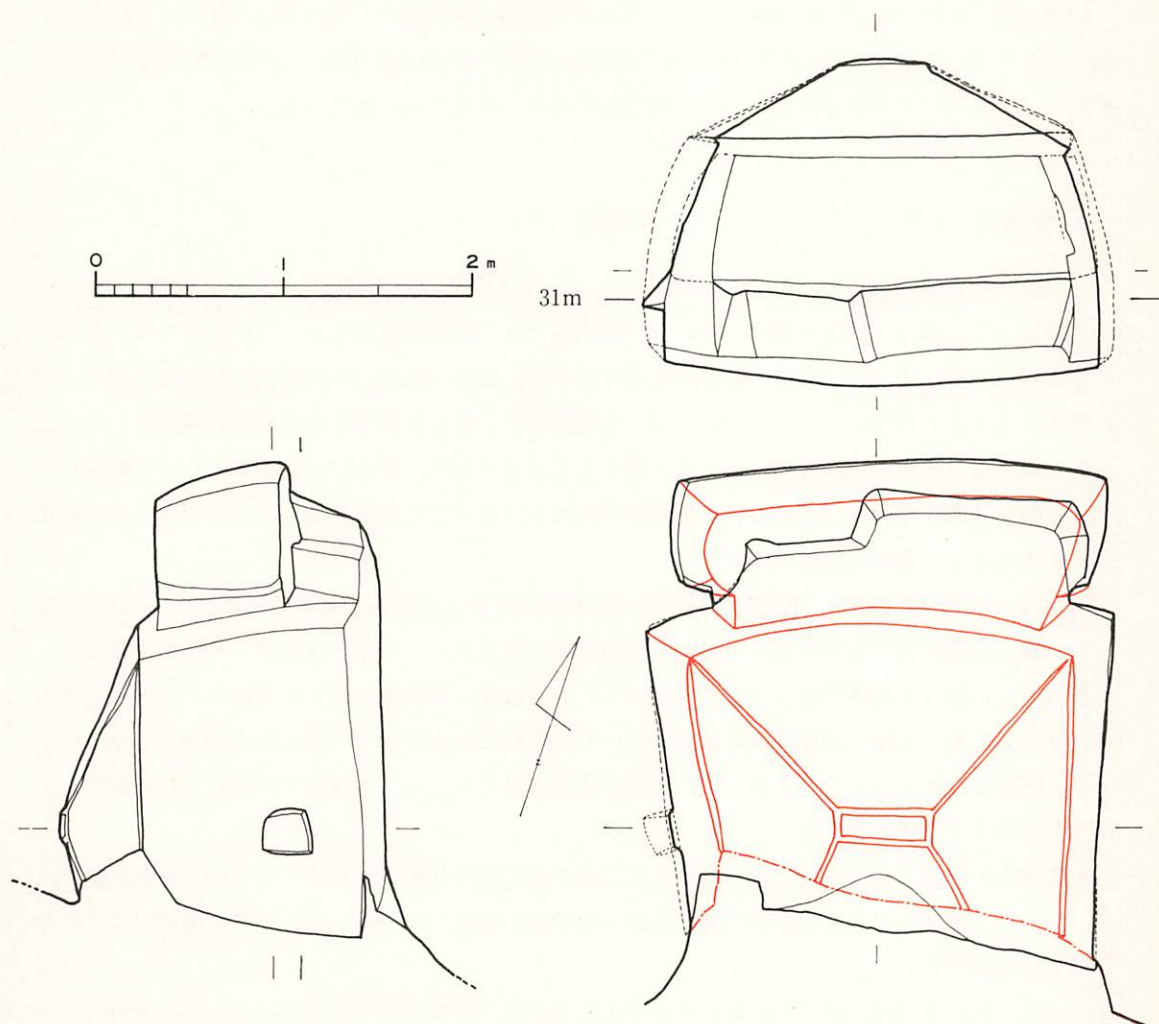
第15図 14号横穴実測図

15号横穴 (図版4-3 第16図)

13、14号横穴と谷を挟んで対峙する形で位置している。谷の奥には横穴の構築は見られず、意識的に入口部分に留めて造っていると言えよう。16号横穴と並んで開口するこの横穴は、羨門および玄室の前半分を崩壊している。主軸はN18°Wにとり、南南東に向って開口していたことが判る。

プランは長方形の玄室に奥屍床を石屋形状に造り出している。玄室は壁面が直線的で、奥屍床の手前で幅248cmを測る。床面は全面に約10cm程削られており、その深さから、通路や左右屍床の仕切等が存在していたとは考えられず、平坦な床面であろう。奥屍床の床も約半分削られているが、現高で玄室正面との差が35cm程度で、本来でも25cm程度高くなっていたことが判る。

天井は極めて美しい家形をしており、寄棟造で平入りとなっている。棟は長さ53cm、幅20cmの長方形で、隅棟線も明瞭に刻まれている。軒先線は左右の壁面上は段をなして造られているが、奥で



第16図 15号横穴実測図

は線刻となっていた。

左側壁の中央部に棚状の堀り込みが見られるが、床面の破損と同様後世加工されたものと考えた。

16号横穴（図版5—1.2 第17図）

15号横穴と並んで開口するが、谷の入口部分に位置するため、横穴東側から崖面が大きく北側へと折れている。そのため17号横穴と直交する様に構築されており、奥壁には後世17号横穴と通じる穴が穿たれている。この横穴は主軸をN7°Eとほぼ南に向って開口しており、城横穴群の中で唯一の複室墓であるが、残念な事に前室の前半分を欠いていた。また、床面と第二羨門、さらに奥屍床天井において破損が著しいようで、屍床の状態も奥屍床を石屋形状に造り出している程度しか判らない。

前室は第二羨門で幅266cmを測るのみで、天井は隅棟線と軒先線の一部を残しており、寄棟造の平入りであろう。玄室は手前で幅235cm、奥で209cm、奥屍床幅149cmを測り、全体の奥行は現行533cmを測る。玄室天井も寄棟造の平入りで、奥屍床天井は一段低く造られている。

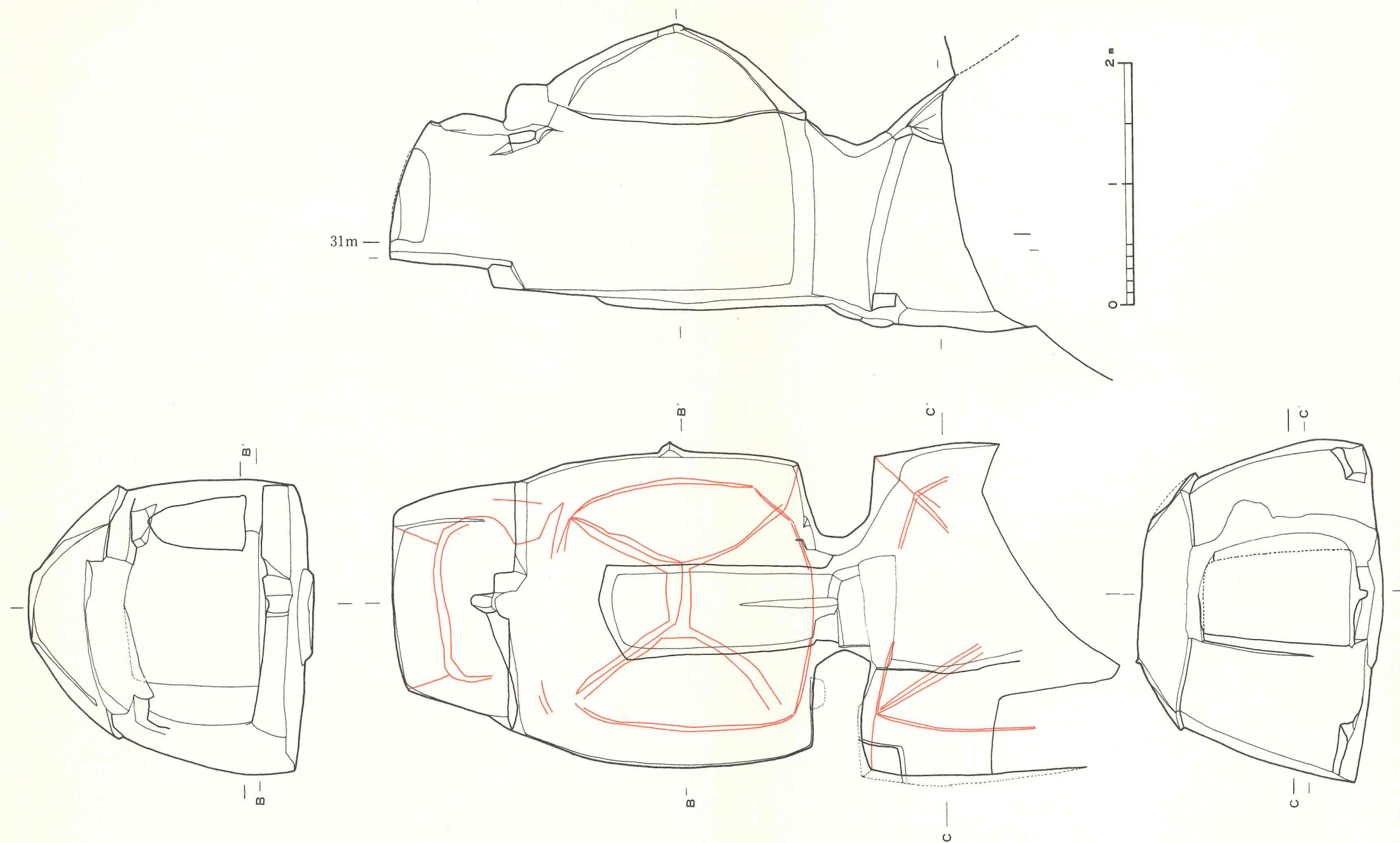
17号横穴（図版5—3、6—1.2.3 第18図）

16号横穴の北側に位置し、主軸をN77°Wにとり、ほぼ東に向って開口している。横穴としては、内部構造も他の横穴と趣きを異にしている。羨門部には二重の飾縁をもち、方形を呈していたが、後世の破損を受けているため入口部分の大きさは不明。また、羨道が長く玄室まで230cmを測り、他の横穴と比べても極端に長い。玄室のプランも変則的で、奥と右屍床は石屋形状に造り出しているが、左屍床にはそれが見られず、仕切すら見る事ができない。さらに、奥屍床は、中心線から大きく右側に移動しており、これは16号横穴の存在によって生じた現象と見る事ができ、その前後関係を考える上で重要な点となろう。

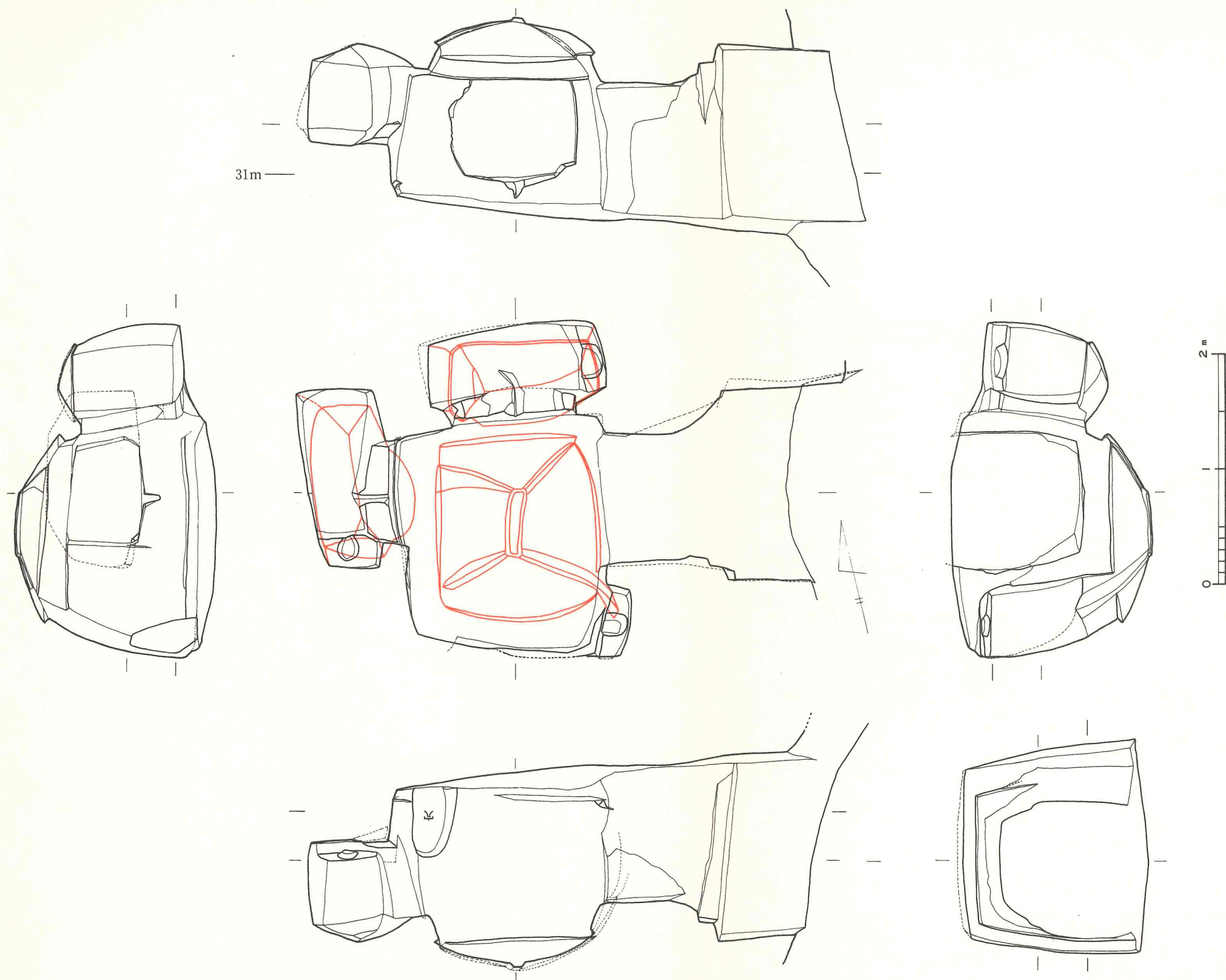
玄室は入口部分で210cm、奥壁では168cm、奥行180cmを測る。屍床は基本的には「コ」字形といえるが、奥と右側の屍床は先に述べたように石屋形状に造り出している。さらに、それらの屍床は、壁面に対し右側へずれ込むように造られている。天井は共に寄棟造の平入りである。左側屍床については仕切も無く玄室と直接続いて造られていて、壁面には16号横穴へ通じる穴が開けられている。また、屍床には枕を造っているが、その位置が羨門側にくい込んで造られている点も16号横穴との関連性を考えることができよう。

本来横穴を単独で造る場合、左右対称もしくはそれに近い状態に仕上げるといった原則が見られる。しかしこの横穴ではその原則に従えなかった理由が存在している。それは隣に横穴がすでに存在していた事である。

しかし、他に未完成の横穴が存在しているところから、作業途中で廃棄することも出来たにもかかわらず、湯の口横穴群182号横穴で見られたように、意識的に変則的な横穴になってでも完成させている点に、真の理由があるようではない。



第 17 图 16号横穴实测图



第 18 图 17号横穴实测图

さてこの横穴の構築順序について整理してみよう。

1. 羨門を掘り、整える。
2. 玄室内を奥壁近くまで掘り、左側へ拡張する。
3. 左奥壁で16号横穴と接していることを確認する。
4. 左屍床は石屋形を造ることを断念し、枕を羨門側に大きくくい込ませて造る。
5. 奥壁の石屋形を大きく右側に移動させ掘り始める。
6. 屍床も右側に伸びる形で掘り、天井、枕等を整える。
7. 右側の石屋形を僅かに羨門側に移動して掘り始める。
8. 屍床や天井、枕等を整える。
9. 玄室天井を整える。左側屍床は仕上げの状態に至らず完成させる。

以上の順序が考えられ、16号横穴の構築が先行し、その後17号横穴を構築したものと考えられた。

18号横穴（図版7-1 第19図）

17号横穴と約10m離れて存在するこの横穴は、主軸をN75°Wにとり東北東に向かって開口している。羨門は左側を破損しているが、残存状態から長方形で飾縁を有していることが判る。

玄室は扇形のプランで入口部分幅156cm、奥壁幅190cm、奥行210cm、高さ120cmを測る。

床面は平坦で仕切等何ら見られない。天井は寄棟造の妻入りで、妻側が一段浮き出たように造られている。壁面には丹を塗っており、恐らく全面に施していたものと思われる。

遺物 床面左奥隅に亀の甲が散在する形で出土している。

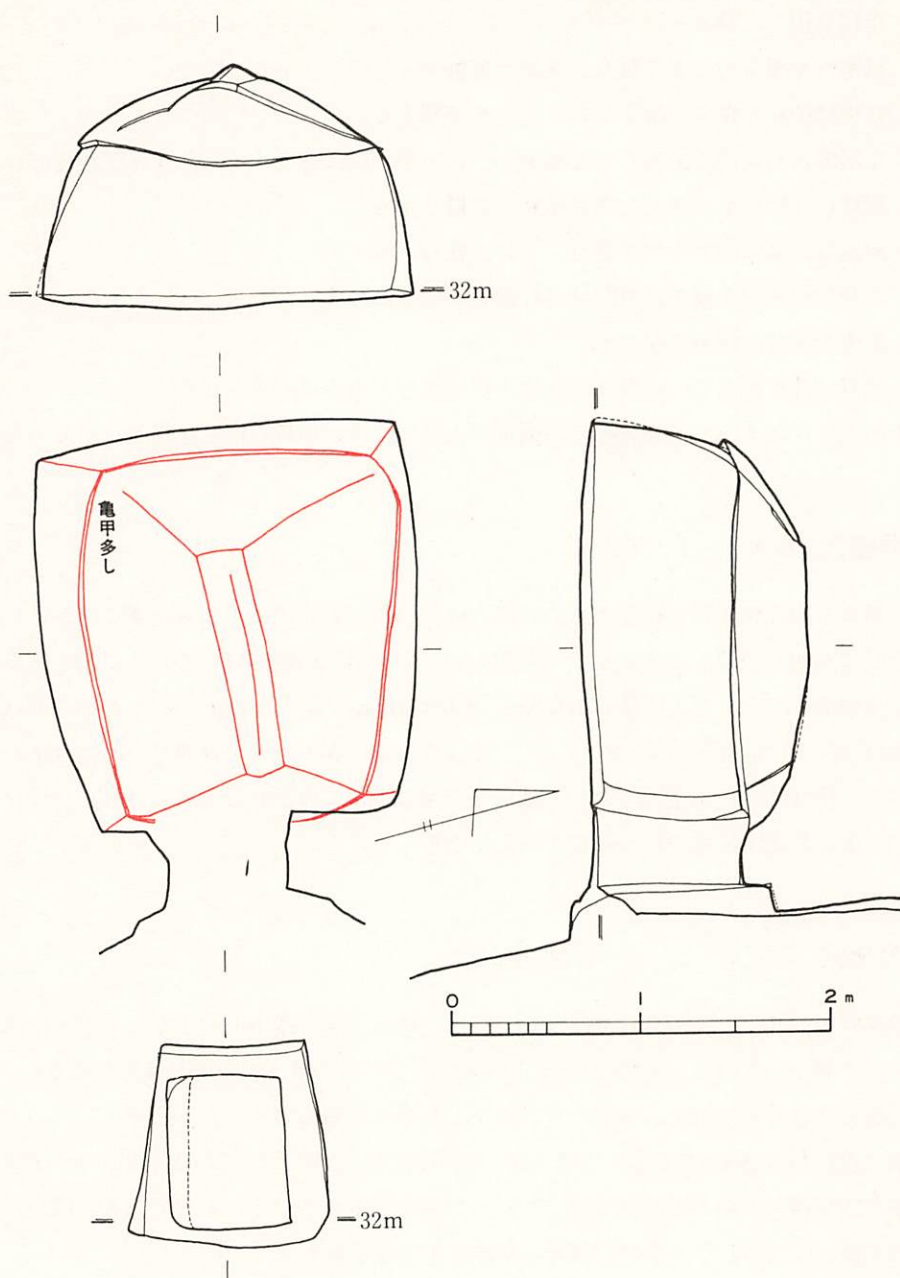
19号横穴（図版7-2、8-1.2 第20図）

18号横穴から北に約20m離れて存在している。横穴は崖面途中の地上3～4mの位置に20、21号横穴と共に開口している。主軸はN90°Eで東に向っているが、未完成の横穴である。

羨門部はほぼ完成に近く、玄室に対してかなり早い段階での仕上といえる。

玄室は羨門から280cmまで達して掘られ、その後左右に掘り広げていることがうかがえる。その際右側壁で20号横穴を切る可能性が高くなったため作業中止となったものである。現在これらの横穴は小穴で接している。ここで横穴構築の順序について整理しよう。

1. 羨門を掘り、形を整える。
2. 羨門から玄室奥壁予想地点に向って掘り進む。
3. 左右の屍床高を考慮しつつ左右に掘り広げる。
4. この段階で右側の横穴を破損する恐れがあるため作業を中止する。
これ以後の手順としては次の順序が考えられる。
5. 奥屍床および左右屍床スペースを確保するよう掘り広げる。
6. 各屍床を整える。



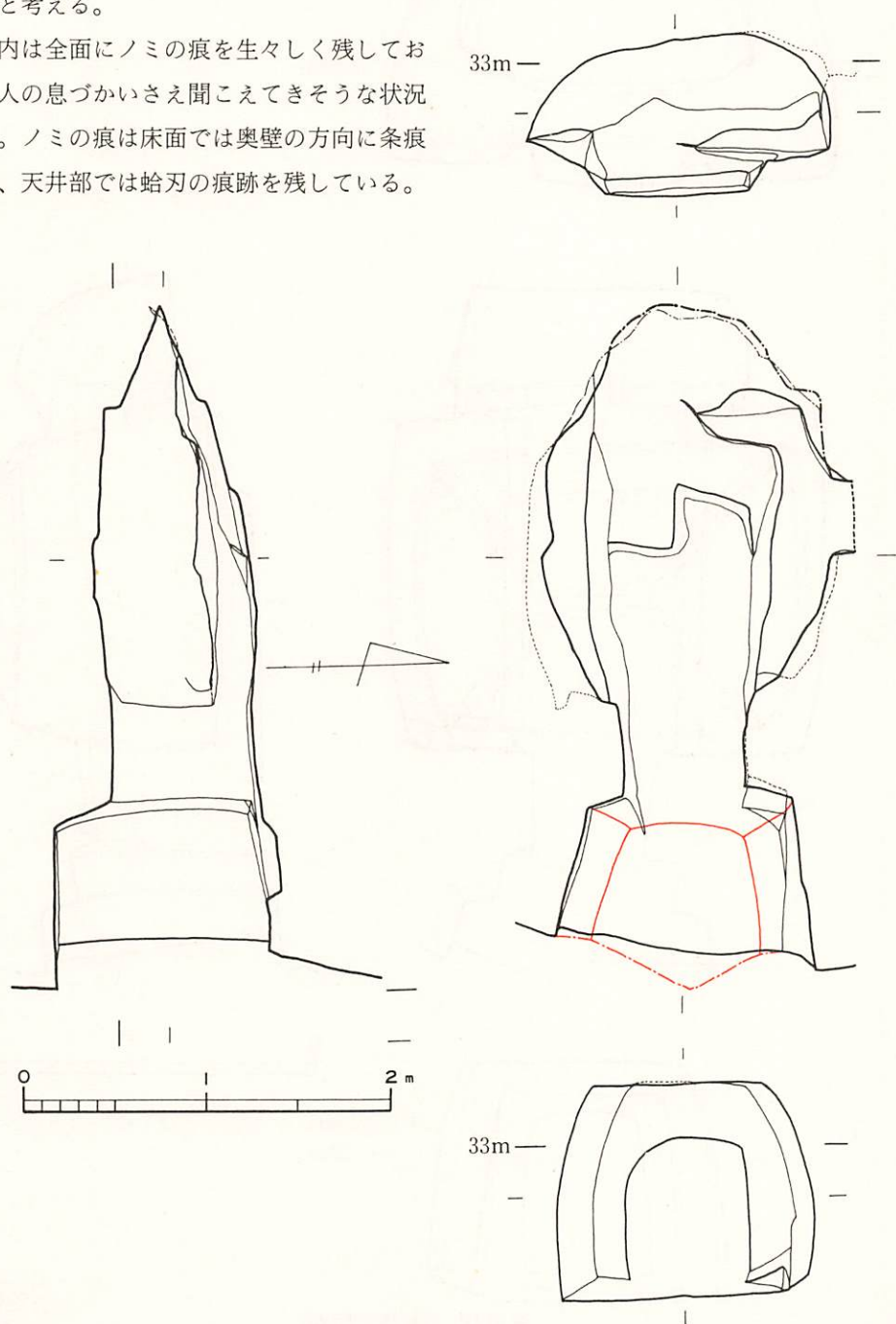
第 19 図 18号横穴実測図

7. 天井部を広げて整える。

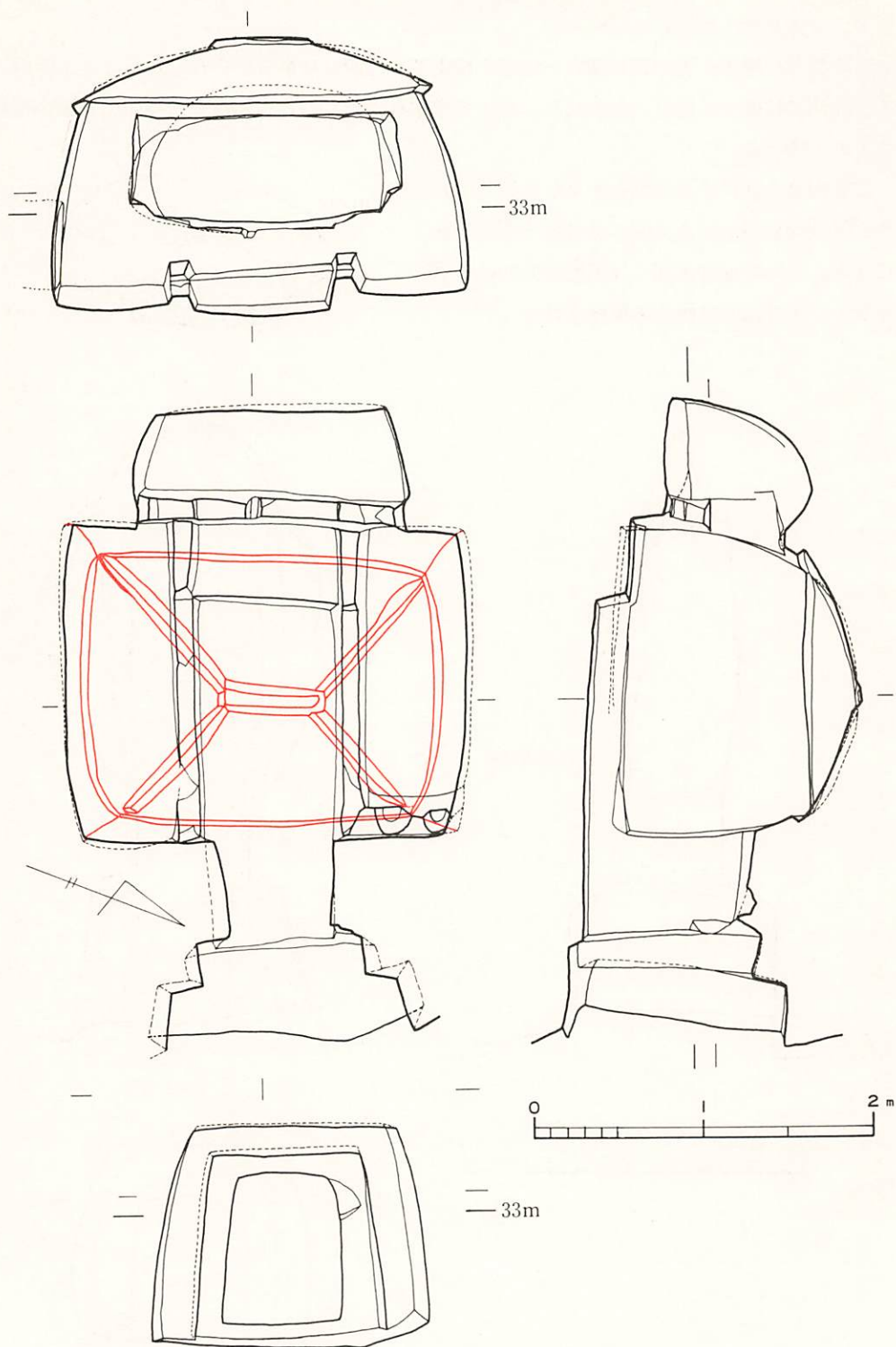
8. 全体を仕上げる。

この横穴の場合、先の17号横穴とは逆の現象で、左側には横穴が存在しないことが明白であるので、左側に拡張すれば良いものだが、あえて作業を止めている点に横穴構築の不文律が存在していたものと考ええる。

玄室内は全面にノミの痕を生々しく残しており、工人の息づかいさえ聞こえてきそうな状況にある。ノミの痕は床面では奥壁の方向に条痕をなし、天井部では蛤刃の痕跡を残している。



第 20 図 19号横穴実測図



第 21 図 20号横穴実測図

20号横穴（図版8—3、9—1.2 第21図、第22図）

19号横穴と21号横穴の間に位置し、主軸をN68°Eにとって東北東に向って開口している。羨門は高さ91cm、幅70cmの長方形で、二重の飾縁を有していた。羨門右側の崖面には、21号横穴と挟まれる形で人物、盾、鞆のレリーフが刻まれている。

玄室は入口部分で幅220cm、奥で236cm、奥行190cmの方形で、奥壁には石屋形を造り出している。そのため玄室では通路を挟んで左右に屍床を設け、右側の屍床では羨門側に2個の石枕を造り出していた。また通路についても奥屍床の手前で18cmの高さにステップを有していて、左右屍床の仕切もそれに合わせるかのように一段高く造られている。天井は寄棟造の平入りで、軒先線も四面に刻まれていた。奥屍床は左右の屍床に比べ40cmも高く造られ、天井も独立してドーム状をなしていた。

全体の仕上げは丁寧に、丹の痕跡が奥壁の一部に認められるが、玄室内と羨門の全面に丹を塗っているとは断言できない。



第22図 装飾文様実測図（熊本県装飾古墳総合調査報告書より引用）

なお、装飾に関しては高木正文氏が詳細な観察をされているので引用してみよう。^{註2}

「装飾は右外壁に人物1、盾2、鞆1が浮き彫りされているが、21号との間にあり、配置の状態から両方の横穴墓の共有の装飾と考えられる。ここでは都合上20号に近い人物と盾1を20号のものとみて説明したい。盾は横穴墓のすぐ右側に彫られており、単純な長方形であるが、上辺が下辺よりも短い。大きさは幅18cm、高さ40cmを測る。人物は盾の右上に彫られており風化のため輪郭が不明瞭であるが顔は丸く、口は大きく裂け、目はつり上がっている。左腕は欠損しているが右腕を上げ、両足は開いている。顔の付近には赤の彩色の痕跡が認められる。人物の大きさは高さ約80cmである。」

昭和61年4月、風土記の丘事業として城横穴レリーフの製作に際し、再度現地での確認調査を実施した結果、人物右腕の外側に長さ36cmの矛もしくは槍状の武器を配していることが明らかとなっ

た。この文様については図化しておらず、山鹿市立博物館東側の「古代の森」において製作展示を行っているので来館のうえ見学していただきたい。

21号横穴（図版10—1.2.3 第22図）

20号横穴と装飾文様（レリーフ）を挟んで北側に位置する。主軸はN80°Eでほぼ東に向って開口している。羨門は高さ85cm、幅70cmの方形で、二重の飾縁を有している。羨門の床は玄室内や羨門外の床より一段高く造られ、中央には排水溝を刻んでいた。玄室は入口部分で207cm、奥壁が234cm、奥行195cmの方形プランで、中央に通路、左右に屍床を設けている。屍床には枕等はないが、仕切を有し中央には排水溝を切っている。通路では羨門側に小さなステップを有していた。天井は寄棟造の平入りで、軒先線も四面に刻んでいた。

羨門および玄室内壁面に丹の痕を認めることができた。また玄室内羨門寄りの壁面に工具の痕跡を残していて、幅7～7.5cmの大きさであることが判明した。

装飾については再び高木氏の観察による。^{註3}

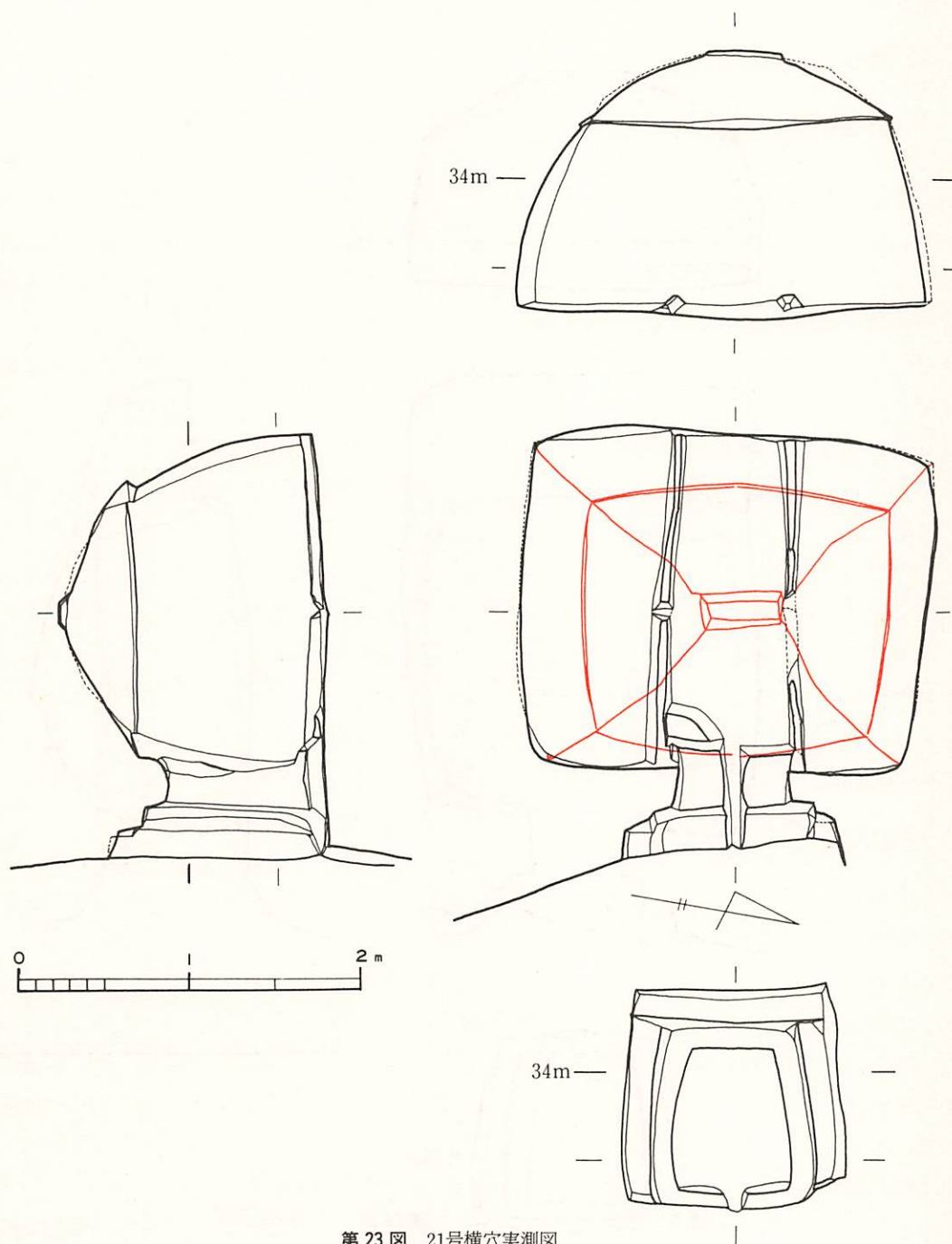
「浮き彫りは21号から見ると左外壁にあたる位置に彫られている。右側の靫と盾を21号に伴うものとしてここで述べたい。靫は21号から70cm程離れた所に彫られており、長方形の中程がくびれた形で、上方の凹字状の部分に9本の鏃を収めている。中程よりやや上に一条の横溝を入れ、その下をへ字形に削って段をつけている。大きさは幅34cm、高さ60cmを測る。靫のすぐ左に並んで盾が彫られている。盾は上部が丸みをもち肩部が張り、胴部がややくびれた形をしており、幅30cm、高さ44cmを測る。この靫、盾ともに風化が激しいが、全面に赤の彩色が残っている。なお、この盾から30cm離れた所に人物が彫られている。」

22号横穴

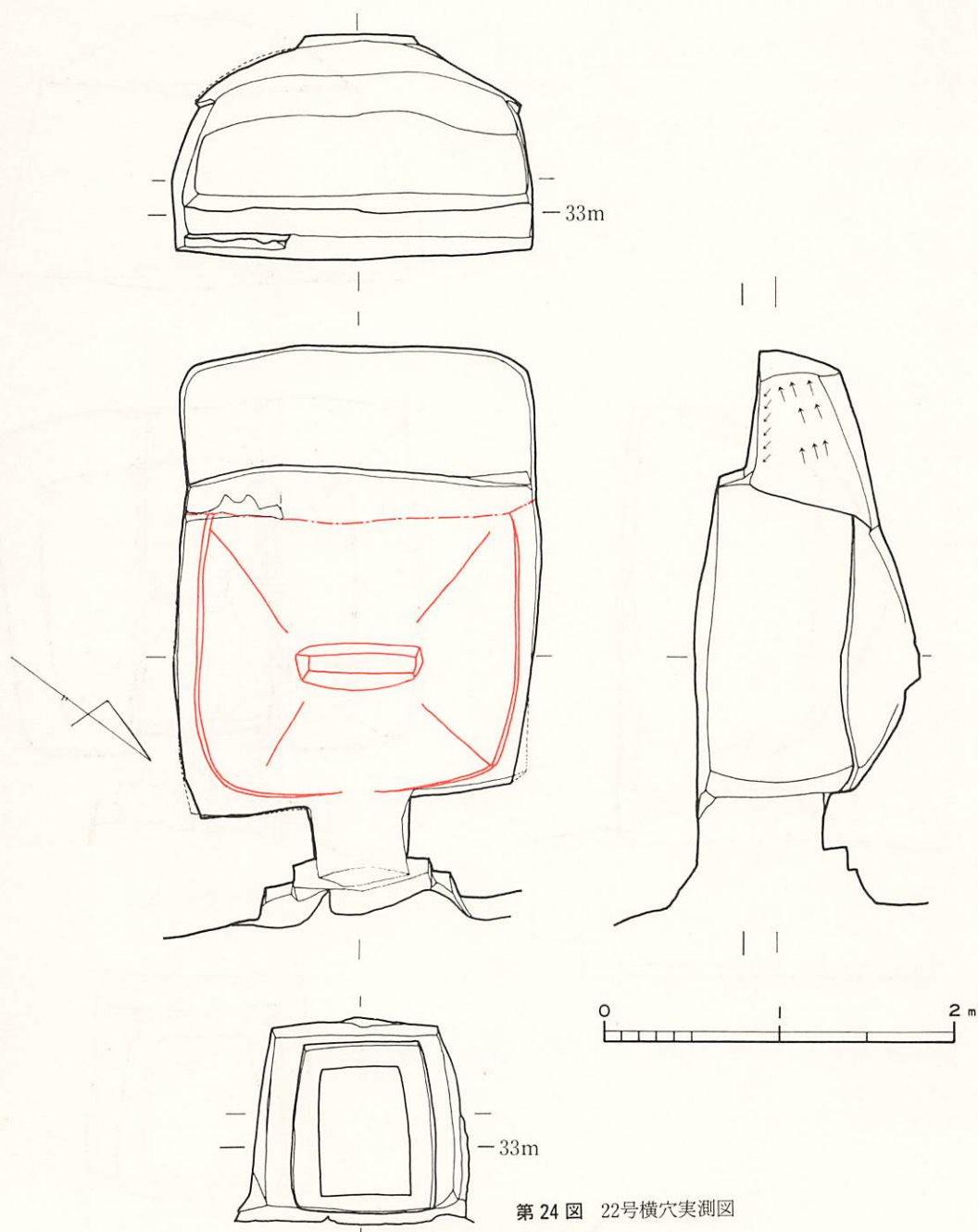
21号横穴から北へ約15m離れて位置しており、この横穴からさらに北側へ15mまでの間に8基の横穴が存在し、この横穴群の中で最も密な分布を示している。これらの横穴は崖面の高さ3～4mの所に開口していた。さて、この横穴は主軸をN53°Eにとり、北東から東北東に向けて開口していた。羨門は高さ74cm、幅52cmの長方形で二重の飾縁を有していた。玄室は現状では長方形を呈しているが、当初はほぼ正方形に近いプランであった。入口部分で幅194cm、奥壁193cm、奥行185cmの広さで、床面が平坦な横穴を構築した後、奥壁に深さ73cm、幅185cm、高さ約70cmの張り出し状に屍床を造っている。この部分については、明らかにノミの方向や仕上げ段階に至っていない点から二次的な増築部分と理解されたが、時間的にどれ位の差があるかは断定するに至らなかった。

天井は手前の部分は寄棟造の平入りで、軒先線も奥壁上除いて三面に刻まれており、奥屍床部分の天井はドーム状を呈し、奥壁上の軒先線を破壊していた。この点からも二次的な構築と考えるものである。本来の玄室は壁面に上下方向に仕上げ段階の幅広いノミを使用しているが、奥屍床については奥に向って水平方向にノミを使用しており、荒堀りの段階であることがうかがわれた。

内面には丹を塗っていたものと思われるが、現在は軽石部分のみで確認できる。



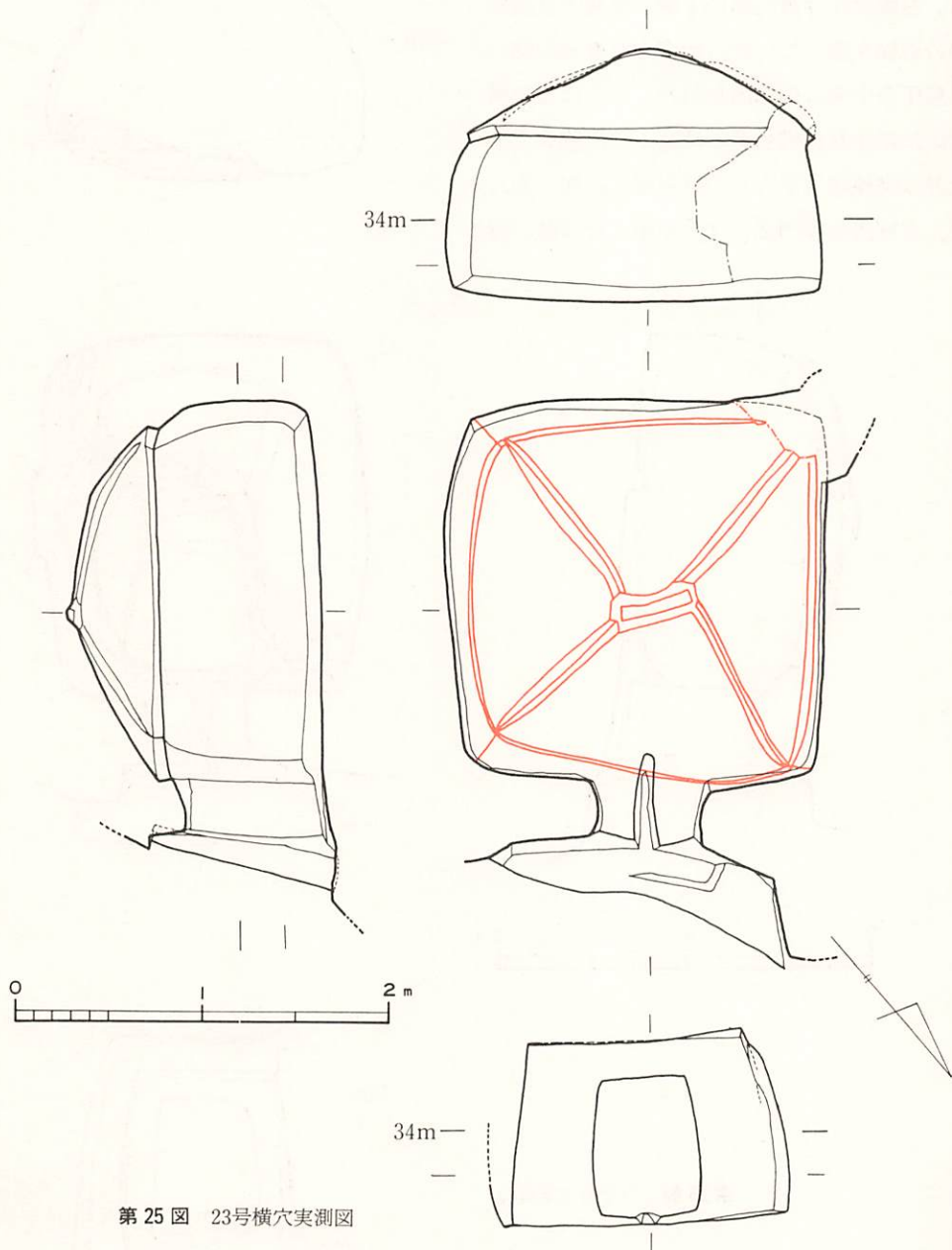
第 23 図 21号横穴実測図



第 24 図 22号横穴実測図

23号横穴（図版11—2 第25図）

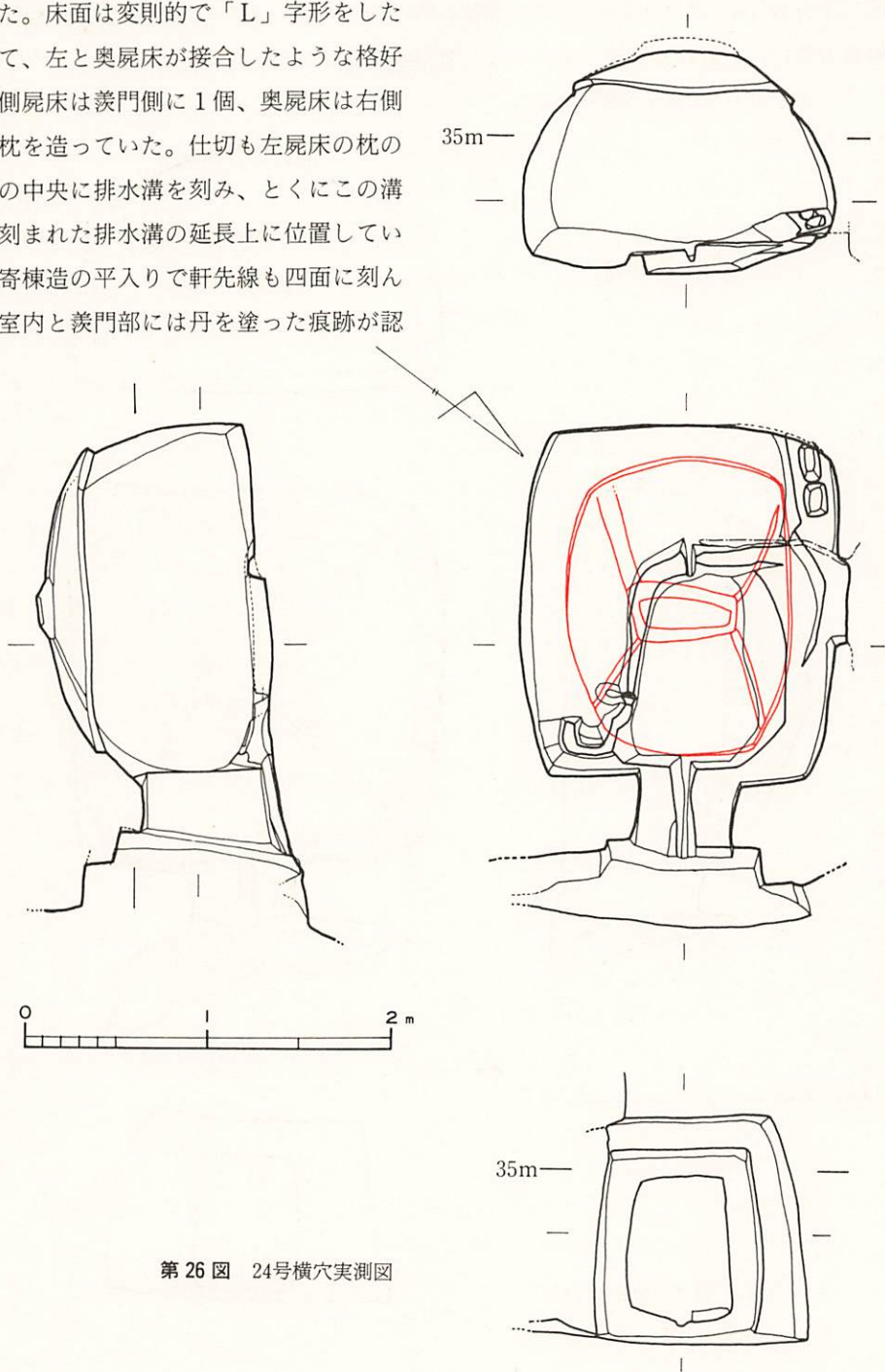
22号横穴の隣りに位置するが、羨門の高さは約1m程高い位置に在る。主軸をN40°Eにとりほぼ北東に向って開口している。羨門は高さ75cm、幅58cmの長方形で飾縁を有している。床には玄室から伸びた排水溝を刻み、さらに閉塞石を立てた際の掘り込みも見られた。玄室は正方形プランに近く、入口部分182cm、奥行203cmを測る。奥壁右隅が崩壊しているための幅は不明。床面は平坦で仕切の痕跡も無い。天井は寄棟造の平入りで、軒先線を四面に刻んでいた。



第 25 図 23号横穴実測図

24号横穴 (図版11-3、12-1 第26図)

23号からさらに1m程高くなっており、主軸をN53°Eにとりほぼ北東に向って開口している。
羨門は高さ80cm、幅55cmの長方形で二重の飾縁を有しているが、左側では一部崩壊していた。
玄室は入口部分で140cm、奥壁で150cm、奥行190cmのやや長方形に近いプランで比較的小さい規模となっていた。床面は変則的で「L」字形をした
屍床となって、左と奥屍床が接合したような格好である。左側屍床は羨門側に1個、奥屍床は右側に2個の石枕を造っていた。仕切も左屍床の枕の横と奥屍床の中央に排水溝を刻み、とくにこの溝は羨門床に刻まれた排水溝の延長上に位置していた。天井は寄棟造の平入りで軒先線も四面に刻んでいた。玄室内と羨門部には丹を塗った痕跡が認



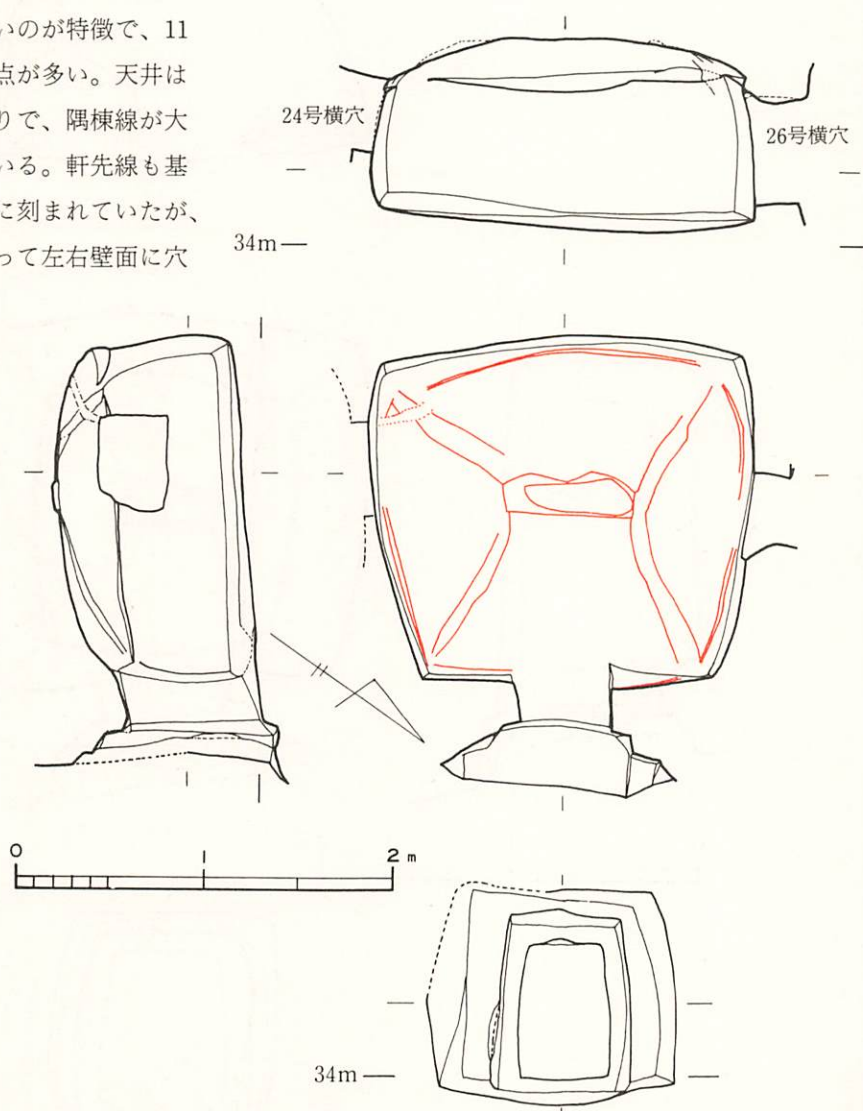
第 26 図 24号横穴実測図

められた。なお25号横穴と隣接しているため、現在右側壁に穴が開けられていて、24、25、26と連なっている。また23号横穴とも近いところから、この横穴が小さく、変則的なプランをしている原因として23、25号横穴が先行して築造されていたため生じた現象であろうと考えた。

25号横穴（図版11—1、12—2.3 第27図）

24号と26号の間に挟まれて位置している。主軸はN55°Eにとり、北東と東北東の間に向って開口している。羨門は高さ71cm、幅50cmの長方形で二重の飾縁を有していたが、左上部の一部を崩壊していた。玄室は扇形に近いプランで入口部分154cm、奥壁190cm、奥行183cm、高さ1mを測る。

屍床は平坦で、壁面に比べ天井が極端に低いのが特徴で、11号横穴と類似点が多い。天井は寄棟造の平入りで、隅棟線が大きく刻まれている。軒先線も基本的には四面に刻まれていたが、後世の手によって左右壁面に穴

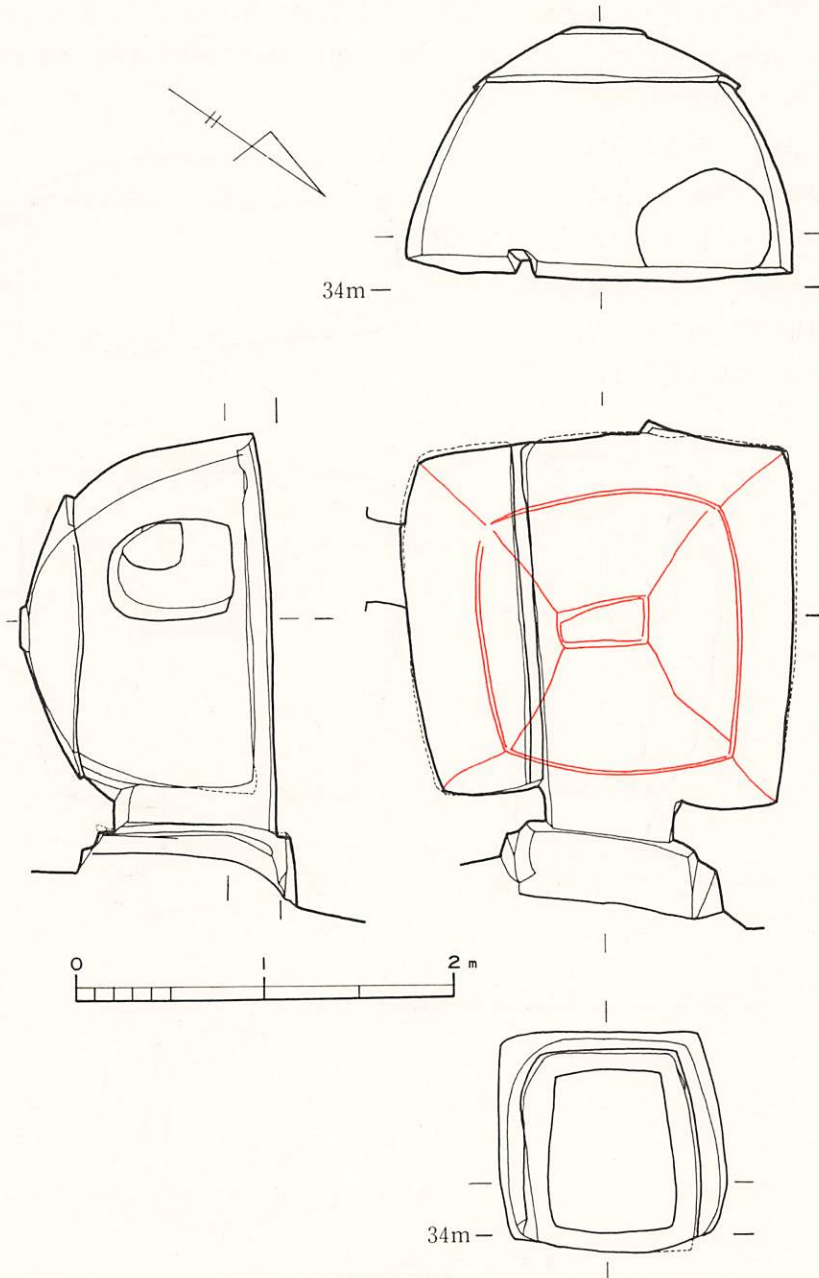


第27図 25号横穴実測図

が開けられた際破損している。さらに奥壁近くには横方向にクラックが入っており、24、26号横穴へと続いていた。

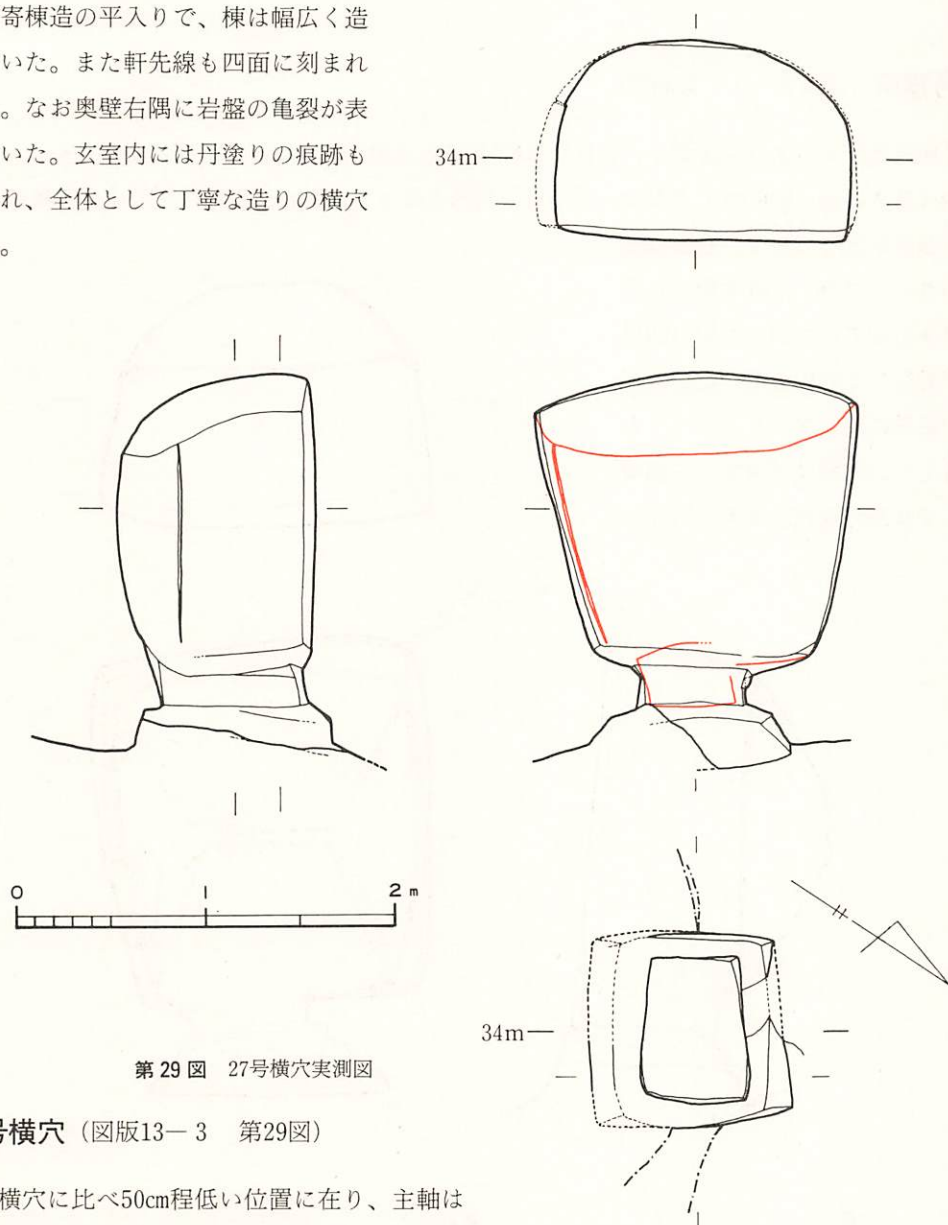
26号横穴（図版13—1.2 第28図）

25号横穴とほぼ同レベルで並んだ格好に位置し、主軸をN55°Eにとり、北東と東北東の間に向けて開口していた。羨門は高さ87cm、幅68cmの方形で他の横穴よりやや大きめである。飾縁は二重だ



第 28 図 26号横穴実測図

が貧弱な造りである。玄室は正方形に近いプランで入口部分180cm、奥壁190cm、奥行190cm、高さ134cmを測る。屍床は左側のみで羨門左側から奥壁に向って仕切が一直線に伸びている。右側の屍床については仕切のを削り取った痕跡も見られず、当初からこの様な屍床になっていたものと考えた。天井は寄棟造の平入りで、棟は幅広く造られていた。また軒先線も四面に刻まれていた。なお奥壁右隅に岩盤の亀裂が表われていた。玄室内には丹塗りの痕跡も認められ、全体として丁寧な造りの横穴である。



第 29 図 27号横穴実測図

27号横穴（図版13—3 第29図）

26号横穴に比べ50cm程低い位置に在り、主軸はN56°Eで北東と東北東の間に向って開口している。

羨門は高さ77cm、幅56cmの長方形で、飾縁をもっていたが崩壊して一部を残している程度であった。玄室は扇形に近いプランで奥壁が極端に曲線を描いていた。なお入口部分で113cm、奥壁170cm、奥行160cm、高さ106cmを測り、小形の横穴である。床面は平坦で仕切等は見られない。天井はカマボコ形に近いが、左側壁の上に軒先線を残し、さらに奥壁上の線が隅棟線とも見られるところから

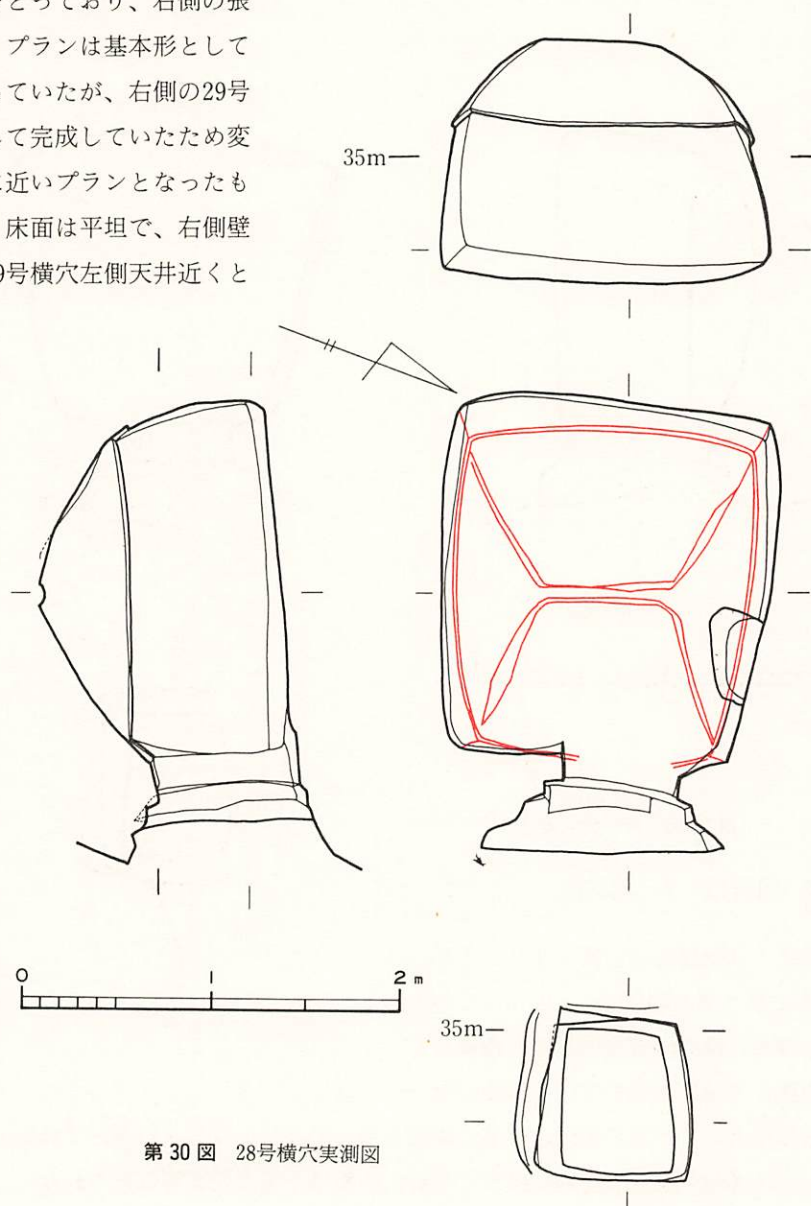
切妻造にも見ることができる。いづれにしても棟が刻られていない点から考えて半ドーム形でもしておこう。

玄室内には丹を塗った痕跡が認められた。

28号横穴（図版14—1 第30図）

29号横穴と接するように位置し、主軸をN69°Eにとり東北東に向かって開口している。

羨門は高さ75cm、幅60cmの方形で一部二重の飾縁となっていた。玄室は羨門に比べ大幅に左側にくい込む形をとっており、右側の張りが小さい。プランは基本形として正方形をとっていたが、右側の29号横穴が先行して完成していたため変則的で扇形に近いプランとなったものと考えた。床面は平坦で、右側壁の近くでは29号横穴左側天井近くと

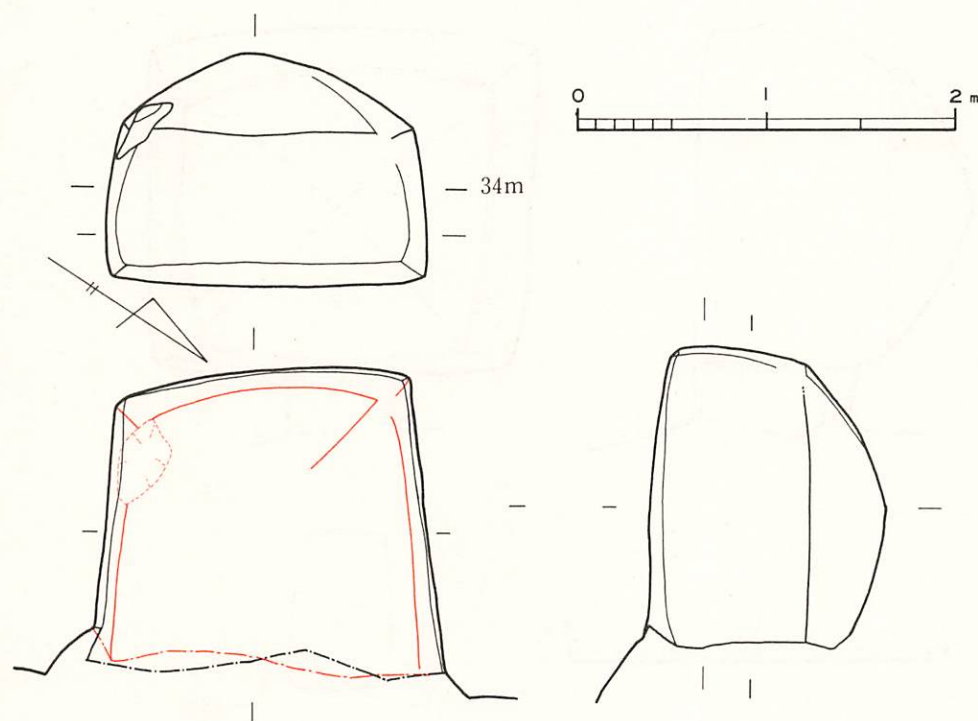


第30図 28号横穴実測図

接していたため、後世の小穴が見られた。天井は寄棟造の平入りであるが、棟が浮彫りとなっていて、その形状も他では見られないものであった。軒先線は四面に見られるが、羨門上部のみが見られなかった。

29号横穴（図版14—2 第31図）

28号横穴の右下で、22号から並んだ8基の中で最も北側に位置している。主軸はN57°Eで北東と東北東の間に向って開口している。残念な事に玄室前半分を崩壊しており、僅かに奥壁幅156cm、高さ124cmを測るのみである。床面は平坦で仕切も見られない。天井はドーム形で軒先線と隅棟線1本が見られた。なお28号横穴と接する穴が左側天井に開いている。内面の一部に丹の痕跡を認めることができる。

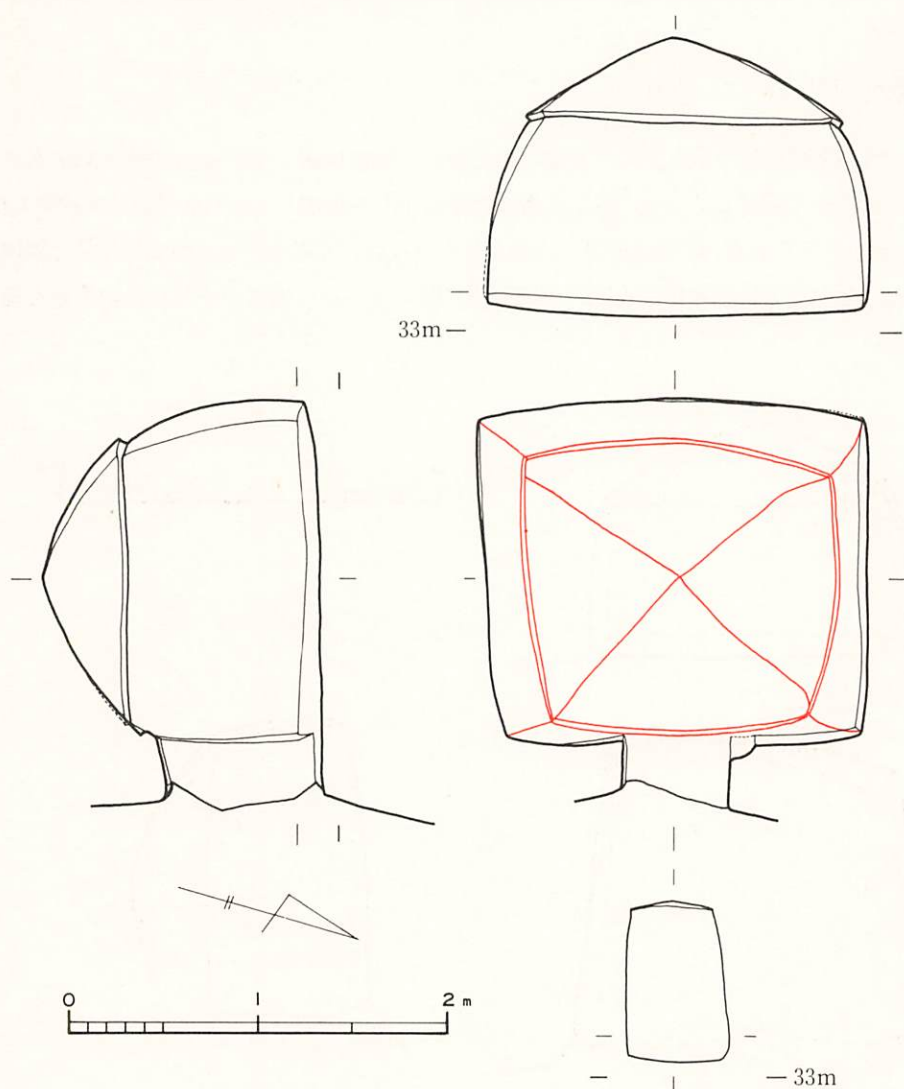


第31図 29号横穴実測図

30号横穴（図版14—3、15—1 第32図）

22号～29号横穴の集団から約60m北に離れて30号～36号横穴7基が集まっている。これらも崖面の3～5mの高さに開口しており、中には梯子が届かず鉄パイプを組立てた足場を利用して実測しなければならなかった。皮肉な事に実測する時間より、組立て解体する時間の方が長くなり、横穴構築の際の苦労を垣間見た思いがする。この横穴も足場を組んで実測したもので、主軸をN74°Eにとりほぼ東北東に向って開口している。羨門は高さ82cm、幅55cmの長方形で飾縁は見られなかつ

た。玄室は正方形のプランで、入口部分幅189cm、奥壁204cm、奥行180cm、高さ146cmを測る。床面は平坦であった。天井は方形造で、軒先線も四面に刻まれていて、全体に丁寧な造りである。なお玄室内には丹を塗った痕跡がある。退色が著しいが全面に行ったものと思われる。



第 32 図 30号横穴実測図

31号横穴 (図版15—2.3 第33図、第34図)

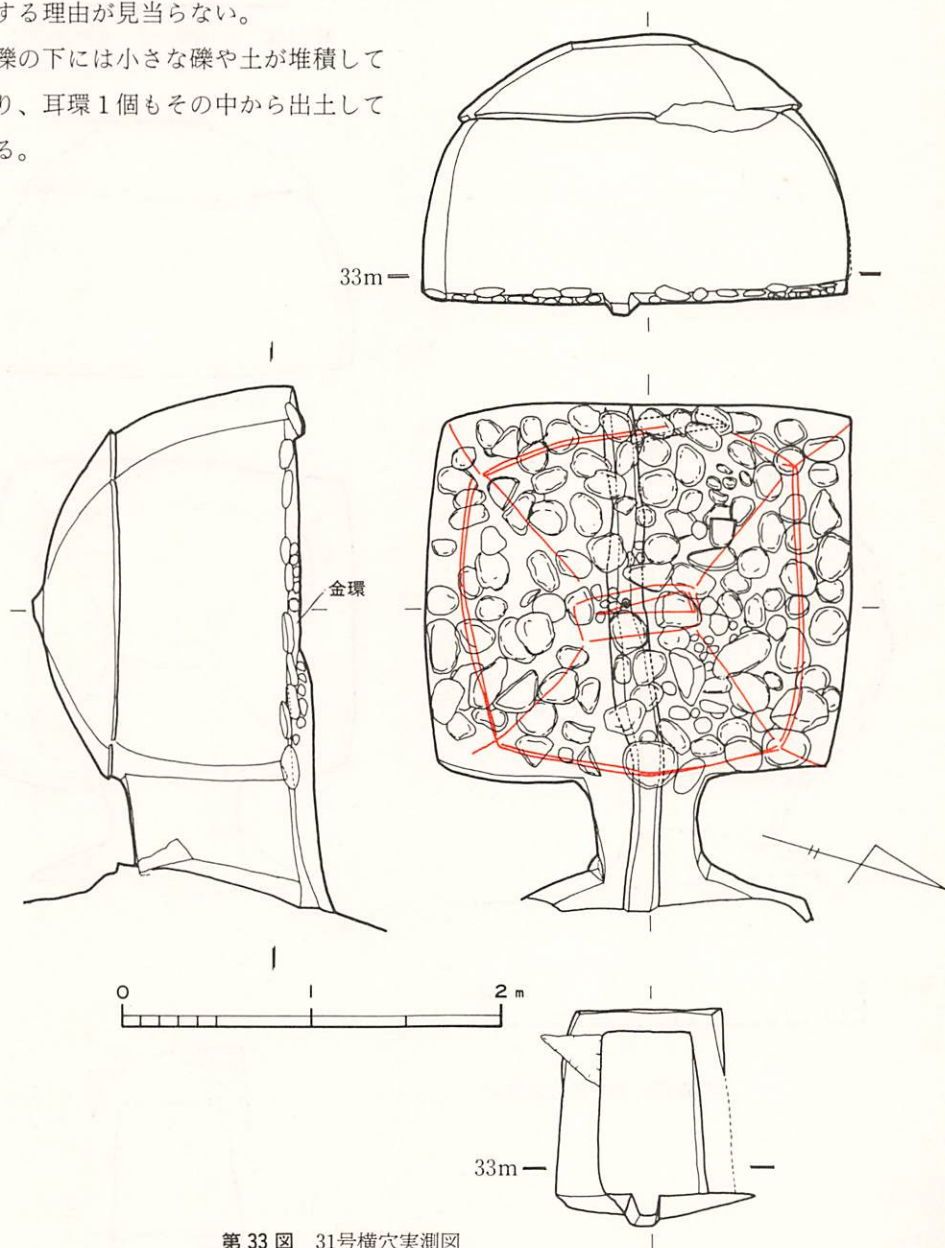
30号と並んで崖面 5 m の所に開口しており、主軸は $N73^{\circ}E$ で東と東北東に向かっている。羨門は高さ98cm、幅50cmの長方形で床には玄室から来た排水溝が刻まれている。玄室はほぼ正方形のプランで内部には人頭大の扁平な礫が敷かれていた。規模としては入口部分で204cm、奥壁幅213cm、奥行200cm、高さ140cmを測る。床面には扁平な礫を敷き、その下には小さな円礫と土が堆積していた。そのため床面から 4～5 cm の高さに礫を敷きつめた感じであった。

羨門から伸びた排水溝を確認するため一部掘り下げた結果、奥壁に向かって一直線に伸び、その

幅は上部で約20cm、下部で5～10cm、深さ7cmの規模であることが判明した。また、奥壁直前から右に長さ45cmにわたって浅い溝が折れて伸びていることも明らかとなった。そのため屍床としては左右対称に並ぶもので仕切や枕等は確認されなかった。

さて礫床について考えると一次的なものでなく追葬の段階における二次的な所産と考えることができる。その理由として次のことが考えられる。

- 1、羨門部が地上5mと極めて高い位置にあり、後世の悪戯とは考えにくい。
- 2、床面は横穴築造の段階で排水溝を中心に平坦な屍床が存在しており、その時にあえて礫を搬入する理由が見当らない。
- 3、礫の下には小さな礫や土が堆積しており、耳環1個もその中から出土している。



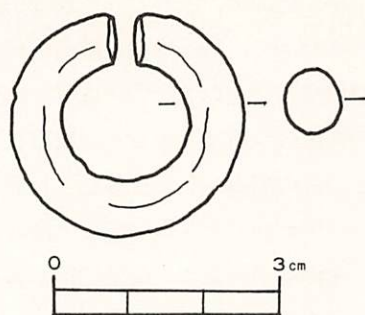
第33図 31号横穴実測図

以上のことから追葬の時点での所産と考えるものである。

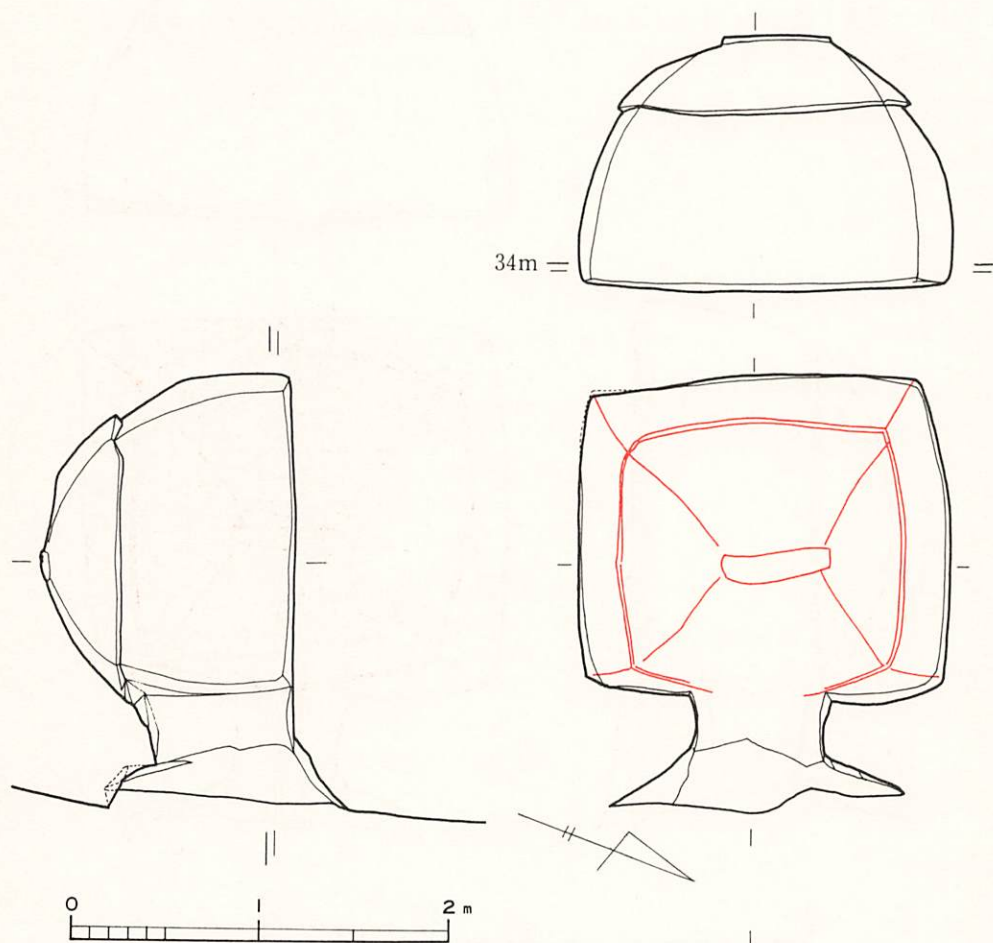
天井は寄棟造の平入りで軒先線も四面に刻んでいる。内部には全面に丹を塗っている。

遺物は排水溝の中から耳環 1 個が出土している。

直径3.08cmの鉄地金張りであるが土の付着が著しく金の光沢が見られない。



第 34 図 31号横穴出土遺物実測図



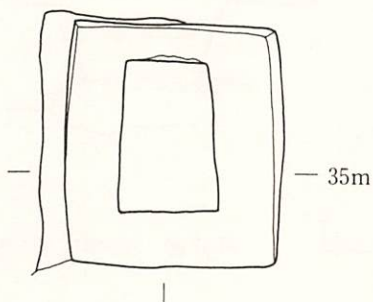
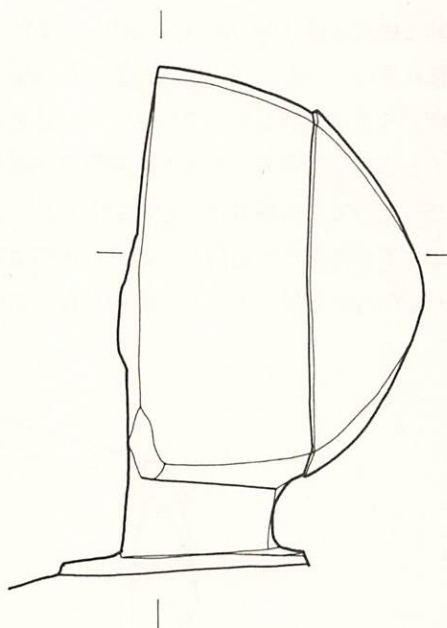
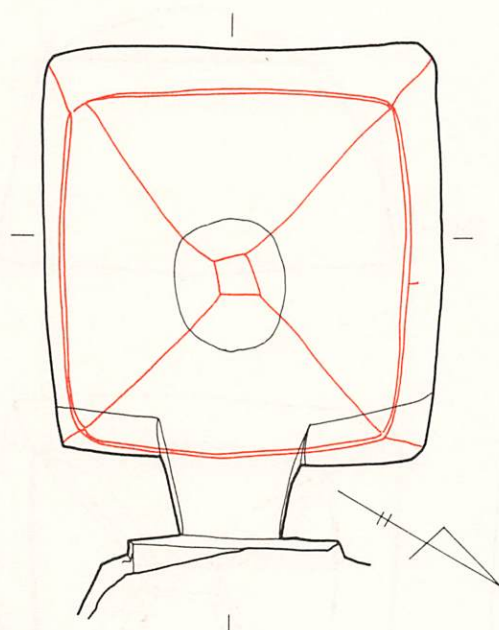
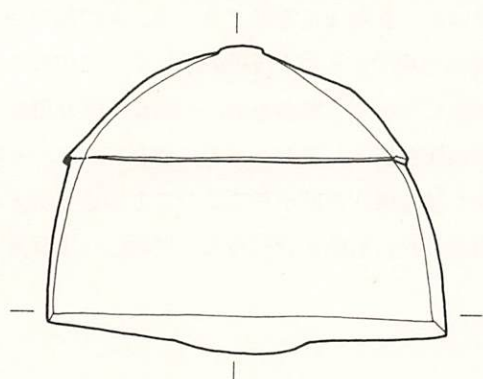
第 35 図 32号横穴実測図

32号横穴（第35図）

32号から36号までは僅か10mの中に並んで開口しており、31号と32号横穴との間が8m、36号と

37号横穴の間が20mの空白地帯となっている。

この横穴は主軸をN70°Eで東北東に向って開口している。羨門は高さ71cm、幅68cmの方形で上部に飾縁の一部を残している。玄室は正方形プランで入口部分の幅188cm、奥壁幅174cm、奥行170cm、高さ134cmを測る。床面は平坦で何ら施設は見られない。天井は寄棟造の平入りで、軒先線を四面に刻んでいるが、羨門上の一部が見られない。



第 36 図 33号横穴実測図

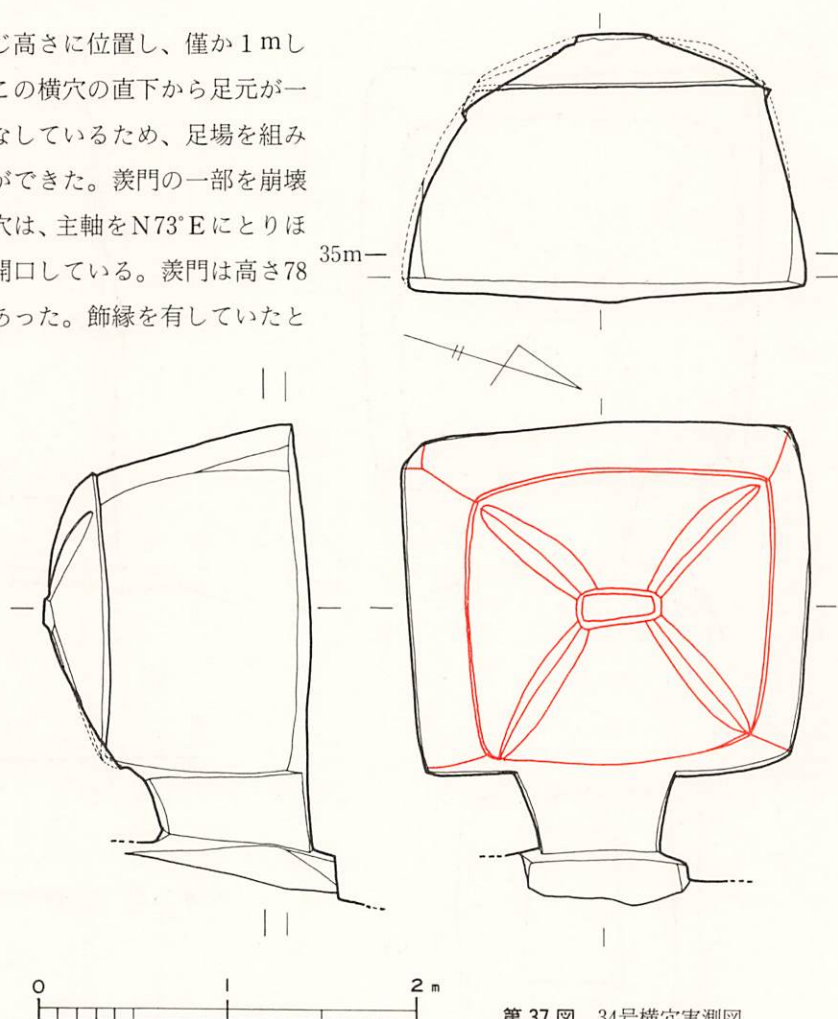
33号横穴 (図版16-1 第36図)

この横穴も足場を組み立てて実測を行ったもので、主軸をN60°Eにとりほぼ東北東に向いている。

羨門は高さ80cm、幅53cmの長方形で飾縁を有している。玄室は正方形プランで、入口部分193cm、奥壁幅も193cm、奥行215cm、高さ155cmを測る。床面は平坦であるが、後世の手によって中央に播鉢状の掘り込みが見られる。また羨門左右の床には傾斜しながらではあるが、一段高く造り出しており枕を意識したものと考えた。天井は中央に正方形の棟を掘り、隅棟が四方に伸びている。この形式を方形造と見るか、寄棟造と見るか判断に迷うか、30号横穴の例からここでは方形造と考えた。軒先線も四面に刻まれ、ほぼ水平に周っていた。内面は丹の痕跡が認められ、壁面の仕上げも丁寧で美しい。

34号横穴 (図版16-2.3 第37図)

33号横穴とほぼ同じ高さに位置し、僅か1mしか離れていないが、この横穴の直下から足元が一段高くステップ状をなしているため、足場を組み立てることなく実測ができた。羨門の一部を崩壊していたのでこの横穴は、主軸をN73°Eにとりほぼ東北東に向かって開口している。羨門は高さ78cm、幅64cmの方形であった。飾縁を有していたと

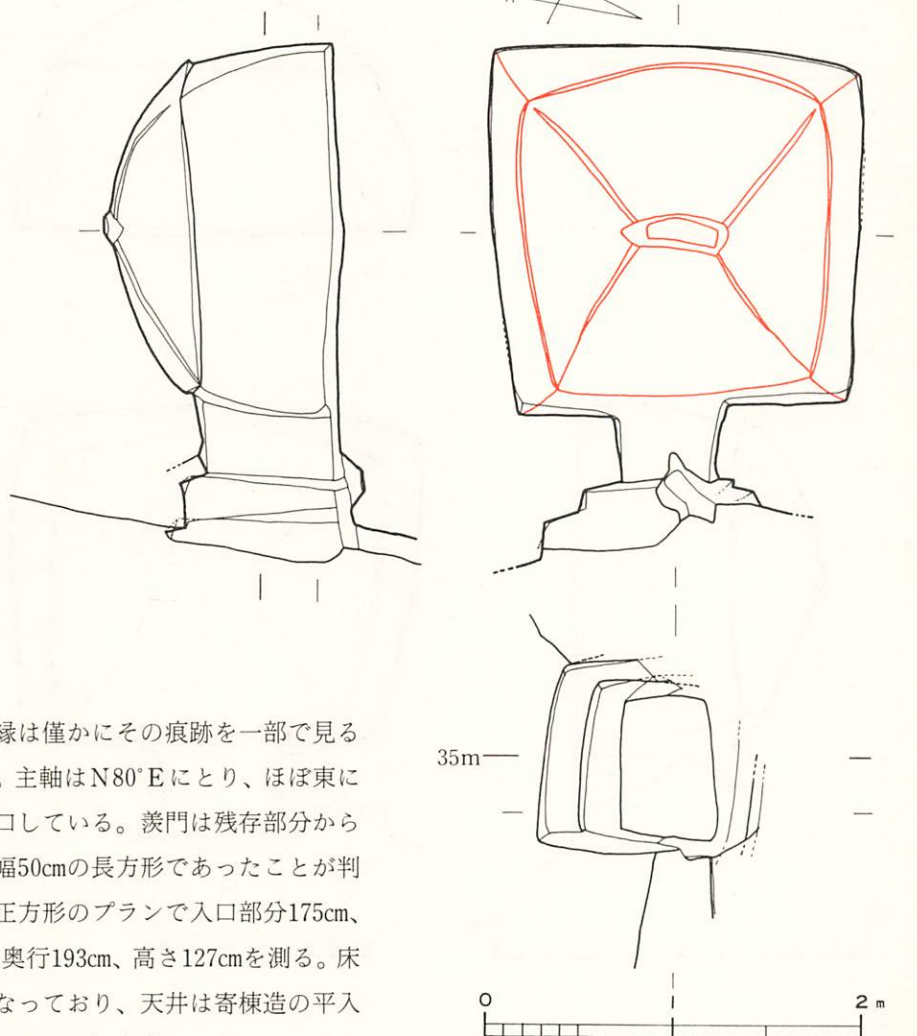


第37図 34号横穴実測図

思われるが、現在はその殆どを欠いている。玄室は正方形プランで、入口部分幅193cm、奥壁幅193cm、奥行193cm、高さ141cmを測る。床面は平坦で何ら施設は見られない。天井は寄棟造の平入りで、棟および隅棟は太く刻まれている。軒先線も四面に刻まれていた。なお壁面に比べると天井の高さが極端に低いのが特徴である。玄室内の全面に丹を塗った痕跡が認められた。

35号横穴 (図版17-1 第38図)

この横穴も羨門を崩壊しており、とくに右



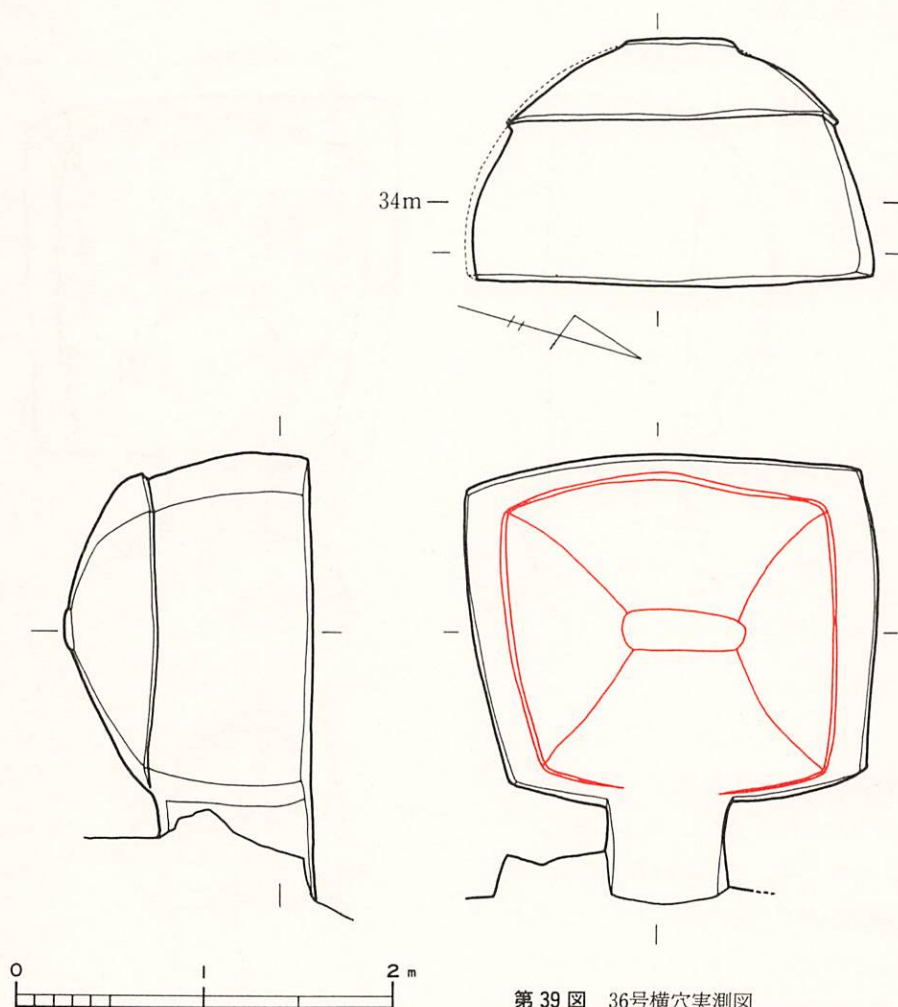
側半分の飾縁は僅かにその痕跡を一部で見ることができる。主軸はN80°Eにとり、ほぼ東に向かって開口している。羨門は残存部分から高さ78cm、幅50cmの長方形であったことが判る。玄室は正方形のプランで入口部分175cm、奥壁193cm、奥行193cm、高さ127cmを測る。床面は平坦になっており、天井は寄棟造の平入りである。四面には軒先線をめぐらしている。奥壁には丹の痕跡が認められた。

第38図 35号横穴実測図

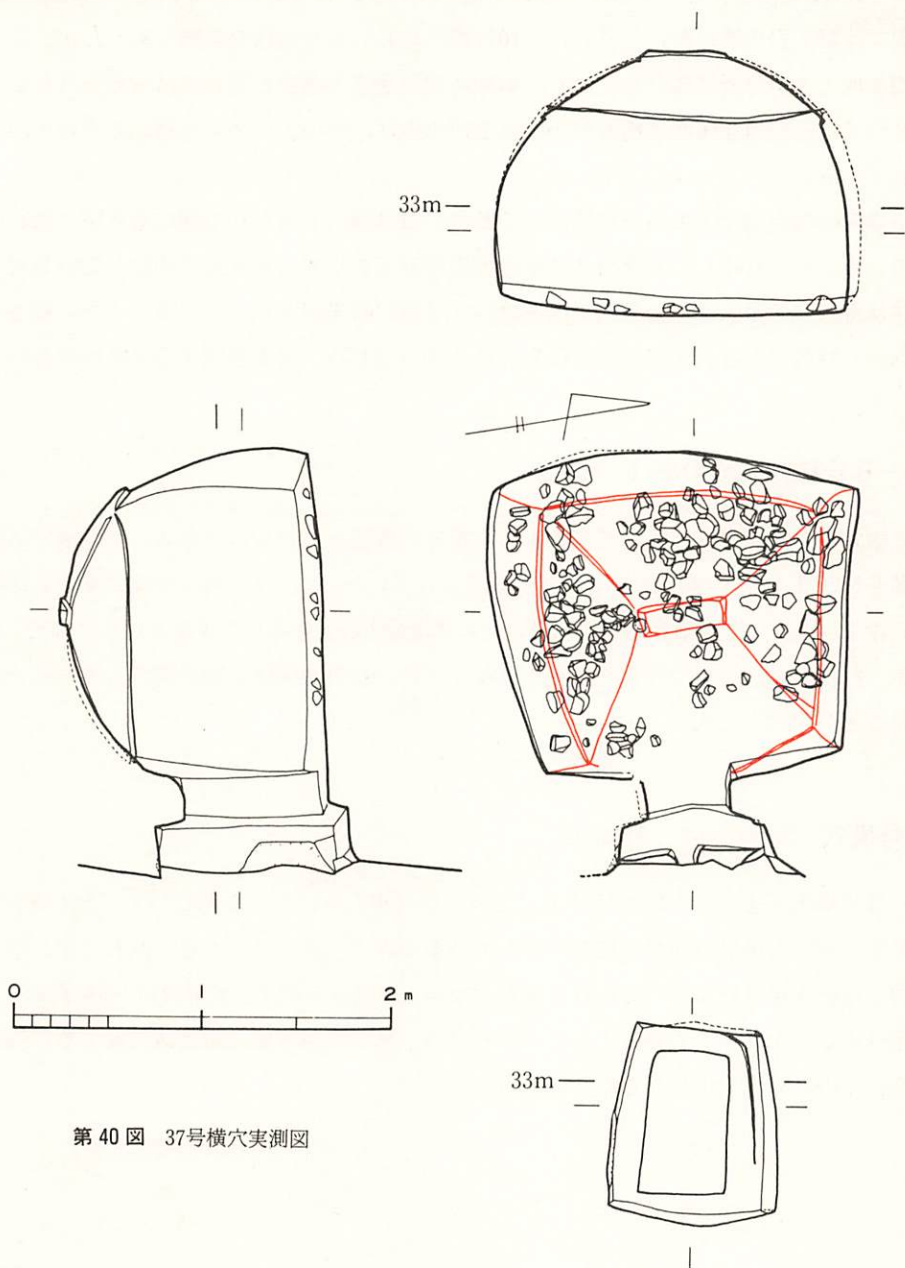
36号横穴（図版17—2 第39図）

32号から5基並んでいる集団の北端に位置するものであるが、羨門部の崩壊が著しい。主軸をN 74°Eにとり東北東に向って開口している。羨門は残存部分から高さ82cm、幅61cm程度の長方形になるものと思われる。玄室は正方形に近いが入口部分幅187cm、奥壁幅209cm、奥行185cm、高さ131cmを測り、やや入口部分が狭くなっている。床面は平坦で、仕切等の施設は見られなかった。

天井は寄棟造の平入りで、羨門上部を除いて全面に軒先線を刻んでいた。内部には全面に丹を塗った痕跡が認められる。全体の仕上げは丁寧である。



第 39 図 36号横穴実測図



第40図 37号横穴実測図

37号横穴 (図版17-3 第40図)

36号横穴から北に約20m離れて4基ほど存在しているが、谷の入口部分に当り、岩盤の崩壊が著しく僅かにこの横穴だけが原形を留ていた。主軸をN80°Wにとり、東と東南東との間に向けて開口していた。羨門部は高さ76cm、幅46cmの長方形で飾縁を配している。床には閉塞石を受ける掘り込みが見られた。玄室は正方形と扇形の中間的プランで、入口部分で幅158cm、奥壁で193cm、奥行174

cm、高さ140cmを測る。とくに奥壁は曲線を描いており、11号横穴や27号横穴と共通した点が多い。

床面には凝灰岩角礫が散在していた。10号横穴においても同様の状態であったが、この横穴の場合羨門が地上3mの所に開口しており、単純に10号横穴の場合と同じには考えられなかった。床の状況としては、平坦な床面に樹根が一面に毛根を広げ、その上に薄い土層、さらにその上に角礫が散在している。

この横穴の場合地上3mの所に開口しており、31号横穴で見られた様に追葬時の敷石の可能性も残っている。いづれにしても礫自体は原位置を保っておらず、玄室内で移動している可能性が高い。

天井は寄棟造の平入りで、羨門上部を除いて全面に軒先線を刻んでいる。また、壁面に対し天井が低いのも特徴である。玄室内には亀裂が多く走っており、将来崩壊する可能性が高い。

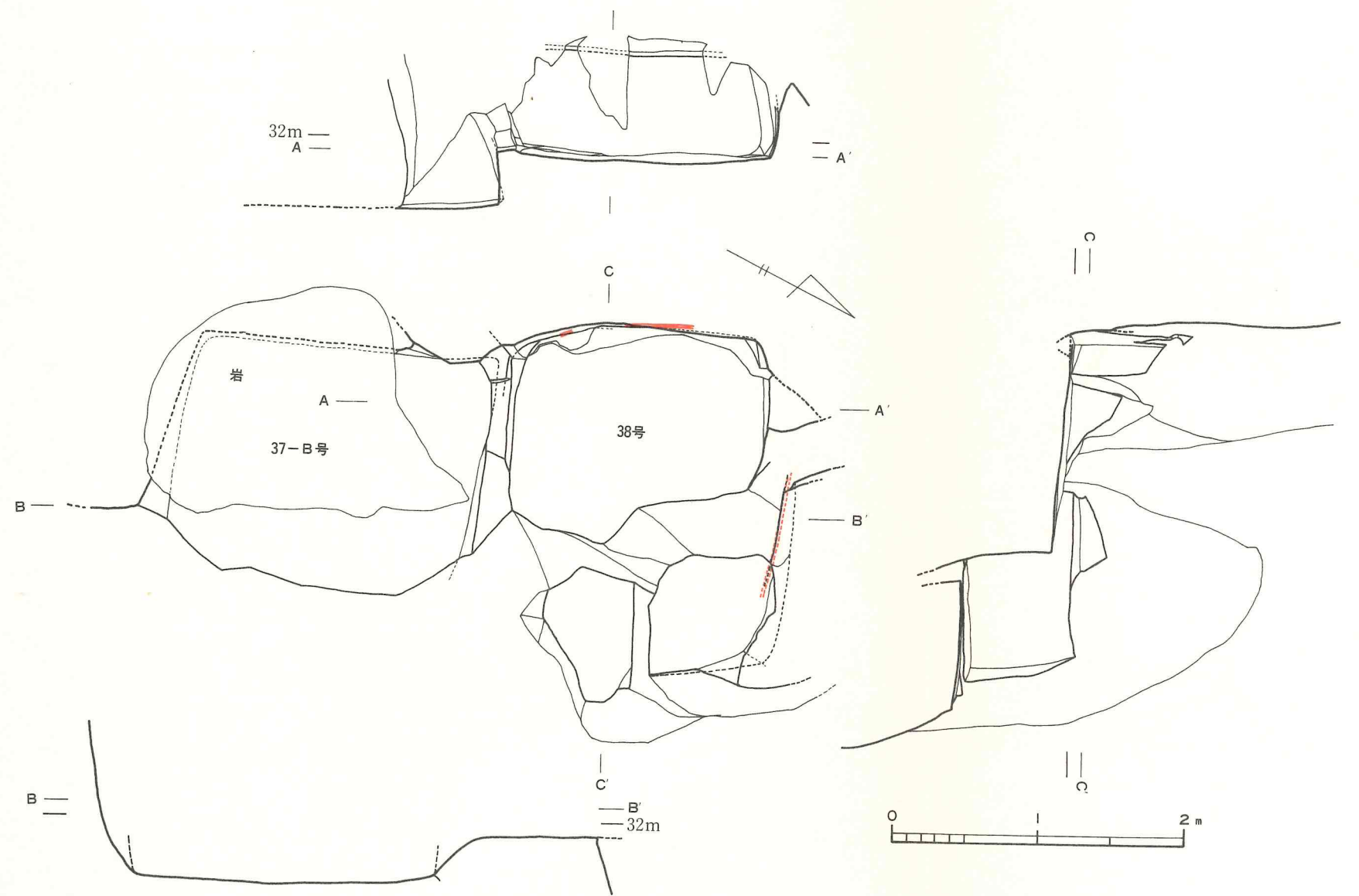
37-B号横穴（図版18-1 第41図）

この横穴は今回の調査において初めてその存在が確認されたものである。38号横穴に隣接する様に主軸をN70°Eにとりほぼ東北東に向って開口していたらしいが、残念な事に僅かに床面の一部を残すのみで、他は全て崩壊している。そのため奥壁幅205cmを図上で測定されるのみで、何ら計測できなかった。床面は平坦で仕切等は見られなかった。なお右側壁に38号横穴と通じる穴が開けられていたことが判明した。

38号横穴（図版18-2 第41図）

37-B号横穴と接して主軸をN64°Eにとり、ほぼ東北東に向って開口していたものだが、天井は全て欠き、床面も奥壁の前が原位置を保っているのみで、前半分は大きく割れてずれ落ちていた。

壁面には軒先線を刻んでいるが残存部が少ない。床面は平坦で、奥壁幅170cmを測る。37-B号横穴に比べるとかなり小さくなっているところから、恐らく38号横穴築造時にはすでに横穴が存在しており、そのため小形化したものであろう。

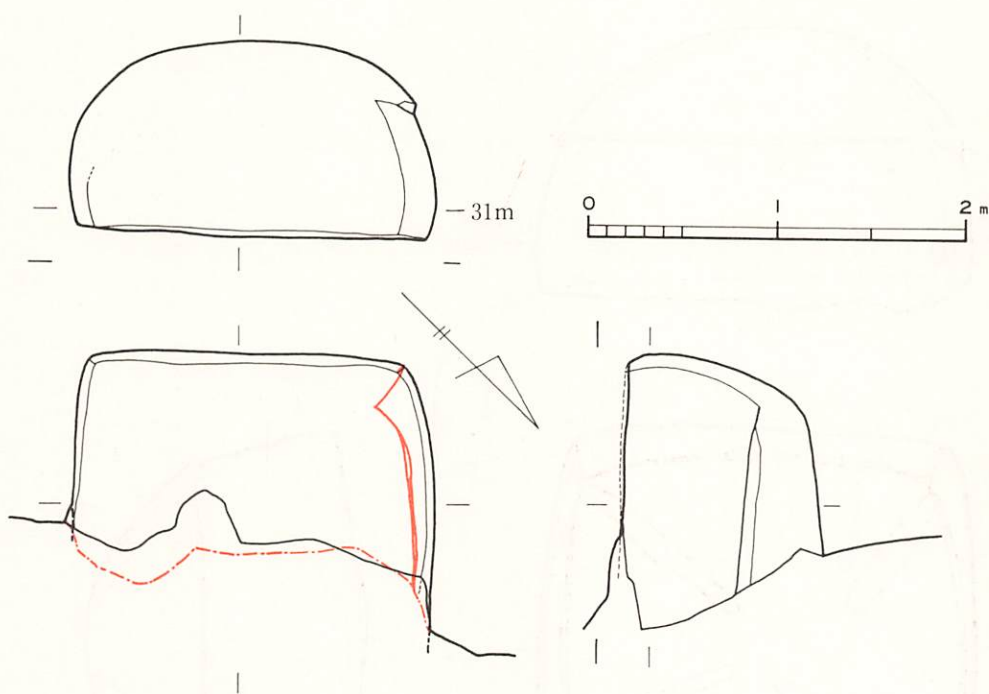


第 41 图 37-B 号横穴・38 号横穴实测图

39号横穴 (図版18—3 第42図)

この横穴の北には間口27m、奥行360mの大きな谷と間口30m、奥行60mの小さな谷が入り込んでおり、その入口部分に位置している。

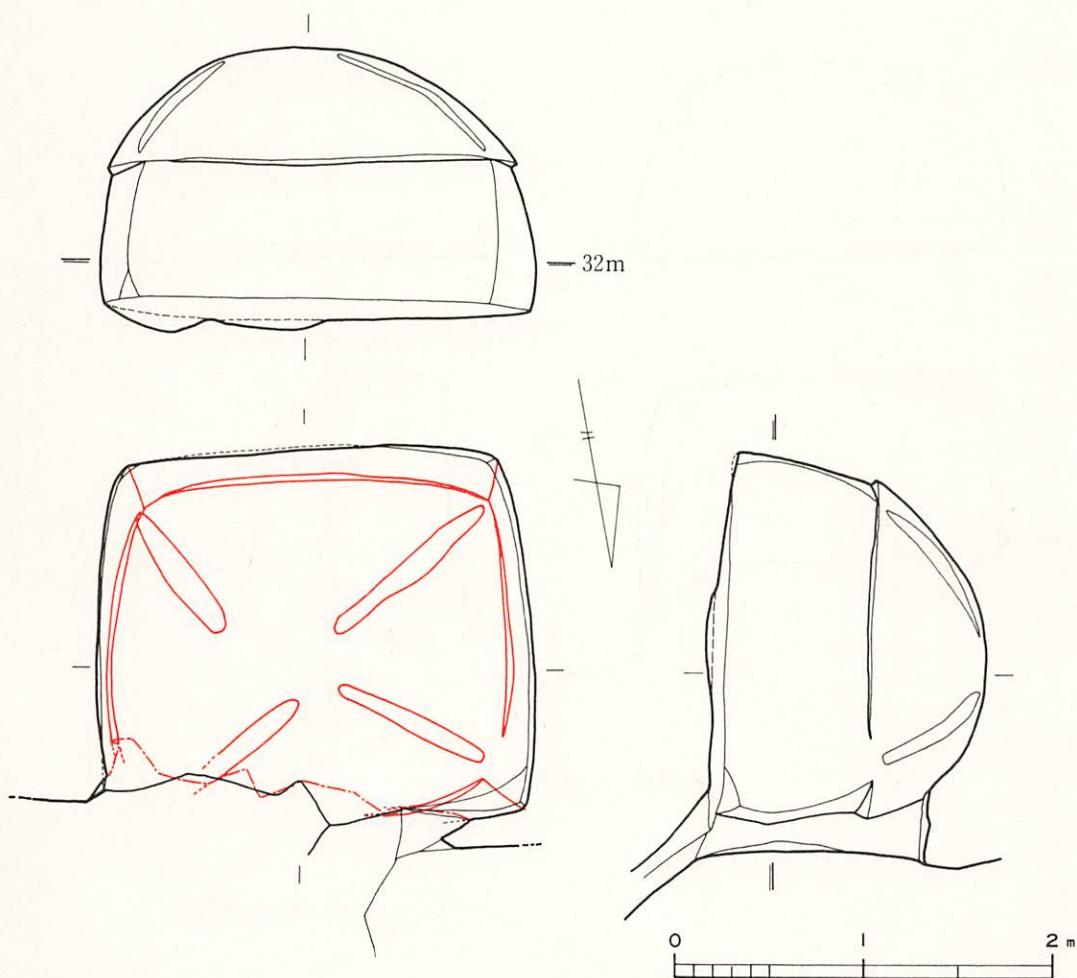
羨門および玄室の前半分を崩壊しているが、主軸をN48°Eにとり、ほぼ北東方向に開口していたものである。玄室は奥壁幅167cm、高さ104cmを測るのみで、比較的小形の横穴で、床面は平坦であるがあまり良い状態ではない。天井はドーム形だが右側壁上には軒先線を刻んでいた。



第42図 39号横穴実測図

40号横穴（第43図）

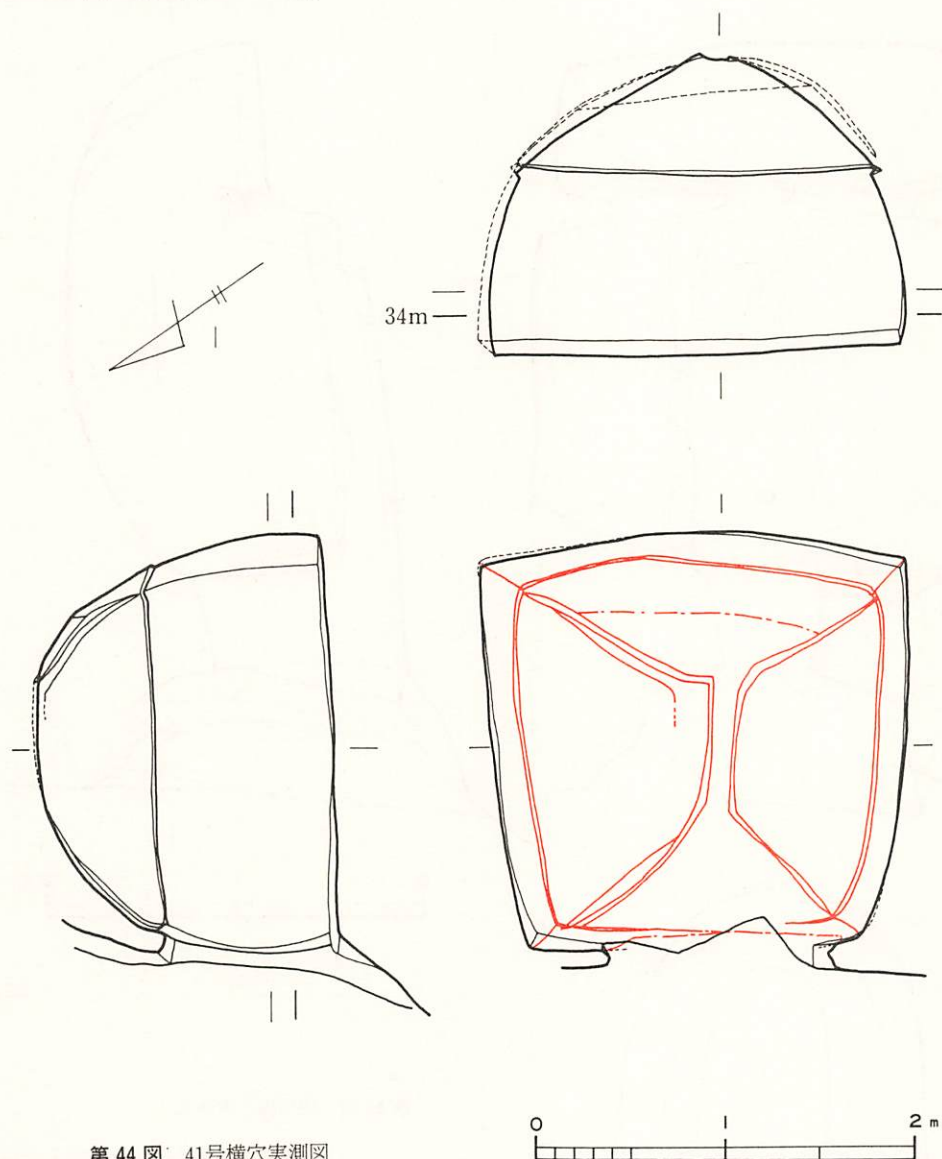
39号横穴から西へ約15m程入り込んだ所に位置している。主軸はN 8°Eで、ほぼ北に向って開口していたが、羨門及び玄室の一部を崩壊している。玄室は正方形に近いプランだが、奥壁195cmと高さ145cmを測るのみである。床面は平坦であるが、破損を受けているため状態は良くなかった。天井は棟を造らず、隅棟線4本を太く刻み、軒先線も四面に刻んでいたものと判明した。この様な状況であるため、寄棟造とドーム形の間形態と言える。



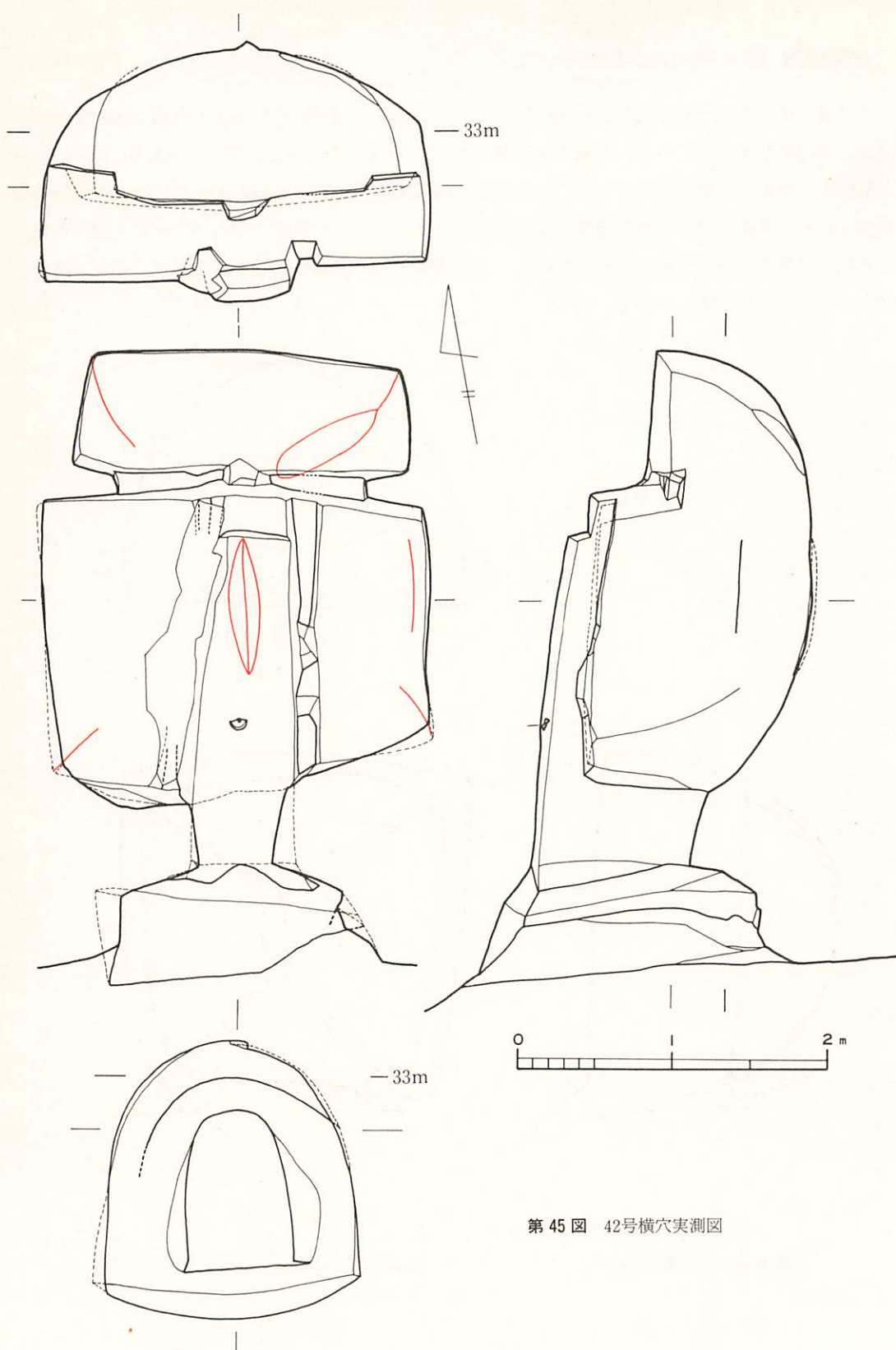
第 43 図 40号横穴実測図

41号横穴（図版19-1.2 第44図）

この横穴は、大きな谷の入口から70m程中に入っており、40号横穴からでも直線で50mを越えている。羨門部を崩壊して、主軸をN55°Wにとり、北西と西北西との間に向って開口している。玄室は正方形から扇形に近いプランで、入口部分幅175cm、奥壁で225cm、奥行220cm、高さ158cmとなっている。床面は平坦で何ら施設は見られなかった。天井は寄棟造の妻入りで、妻と棟が連続しており、なおかつ棟が浮彫りとなっていて、この様なケースとして28号横穴を見ることができる。内部には全面に丹を塗っていた。



第 44 図 41号横穴実測図



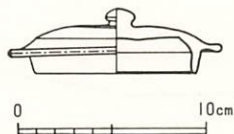
第 45 図 42号横穴実測図

42号横穴（図版19—3、20—1 第45図、第46図）

この横穴は、間口30m、奥行60mの小さな谷の北側崖面に開口し、谷の入口から約30mの所に位置している。主軸はN10°Eで南と南南西の間に向って開口している。羨門は高さ112cm、幅70cmでドーム状をしており、飾縁を配していた。玄室は入口部分幅245cm、奥壁幅197cm、奥行280cm、高さ164cmを測るが、プランとしては多少歪んだ長方形といえる。床面は「コ」字形屍床で、奥屍床は手前の屍床に比べ45cm程高く造られ、さらに羨門上部とほぼ同レベルにゴンドラ形の仕切を有している。左右の屍床も仕切を有しているが破損が著しい。なお各仕切の中央には排水溝を切っていた。また通路の奥には高さ13cmの段を有しており、20号横穴と類似している。天井は不明瞭であるが、棟と隅棟線さらには右側壁上に軒先線の一部を刻んでおり、寄棟造の妻入りとなっている。

遺物は、玄室通路上より坏蓋1点が出土している。

半欠の状態だが口径8.4cm、最大径11.2cm、器高3.4cmでかえりは1.2cmを測る。天井には乳頭状のつまみを有している。胎土は赤褐色できめ細かいが、全体の仕上りは悪く、一部補修の痕も見られる。この資料は通路密着で出さしているが、明らかに須恵質とは異なっている。古くから開口しているため、後世投棄された可能性が高い。

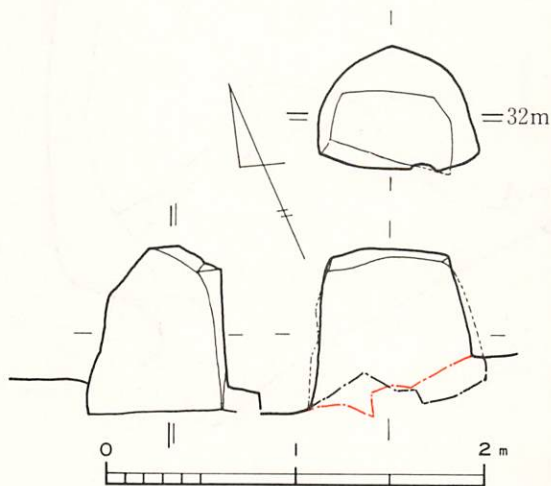


第46図 42号横穴出土遺物実測図

42—B号横穴（図版20—2 第47図）

42号横穴の隣に開口するこの横穴は、今回の実測調査で新たに発見された未完成の横穴である。主軸をN24°Eにとり、南南西に向って開口している。規模は幅90cm、奥行85cm、高さ72cmで入口部分が最も大きく、先細りとなっている。床は右奥が最も低くなっていて未調整の段階であることがうかがえる。また壁面も粗掘りの段階で作業中止していた。

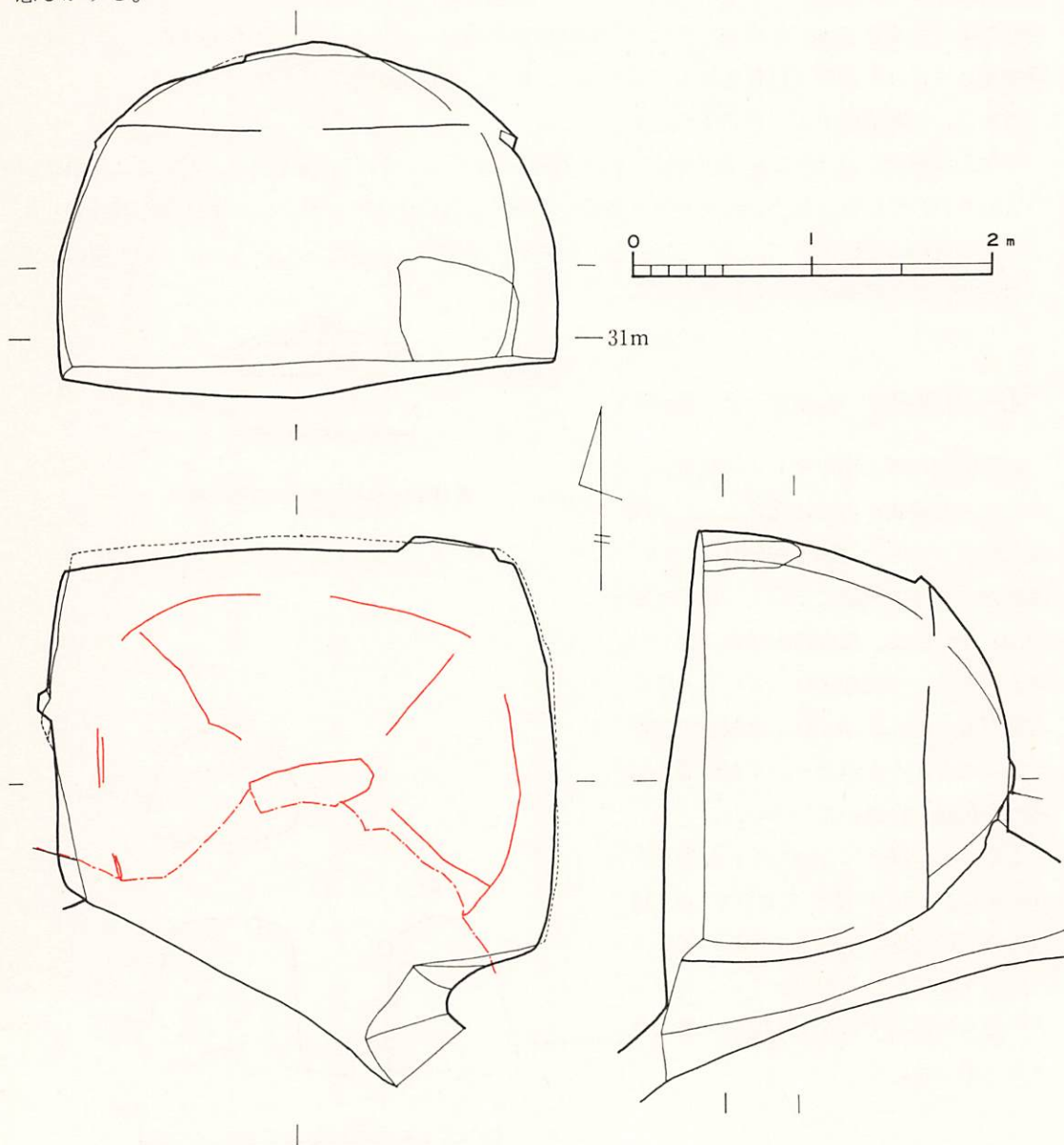
なお、この横穴については、42号横穴から東に125cmしか離れておらず、42号横穴の羨門の状態から考えて現在の崖面が当時のままであると判明。このことから入口部分は崩れておらず未完成の横穴であると考えた。



第47図 42—B号横穴実測図

43号横穴（図版20—3 第48図）

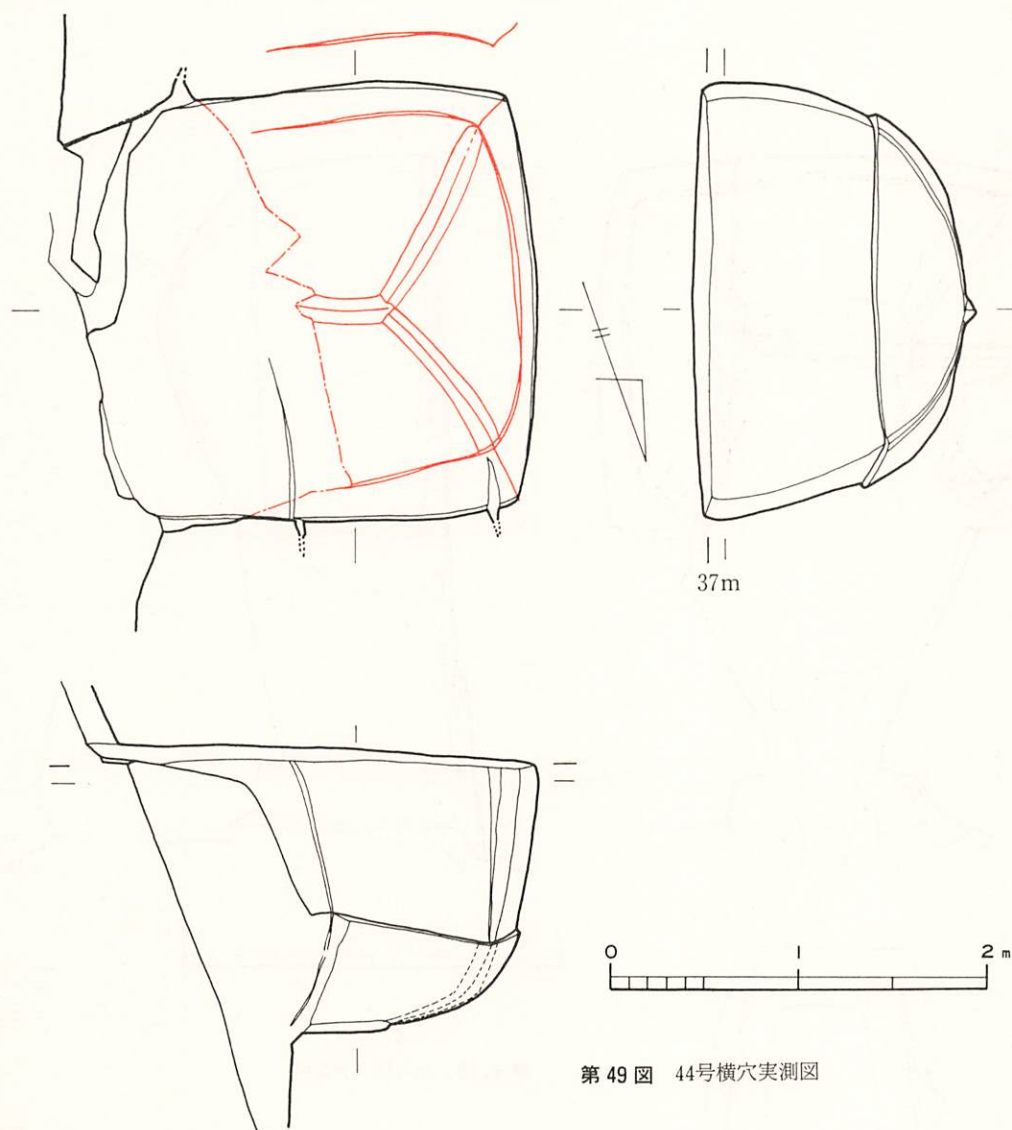
この横穴は谷の入口部分に当り、谷を挟んで39号横穴や40号横穴と対峙するように位置している。羨門及び奥壁等、玄室の一部を崩壊しているが、主軸をN 1°Wにとりほぼ真南に向って開口していた。玄室は正方形プランであるが、奥壁幅250cm、奥行240cm、高さ195cmを測り、城横穴群の中には最大級の玄室であった。床面は半分が壊れているが平坦になっていて、仕切等は見られない。天井は寄棟造の平入りで、四面に軒先線を刻んでいる。なお壁面の立ち上りが高く、天井部が低い感じがする。



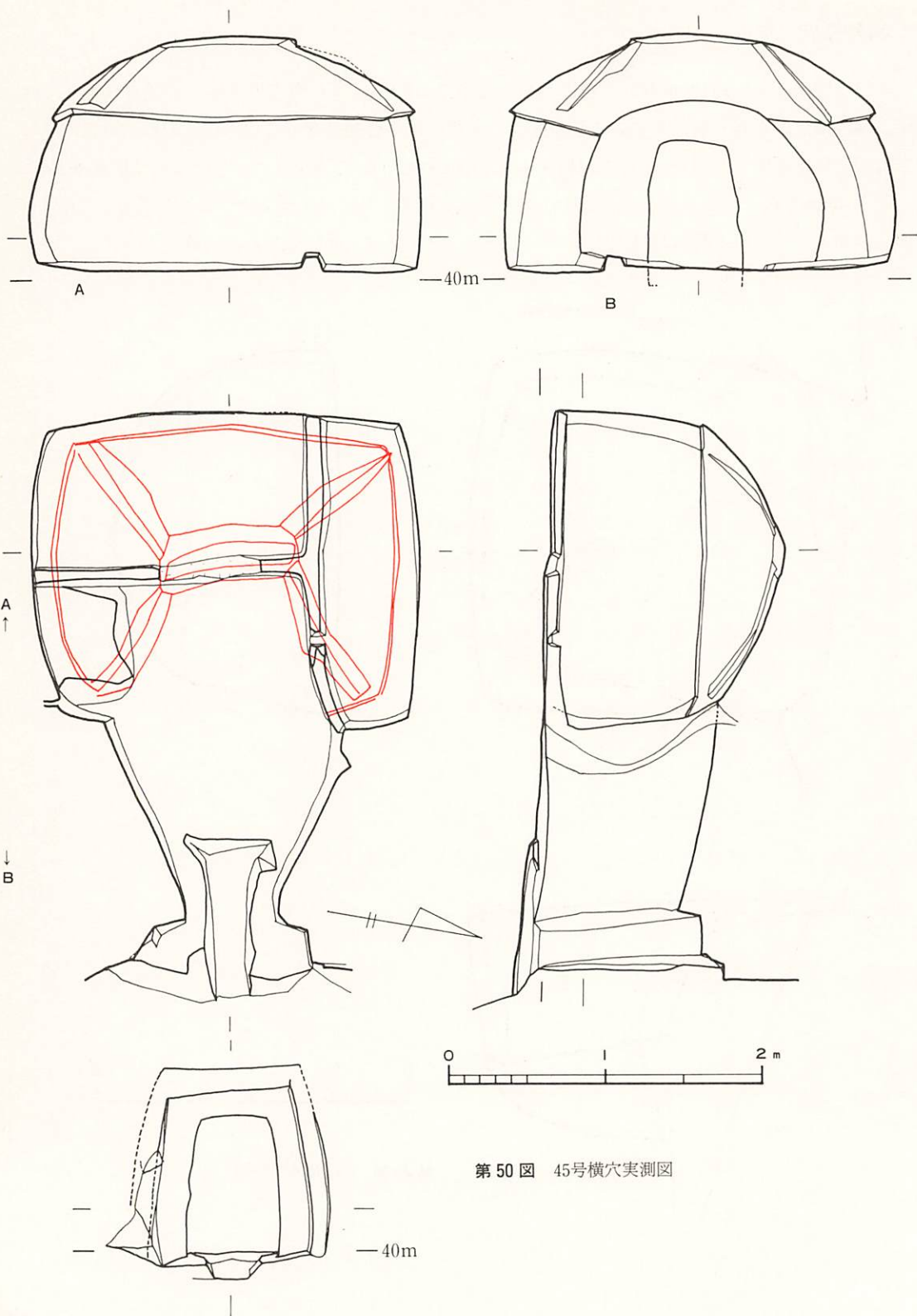
第48図 43号横穴実測図

44号横穴（第49図）

43号横穴から北に約100m離れて位置している。この間には現在横穴の痕跡すら見る事ができず、44号横穴から46号横穴までの3基が独立して存在する格好となっている。この横穴は羨門及び玄室前半部を崩壊して、主軸をN71°Wにとり東南東に向って開口している。玄室は奥壁幅210cmと高さ150cmを測るのみであるが、正方形のプランで床面は平坦となっていることが判る。天井は寄棟造の妻入りで、棟と隅棟線は太く刻まれている。軒先線は三面に刻まれている。



第 49 図 44号横穴実測図



第 50 図 45号横穴実測図

45号横穴 (図版21-1.2.3 第50図)

この横穴は地上6mの高さに開口しており、実測に至るまでに足場の建設等で多くの時間を取られた。44号横穴から7m程北側で、主軸をN80°Eにとり、ほぼ東に向かって開口していた。羨門は高さ95cm、幅60cmの長方形で飾縁を有し、床面には長さ1m、幅30cmの排水溝が刻まれていた。羨門から玄室までが極端に長く130cm、を測り、「ハ」字状に玄室に向かって広がっていた。玄室は入口部で幅225cm、奥壁幅225cm、奥行200cm、高さ154cmを測るほぼ正方形に近いプランであった。床面も変則的で、右屍床の仕切が奥壁にまで達し、奥屍床はその途中から左に伸びる仕切によって区切られていた。天井は寄棟造の平入りで、棟及び隅棟線は太く刻まれている。軒先線は羨門上を除く全てに刻まれていた。

この横穴は形態的に特異な形をしており、他に類例を見ることができない。

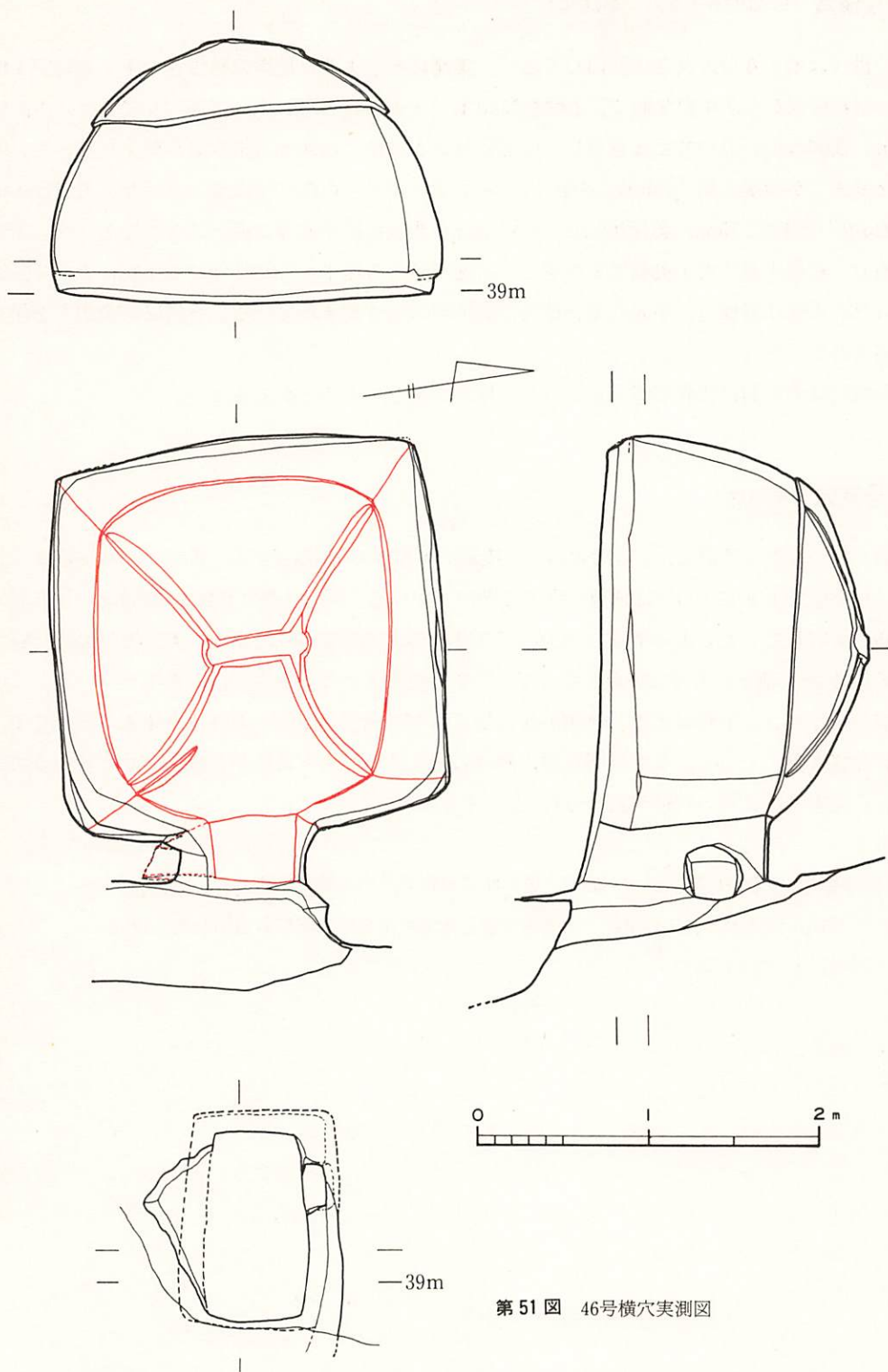
46号横穴 (第51図)

城横穴群の北端に位置し、1号横穴からは直線でも470mの距離である。羨門の一部を崩壊しているが、主軸をN98°Eにとり、ほぼ東に向かって開口している。羨門は高さ102cm、幅60cmの長方形になり、飾縁も有していたことが判る。玄室は正方形で入口部分の幅は215cm、奥壁幅210cm、奥行235cm、高さ156cmを測る。床面は平坦となっているが、壁面とノミの使用方法が異なっているところから、かつては「コ」字形屍床で、仕切が存在していた可能性が強い。天井は寄棟造の平入りで、四面に軒先線を刻んでいる。なお羨門右側に棚状の掘り込みが見られるが、後世の所産である可能性が強い。玄室内には丹の痕跡が認められた。

註1 「湯の口横穴群」山鹿市立博物館調査報告書第5集 1986

註2 「熊本県装飾古墳総合調査報告書」熊本県文化財調査報告書第88集 1984

註3 註2に同じ



第 51 図 46号横穴実測図

IV ま と め

城横穴群は古くから開口していたため遺物を殆んど見る事ができなかった。また開口状況から前庭部が存在せず、時間的位置付けを行う上において何ら資料となるべきものを得る事ができなかった。しかし、総数49基の横穴については実測を終了することができたことは大きな成果と言える。この成果を踏まえて今後は各方面からのアプローチが可能となり、さらに横穴群の研究に貢献できるものと信じている。

今回実測調査を実施して感じた点について述べ、まとめとするものである。

1. 横穴構築における規格、基準の存在について

城横穴群を調査している時、内部の規模が小さく、屍床が平坦で仕切等の施設をもたない横穴が多いことに気がついた。とくに前年度湯の口横穴群の調査を実施したばかりで、このような例が見られなかったこともあって気に掛かる場所であった。

実測調査を終えた46基のうち、床面が平坦となっている横穴は実に31基を数えた。屍床を有する横穴は15基を数え、そのうち奥屍床もしくは左右屍床を石屋形状に造った横穴6基、「コ」字形の屍床になる横穴3基、「二」字形の屍床をもつ横穴2基、「L」字状の屍床を有するもの1基、左側のみ屍床を有する横穴1基、奥と右側に屍床を有する横穴1基、その他未完成のため形状不明の横穴1基に分類することができた。

この他、天井構造による分類や、平面の形態等によっても分類することができたが、いずれにしても、湯の口横穴群と比較した場合総じて小さく、正方形に近いプランの横穴が多く見られた。

このことから、強く横穴構築に際して規格、基準が存在していたのではという疑問が生じたのである。これまで古墳の築造や竪穴住居の建築、さらに土器製作における規格性については多くの研究がなされ、かなりの成果が上っている様である^{註1}。しかし、横穴の規格性についての研究は未だ行われておらず、今後の大きなテーマと言えるのではなかろうか。

横穴の場合、古墳や住居等と異って内面からの構築という特殊性から、製作段階において外観することができないという弱点が存在している。このため仮に設計図を書いたとしても、外観上比較することが困難で、施工時においてズレが生じる可能性が高いものと考えられる。

実際我々が実測する段階で感じることは、肉眼で見た時点では正方形もしくは長方形と以为いても、いざ実測図を書き上げてみた場合、左右どちらかに偏っていることが多々見られた。

このことから、仮に設計図が存在したとしても、岩を割り貫いて造るため誤差が生じる可能性が高いと考えられた。しかし、平均した面積を有しているということは、逆にそれなりの基準を定め

ていたと理解すべきであろうと考える。

ここで言う基準は同種類における施工上の大きさの基準であるが、もう一つ異種類における基準も忘れてはならないものである。

城横穴群では数種類のパターンが存在することは先に述べたとおりだが、これは他の横穴群においてもしかりである。とくに入口構造や天井構造の違い、さらに屍床形態の違いといった点についての分類作業は多くの人々によって手掛けられている。^{11,2}一つの横穴群において数種類の型式が存在し、それぞれにある程度の数の横穴が存在している事実は基準の存在を考えるうえで重要な点である。いいかえれば、前者は大きさの基準、後者は型式の基準とすることができる。

さて、ここでは前者の大きさの基準について考えてみることにする。

横穴構築は古墳や住居とは異なって、内面を削り貫いて作業を進行させてゆかねばならず、その基準線をどのようににしたかが問題となってくる。古墳や住居であれば建設予定地の外側や内側に基準線を引いたり、区域の設定をしたりして作業を進めることができるが、横穴の場合それが不可能である。では何を基準としていたのであろうか。そのためには未完成横穴の構築状況を観察する必要がある。

城横穴群では14号、19号、42-B号の3基の未完成横穴が存在している。横穴の状況については本文で報告しているが、再度構築の段階について考えてみることにする。

- 14号横穴
- 1 羨門を掘る。
 - 2 羨門を整える。
 - 3 通路を掘る。
 - 4 奥壁に達する部分まで掘り進む。
 - 5 通路を整える。
 - 6 左屍床方向に掘り広げる。
 - 7 左屍床を整え、仕切も併せて造る。
 - 8 右屍床にとりかかる。

この段階において作業を中止しており、この後の工程として次の事が考えられる。

- 9 天井部を掘り広げる。
- 10 天井部を整える。

この横穴の場合右屍床構築の段階で作業を中止しており、右側に隣接して横穴が存在している可能性が高い。しかし、土の堆積等からその存在を確認するに至っていない状況である。

- 19号横穴
- 1 羨門を掘り、形を整える。
 - 2 通路を掘り、奥壁予想地点に向って掘り進む。
 - 3 左右の屍床高を考慮しつつ左右に広げる。
 - 4 この段階で右側の横穴を破損する恐れが生じたため作業を中止する。

この後の手順として次の工程が考えられる。

- 5 奥屍床および左右屍床のスペースを確保するよう掘り広げる。
- 6 各屍床を整える。

7 天井部を広げて整える。

8 全体を仕上げる。

19号横穴の場合左側に横穴が存在しないことが明白であるので、左側に拡張すれば良いものと思われるが、作業を途中で中止していた。

42-B号横穴は明らかに羨門を掘り始めた段階とすることができる。従ってその工程を考えるに当ってはあまり参考にならない様である。

さて、14号横穴と19号横穴の例から、基本的な横穴構築の工程を次の様に捉えることができる。

第一段階、羨門部を先ず完成させる。

第二段階、通路の確保を行う。

第三段階、左右の屍床を造り、壁面を整える。

第四段階、天井を造る。

なお奥屍床や左右屍床を石屋形状に造り出している横穴においては、その後の工程として第五段階の石屋形の拡張を考慮することができる。なおこの第五段階については別項で検討を加えることとして、第一段階から第四段階までについて検討を加えてみることにする。

第一段階 横穴を構築するうえにおいて最も重要な事として場所の選定、確保がある。隣接する横穴との関連性や掘り込む方向等についてもこの段階で決定されている。その意味からも重要な工程と言えよう。

羨門を掘る段階は外壁に直接掘り込む訳だから、ある程度の予想が立てられ、外壁にその予想線を引く事も可能である。従って作業としては住居等の構築と共通した段階とも言える。この段階では羨門をほぼ完成することの意義は次の段階での石屑の排除や工人の出入りに際し便利であることが考えられる。

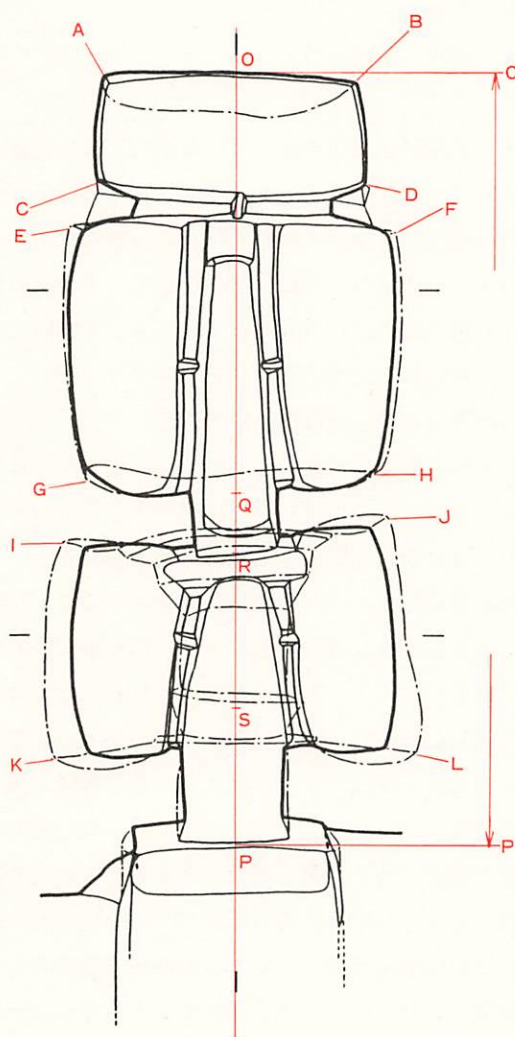
第二段階 通路の確保を計るとともに、この段階で横穴の長さが決定される。通路と奥屍床もしくは奥壁を想定して掘り進む段階であり、19号横穴においても左右屍床や奥屍床を考慮に入れて作業を進めていることが理解される。とくにこの横穴では羨門の外側から最深部まで267cmを測り、羨門内側からでも216cmを測る。この長さは晋尺(24cm)に換算すると11尺(+3cm)と9尺に当り、ある程度の長さを想定していたものと考えることができる。

第三段階 左右の屍床を造ると共に四面の壁面を完成させる段階である。この時には正方形なり長方形に近い形を造り出す必要があるが、実際に内部で線引き作業を行うことは不可能である。そのため14号横穴で見られる様に左側壁をまず整えて、次に奥壁の整形、さらに右側壁の整形という作業工程を考えているものと推察される。従って壁面相互における長さが最終的には横穴内部の大きさに左右しており、その長さを計測することで、規格基準を明らかにする手掛りになるものと考えられる。

横穴式石室の規格研究においてマス目を被せる方法をとられているが、横穴においてはもともとマス目に相当する基準が出来ないのであるから、壁面にその規格性を求めていくべきであろうと考える。

第四段階 天井は壁面が完成した後から掘り広げ、さらに整えている様であるが、この段階ではその型式は決定されていたと考えられる。というのも内部の広がりによって棟の方向や隅棟線の方、入口との関連性等が決定されていなければならず、作業工程上からも一連のものとするものである。

以上のことから横穴内部の壁面を構築における基準の原点と考えることができよう。とくに、側壁、奥壁の長さが重要となり、また石を削り貫いて作業を進めるため、全体の形において多少歪んでいてもよしとすべきと考えていたものと思われる。



第 52 図 桜の上 I - 2 号横穴実測図
(「熊本県装飾古墳総合調査報告書」より引用)

第52図に示す桜の上 I - 2 号横穴は壁面のコーナーを基準として構築したものと考えられるもので、各コーナーの距離と尺換算が次の表である。

表 - 2 桜の上 I - 2 号横穴計測値と尺度換算表

区 間	長 さ (cm)	晋 尺 (24cm)	戦 国 尺 (23)	唐 尺 (30.1)	高 麗 尺 (35.6)	大 平 尺 (29.7)	晋 尺 換 算 値 (±cm)
A - B	168	◎ 7	7.30	5.58	4.71	5.65	7 尺
C - D	178	7.41	7.73	5.91	◎ 5	5.99	7 尺 5 寸(-2)
A - C	68	2.83	2.95	2.25	1.91	2.28	2 尺 8 寸(+0.8)
B - D	67	2.79	2.91	2.22	1.88	2.25	2 尺 8 寸(-0.2)
E - F	215	8.95	9.34	7.14	6.03	7.23	9 尺 (-1)
G - H	198	◎ 8.25	8.60	6.57	5.56	6.66	8 尺 2 寸 5 分
E - G	168	◎ 7	7.30	5.58	4.71	5.65	7 尺
F - H	157	6.54	6.82	5.21	4.41	5.28	6 尺 5 寸(+1)
I - J	216	◎ 9	9.39	7.71	6.06	7.27	9 尺
K - L	240	◎ 10	10.43	7.97	6.74	8.08	10 尺
I - K	142	5.91	6.17	4.71	3.98	4.78	6 尺 (-2)
J - L	156	◎ 6.50	6.78	5.18	4.38	5.25	6 尺 5 寸
O - P	508	21.16	22.08	16.87	14.26	17.13	21 尺 (+4)
O - S	447	18.62	19.43	14.85	12.55	15.05	18 尺 5 寸(+1)
O - Q	277	11.54	12.04	9.20	7.78	9.32	11 尺 5 寸(+1)
S - R	132	◎ 5.50	5.73	4.38	3.70	4.44	5 尺 5 寸
Q - R	38	1.58	1.65	1.26	1.06	1.27	1 尺 5 寸(+2)

◎は割り切れた尺

このことから晋尺において最も数値的に割り切れるものが多く、晋尺を基礎に各壁面とそのコーナーを計測点としていたことがうかがえるのである。従って横穴構築に際しては、先に述べた如く壁面を基本線と見立てて、長さについては、壁面コーナーで計測しながら作業を進めていたものと理解される。

城横穴群における各横穴の数値を表 2、3 に示しているが、今回は紙面の都合により方向性を示すのみに留め、詳細な検討については今後の課題としておきたい。

表-3 城横穴群計測値一覧

	1 奥 壁 幅		2 入 口 幅		3 左 側 壁		4 右 側 壁		床 面	天	井	軒	そ の 他
	下 端 部	水糸部	下端部	水糸部	下端部	水糸部	下端部	水糸部		構 造	入 方		
1	168	171	190	189	183	178	188	182	平 坦	寄 棟	平 入	有	
2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	未調査
2-B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	道路下に埋没
3	190	190	-	-	-	-	-	-	平 坦	寄 棟	不 明	有	
4	231	223	-	-	-	-	-	-	平 坦	寄 棟	平 入	有	枕あり
5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	有	
6	-	-	-	-	-	-	-	-	コの字形	寄 棟	妻 入	有	
7	208	216	-	-	-	-	-	-	コの字形	寄 棟	妻 入	有	
8	194	200	-	-	-	-	-	-	-	切 妻	妻 入	有	
9	-	155	-	165	-	202	-	210	-	寄 棟 (?)	妻 入	無	棟のみを有す
10	163	169	167	175	148	154	173	184	平 坦	寄 棟	平 入	有	
11	227	237	144	146	191	193	172	181	平 坦	切 妻	妻 入	有	棟のみを有す
12	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	消滅
13	196	207	-	-	179	-	-	-	石 屋 形	寄 棟	平 入	有	奥屍床も寄棟平入り
14	142	151	-	-	148	149	-	-	ニの字形	-	-	有	未完成
15	245	248	-	-	-	-	-	-	石 屋 形	寄 棟	平 入	有	
16	前室	267	-	-	-	-	-	-	石 屋 形	寄 棟	平 入	有	複室
	玄室	210	208	233	235	237	251	224					
17	-	171	213	209	-	173	177	171	石 屋 形	寄 棟	平 入	有	
18	191	-	152	-	200	-	200	-	平 坦	寄 棟	妻 入	有	
19	-	-	-	-	-	-	-	-	コの字形	-	-		未完成
20	236	226	220	213	186	183	176	175	石 屋 形	寄 棟	平 入	有	右屍床に枕2個有す
21	235	230	208	206	181	182	176	177	ニの字形	寄 棟	平 入	有	
22	194	200	194	178	186	192	162	170	石 屋 形	寄 棟	平 入	有	追加工事…奥屍床
23	-	-	175	180	174	183	-	-	平 坦	寄 棟	平 入	有	
24	147	151	136	142	179	184	175	177	し 字 形	寄 棟	平 入	有	枕あり
25	184	190	148	155	159	168	167	170	平 坦	寄 棟	平 入	有	天井低い
26	188	195	176	180	177	175	189	185	左 の み	寄 棟	平 入	有	天井小さい
27	163	170	110	113	127	128	135	137	平 坦	ド ー ム		有	左側のみ軒あり
28	158	166	133	146	180	177	168	180	平 坦	寄 棟	平 入	有	
29	147	156	-	-	-	-	-	-	平 坦	ド ー ム	-	有	
30	202	203	186	189	166	167	164	166	平 坦	方 形 造	-	有	
31	-	214	203	203	-	183	-	185	平坦(礎床)	寄 棟	平 入	有	床中央部に排水路
32	172	174	170	190	157	147	157	156	平 坦	寄 棟	平 入	有	
33	204	-	191	-	202	-	207	-	平 坦	方 形 造	-	有	入口側に枕あり
34	195	196	193	194	172	172	169	173	平 坦	寄 棟	平 入	有	
35	192	193	174	175	186	193	167	173	平 坦	寄 棟	平 入	有	
36	208	209	184	188	153	157	159	157	平 坦	寄 棟	平 入	有	
37	188	194	156	158	151	150	136	137	平坦(礎床)	寄 棟	平 入	有	床に角礎あり
37-B	-	-	-	-	-	-	-	-	平 坦	-	-	-	崩壊
38	-	168	-	-	-	-	-	-	平 坦	-	-	有	崩壊
39	160	167	-	-	-	-	-	-	平 坦	ド ー ム	-	有	
40	185	196	-	-	-	-	180	185	平 坦	寄 棟) 中間	-	有	隅棟線のみ
41	223	224	178	176	199	203	186	201	平 坦	寄 棟	妻 入	有	
42	248	244	244	237	173	170	140	139	コの字形	寄 棟	妻 入	有	
42-B	63	62	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	未完成
43	235	250	-	-	-	-	221	215	平 坦	寄 棟	妻 入	有	
44	208	212	-	-	-	-	-	-	平 坦	寄 棟	妻 入	有	
45	217	226	213	220	176	180	181	188	し 字 形	寄 棟	平 入	有	
46	207	210	210	214	207	211	200	205	平 坦	寄 棟	平 入	有	

表-4 城横穴群計測値尺対照表

表一 4 城隅八研計測照表																																																																	
						1	2	3	4																																																								
測 音 24cm	戦国 23cm	唐 30.1	高麗 35.6	大平 29.7	メートル	奥 壁	入口部	左側壁	右側壁																																																								
										2.5	・42 ・15	・42	2.5 m																																																				
														2.4	・20 ・21 ・43 ・4																																																		
																		2.3	・11 ・41																																														
																						2.2	・45 ・31	・20	・43																																								
																										2.1	・36・44 ・7・46 ・33 ・30	・46 ・21 ・31	・46 ・33 ・18・46																																				
																														2.0	・13 ・8・34 ・22 ・15 ・16 ・3	・22 ・34 ・33 ・1	・16 ・41																																
																																		1.9	・26・37 ・40 ・25	・30 ・36	・20・22・35 ・1・31																												
																																						1.8	・32	・41 ・26 ・23 ・35	・26 ・45 ・23 ・42 ・34																								
																																										1.7	・1 ・10・27 ・39	・32 ・10 ・9	・30 ・34 ・25																				
																																														1.6	・28 ・9	・37 ・18	・36 ・37																
																																																		1.5	・24・29 ・14	・25 ・11	・10・14												
																																																						1.4		・24 ・28	・42 ・37 ・27								
																																																										1.3			・27				
																																																														1.2			
1.0																																																																	
				0.9																																																													
								0.8																																																									
												0.7																																																					
																・42-B																																																	

2.5 m

2

1

0.5

測音

戦国

唐

高麗

大平

メートル

奥 壁

入口部

左側壁

右側壁

2. 奥屍床における石屋形の構築方法について

城横穴群の中で奥屍床を石屋形状に構築している横穴は13号、15号～17号、20号、22号の6基である。これらに共通するものとして横穴本体と石屋形の天井が別々に造られており、さらに本体の天井は寄棟造の平入りとなっているということである。とくに前者についてが最大の特徴と言えるものであろう。熊本県下において「コ」字形の屍床を有する横穴が多く見られ、その中には奥屍床が左右の屍床に比べるとかなり高く造られ、仕切も「ゴンドラ形」を呈しているものが存在している。この種の横穴と、先に述べた石屋形をもった横穴とは平面プランでは類似している。しかし、天井が奥壁から一体となって造られている点において、根本的に異なっているものと言えよう。そこで石屋形の構築方法について考えてみることにする。

横穴構築については大きく五段階に考え、これまで第一段階から第四段階について検討を加えたが、ここではその第五段階に相当するものと思われる。とくに20号横穴から22号横穴までがその工程を示しているものと言えよう。

20号横穴と21号横穴は隣接しながら開口しているが、その前後関係については判断する材料がない。しかし相互の横穴の規模はほぼ同じである。従って工程的に考えると21号横穴構築を第四段階終了と見なし、20号横穴をその後の第五段階と見なすことができよう。また、22号横穴においては第四段階から第五段階に入った過程を示しているものと言える。ただ、この横穴の場合石屋形と本体の時間的な差が明らかでないため、工程を示すものとして理解していただきたい。

さて、第五段階について検討を加えてみよう。

第五段階 横穴本体が完成した後、奥壁に追加する形で石屋形を掘る。この場合入口は軒先線を破壊しないよう長方形に掘り込んでいる。また石屋形は本体に比べると粗い造りで、天井も別に造っている。

一応第四段階でも完成したと言える状態であるにもかかわらず、あえて石屋形を造り出しているのである。これを単に工程上から考えると、第四段階と第五段階の間において時間的な空白が存在している。

では、それがどれ程のものであろうか。仮に第四段階で一度埋葬したとして考えてみよう。追葬の段階で石屋形を造る場合、遺体の処理に苦慮するであろう。まして石屑を排除する際に遺体を破損する可能性が高い。とすれば、第四段階終了後直ちに第五段階に入ったと考えるべきであろう。そうすれば先の問題も関係なく作業が進められるのである。従って第四段階と第五段階では工程の段落であっても一連の作業時間内に造られたものと理解すべきである。

以上のことから考えて技術的には石屋形を有する横穴と、そうでない正方形に近いプランを有した多くの横穴との間に差を認めることができないという結論に達する。さらに「コ」字形屍床の横穴と石屋形をもつ横穴とは平面的には似ているが、技術的に点から考えると別のものである可能性が高いと言えよう。従ってその意味からすれば42号横穴については工人集団が違っている可能性が

高く、他については同一技術によるものであらうと考えられる。

3. 横穴の内部構造の違いにおける意義について

城横穴群において時間的位置付けを行い得る資料は何一つ見出すことができなかった。そのため安易に型式論から時間的位置付けを論じるべきでないとするもので、ここでは横穴群における横穴の配置状況から構造の違いの意味について考えてみたい。

先にも述べたが、城横穴群の中で石屋形をもつ横穴が6基存在し、各種の屍床を有する横穴が9基、さらに屍床が平坦で何ら施設をもたない横穴が実に31基に達している。また、技術的に見てもその殆んどが同一技術によるものと考えられるところから、時間的には大差ないものと考えられた。

これらの分布を概観すると、石屋形をもつ横穴が横穴群の中でもほぼ中央部に集中して開口していることが注目される。また、各種の屍床を有した横穴がその周辺に散在する形で開口しており、さらに、床面が平坦で何の施設も有しない横穴が、これらを挟む様な格好で左右に列をなして開口している。

この様に見てみると、石屋形をもつ横穴、各種の屍床をもつ横穴、床が平坦な横穴の三段階の階層の存在をうかがえるのではなかろうか。

城横穴群の構築開始がいつで、終了がいつかは今後の大きな課題として残された問題であるが、すでに構築の段階であの様な配置を考えていたとすれば、そこには被葬者の身分的な原因と、構築の時間的原因が考えられよう。

まず被葬者の身分的な原因から考えてみよう。

城横穴群に葬られた人々は恐らく、横穴群周辺の人々であつたろうことは容易に推察される。とくに横穴群の前に位置する小鳥町は、和名類聚抄に見られる緒緑郷と比定されているところである。^{註4}

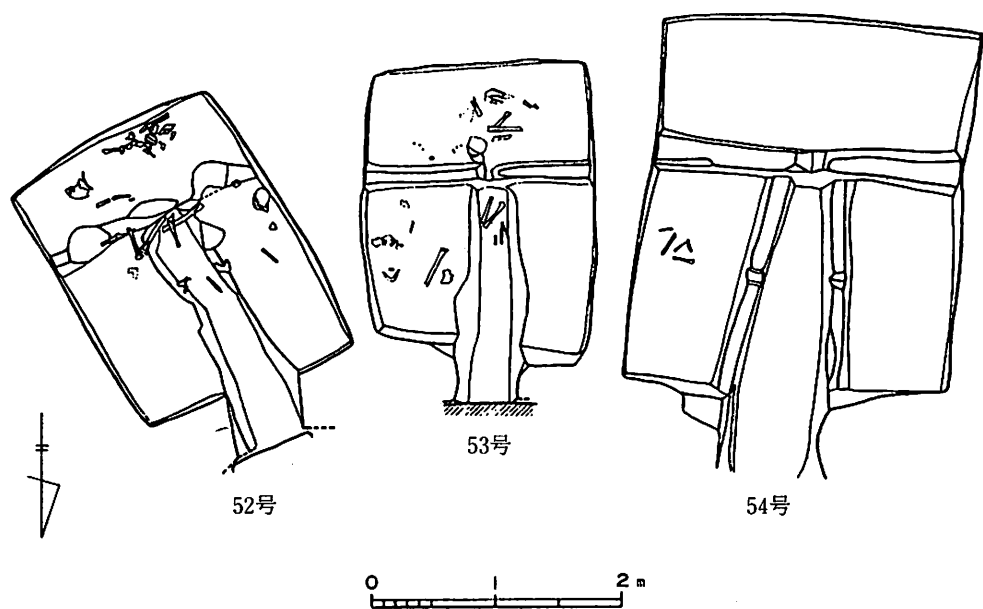
また、小鳥町や岩野川を挟んで東側にそそり立っている彦岳は、筑後国風土記逸文三毛郡の条に出てくる荒爪山にも比定されているところである。^{註5}以上の事からも、小鳥町とその周辺が古い歴史を持った集落であつたことが理解できるが、さらに、小鳥町の北に広がる条里の跡はこれらを裏付けるに足りるものであらう。^{註6}

これらは8世紀から10世紀における小鳥町の様子を伝えるものとして重要である。さらに、6世紀後半から7世紀中半にかけても同様であつたろうと推察される。生活の基礎である農業と条里制が存在する事によって、この地域がより重要な地域であつた事の裏返しである。従ってこれらの地域に生活した人々は、今日の集落よりはるかに大きいものであつたろうと考える。この集落に生活する人々の中には当然身分的な階層が存在していたであらうし、それらの人々の中の有力者達が城横穴群構築に際し、最も良い位置を占めたのではなかろうかと考えるものである。

なお、石屋形をもつ横穴が存在する地区が、現在の小鳥町の集落に最も近くに存在していることも重要な点であらう。

さて次に構築の時間的原因について考えてみよう。

この事は横穴の型式的な変遷とも大きく関わってくるが、技術的には同一の技術で、単にその工程の段階差によると考えられた。このことから、石屋形をもった横穴を構築した時期、次に石屋形を造らず屍床のみを造った時期、さらに屍床に何ら施設を造らず、平坦な床の横穴を造った時期の三期に考えることができる。むしろ横穴群構築に際しても、最初に石屋形をもつ横穴を集落の近くに築き、次にその周辺に屍床を有した横穴を築き、最後に平坦な床をもつ横穴を外側に築くといった順序を想定することができる。ここでは内部構造が簡略化していく点を考慮に入れているが、かつて湯の口横穴群においても簡略化現象を観察することができたのでここに紹介しておこう。^{註7}



第 53 図 湯の口横穴群52～54号配置図

湯の口横穴群の中で52号横穴から54号横穴の3基は標高100mの位置に並んで開口しており、52号横穴が左側、53号が中央、54号が右側に位置していた。52号横穴は羨門の方向と横穴の方向が「く」字に折れ、奥壁が大きく左側へ移動していた。53号横穴では「コ」字形の屍床のうち右側の屍床が左側の屍床に比べ幅が狭く造られていた。これらはいずれも横穴構築の段階ですでに右側に横穴が存在していた事に他ならないのである。従ってここでは54号横穴が古く、次に53号横穴、最も新しいのが52号横穴であることが判明した。

さて、再度内部について観察すると、3基の横穴はいずれも「コ」字形屍床になっているが、54号横穴では各屍床に仕切を造り、それぞれの中央に排水溝を刻んでいた。53号横穴では奥屍床のみに仕切を有し、左右の屍床には見られなかった。さらに52号横穴においては「コ」字形に屍床を配しているのみで、各屍床は平坦になっていた。

以上のことから内部構造の簡略化が現実に行われており、城横穴群においても実施されたものと理解できるのではなかろうか。

なお今まで述べた点については今後更に検討を加えなければならないと考える次第であり、またこれらを完遂することが調査者に課せられた責務と感じる昨今である。

註1 梶 国男「古墳の設計」築地書館 1975

註2 波多 巖「肥後国菊池川流域に於ける横穴及び古墳（一〜四）」『考古界』5巻1、3、9、10号 1905〜06

佐田 茂「九州横穴の形式と時期」『考古学雑誌』61巻1号 1975

註3 柳沢一男「石室平面形の検討」『広石古墳群』福岡市埋蔵文化財調査報告書第41集 1977

「岩立C古墳」『五ツ穴横穴群』熊本県文化財調査報告第34集 1979

「片江古墳群」福岡市埋蔵文化財調査報告書第24集 1973

「宇美観音浦」宇美町教育委員会 1981

「下吉田古墳群」北九州市埋蔵文化財調査報告第21集 1983

などで晋尺や漢尺のマス目を被せている。

註4 工藤敬一「古代・中世」『山鹿市史』1985

池邊 彌「和名類聚抄郡郷里駅名考證」吉川弘文館 1981

註5 工藤敬一「古代・中世」『山鹿市史』1985

「風土記」『日本古典文学大系』岩波書店 1958

註6 「熊本県の条里」熊本県文化財調査報告第25集 1977

註7 「湯の口横穴群」山鹿市立博物館調査報告書第5集 1986

編集後記

実測調査に入る前は、一か月もあれば終るとたかをくくっていたが、あにはからんや、横穴の開口位置が高く、実測の度に足場を組まなければならず、思いの外時間が経過した。また地上4～6mでの水糸張りも猿知恵を働かせての作業であり、ましてや実測となると曲芸以外の何物でもなかった。さらに女性軍を悩ましたのが蛇（マムシ）の出没とトイレであった。これらも含め無事に調査が終了した事が何よりも喜ばしい事である。

最後になるが、実測調査に参加した人々、図版作成に頑張った人をはじめ、博物館においては館長以下全員で調査に対し協力していただいた。さらに隈昭志、高木正文の両氏をはじめとした熊本県教育委員会文化課と、白木原和美、甲元真之両先生をはじめとした熊本大学文学部考古学研究室におかれては図面等の借用を快諾していただき、調査員として感謝する次第であります。ここに記して篤く御礼申し上げます。

なお、報告書作成にあたっては、緒方久美子君の力に依るところが大であったことをここに記して、感謝のことばといたします。

圖 版

図版 1



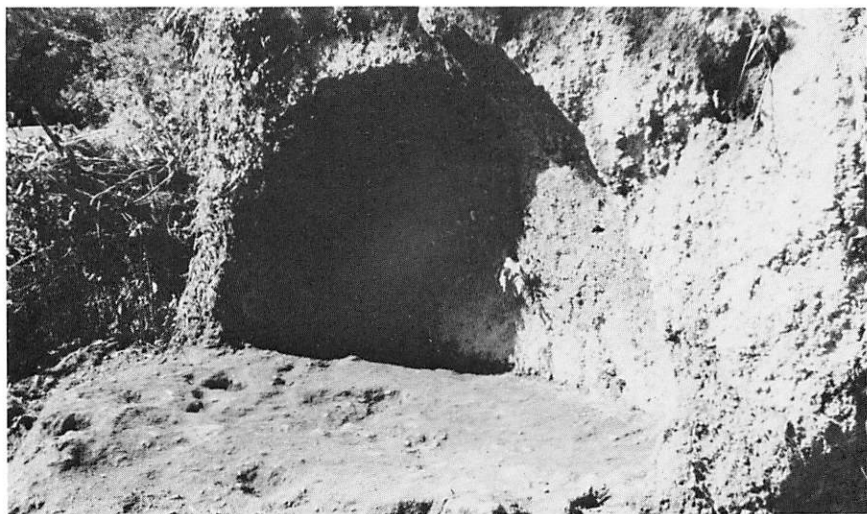
城横穴遠景
1 (彦岳山頂より)



城横穴群全景
2 (日輪寺より)



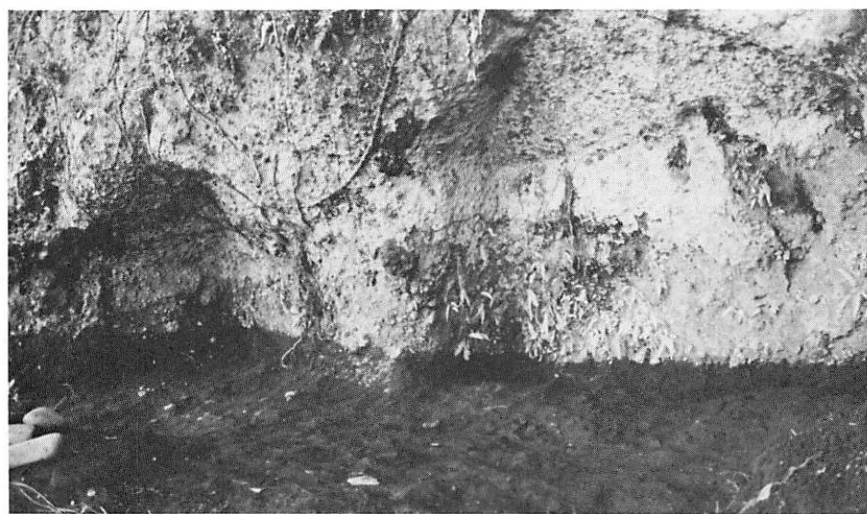
台風で崩壊し
た崖面
3



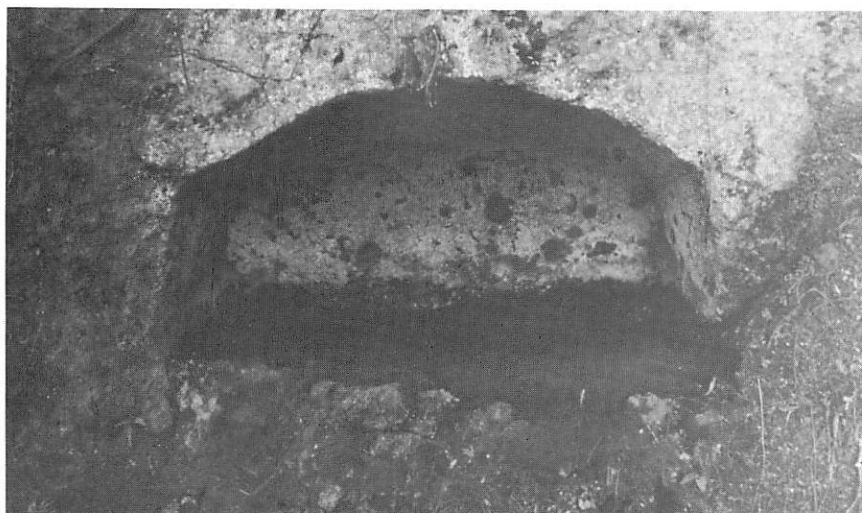
1 4号横穴



2 4号横穴石枕



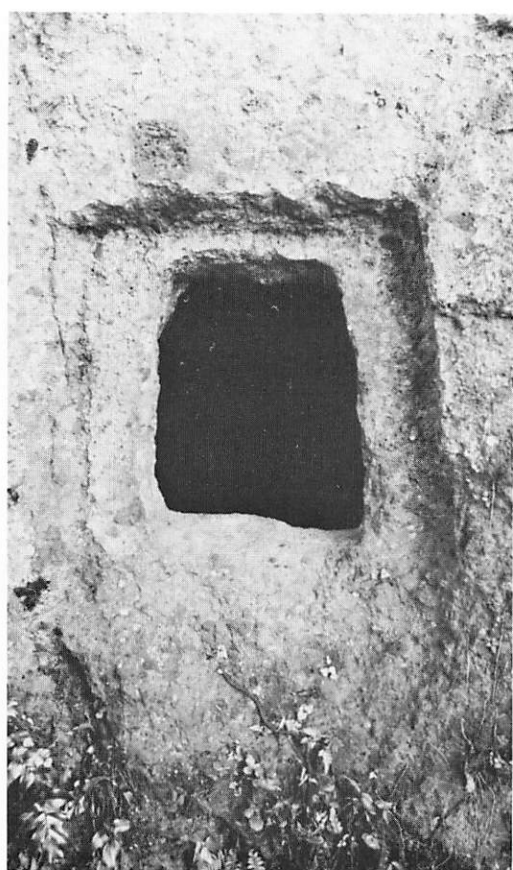
3 6~7号横穴



1 8号横穴



2 9号横穴



3 11号横穴



1 13号横穴



2 14号横穴



3 15号横穴



1 16号横穴



2 16号横穴内部



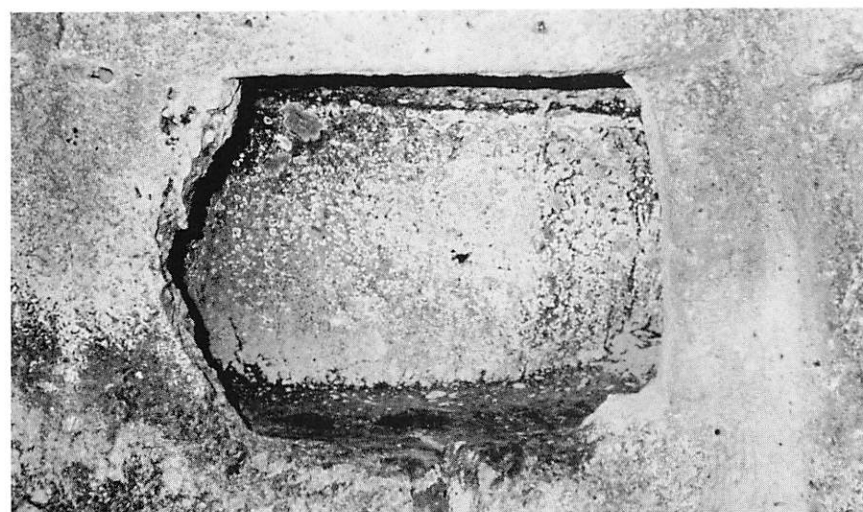
3 17号横穴



1 17号横穴



2 石屋形



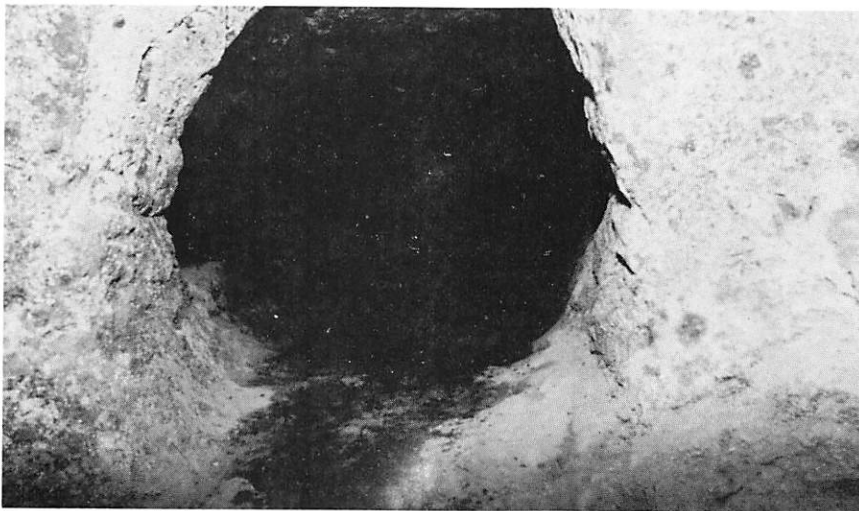
3 石側壁の石屋形



1 18号横穴



2 19号横穴



3 羨門より内部
を見る



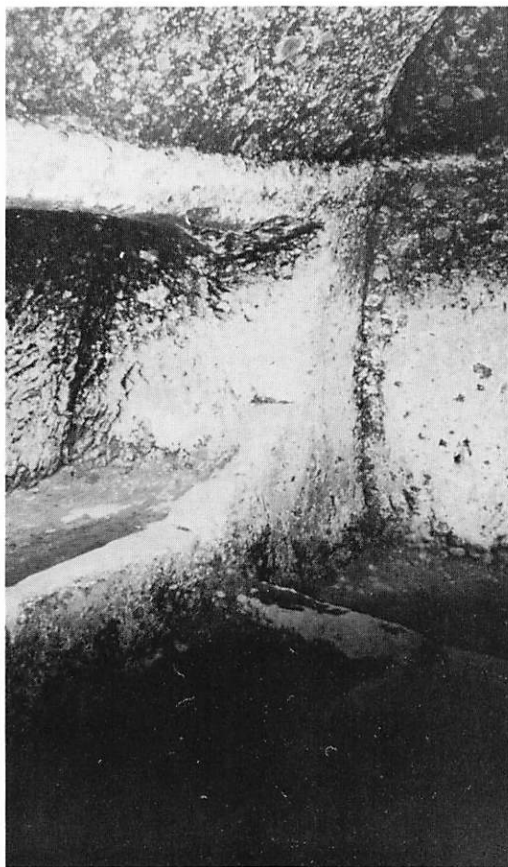
1 19号横穴内部



2 荒々しいノミの痕



3 20号横穴



1 20号横穴奥壁石屋形



2 装飾文様



1 21号横穴



2 玄室より羨門
を見る



3 壁面に残された
ノミの痕



横穴開口状況
1 (24号～29号)



2 23号横穴



3 24号横穴



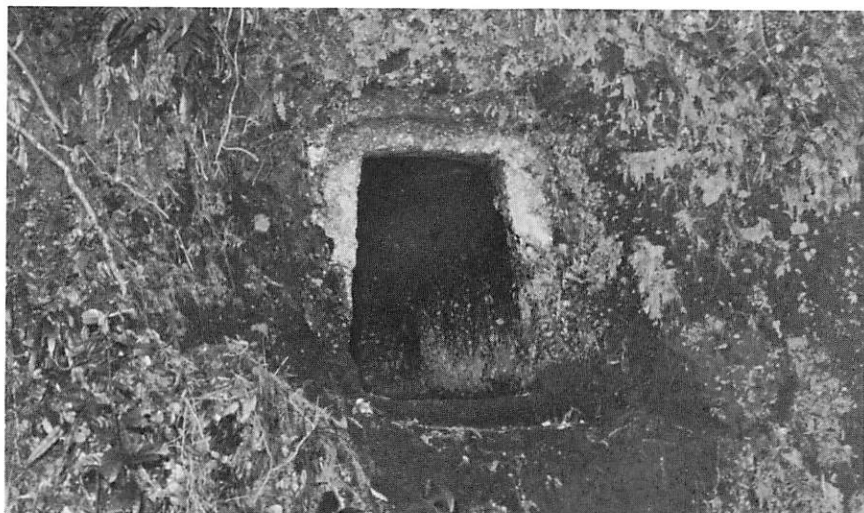
1 24号横穴内部



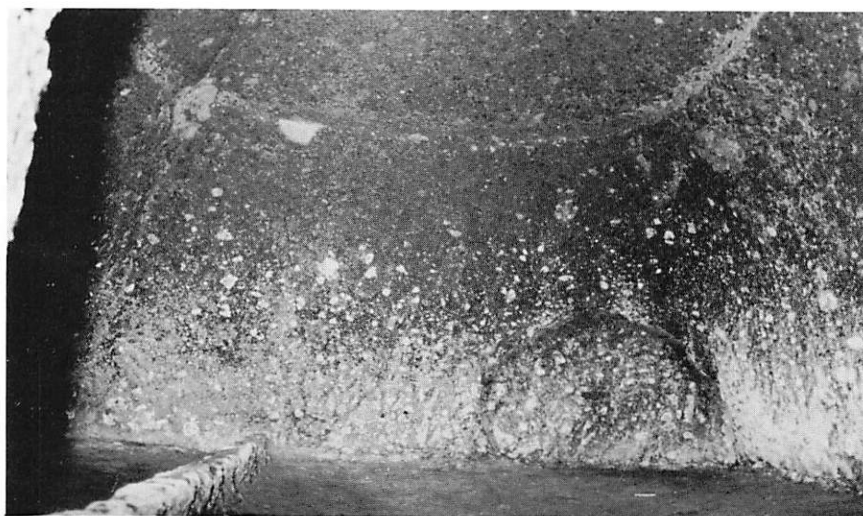
2 25号横穴



3 天井



1 26号横穴



2 26号横穴内部



3 27号横穴



1 28号横穴



29号横穴
2 (天井に穴がある)



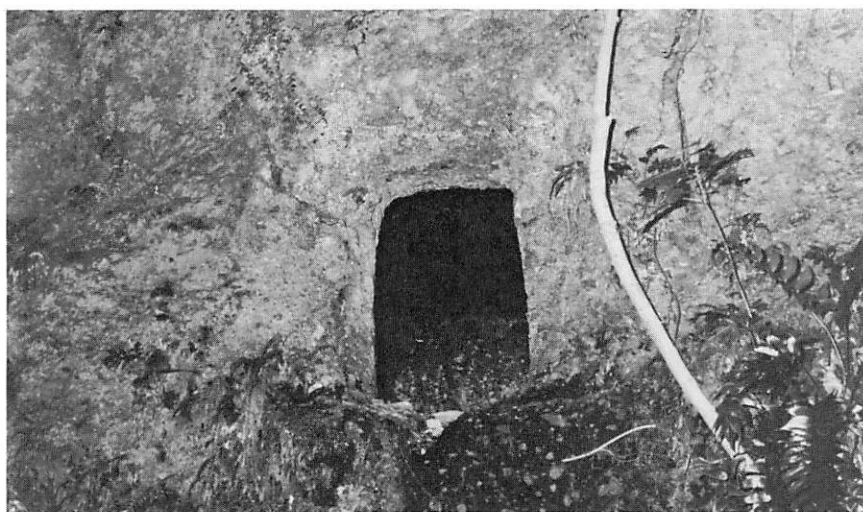
3 30号横穴



1 30号横穴実測用足場



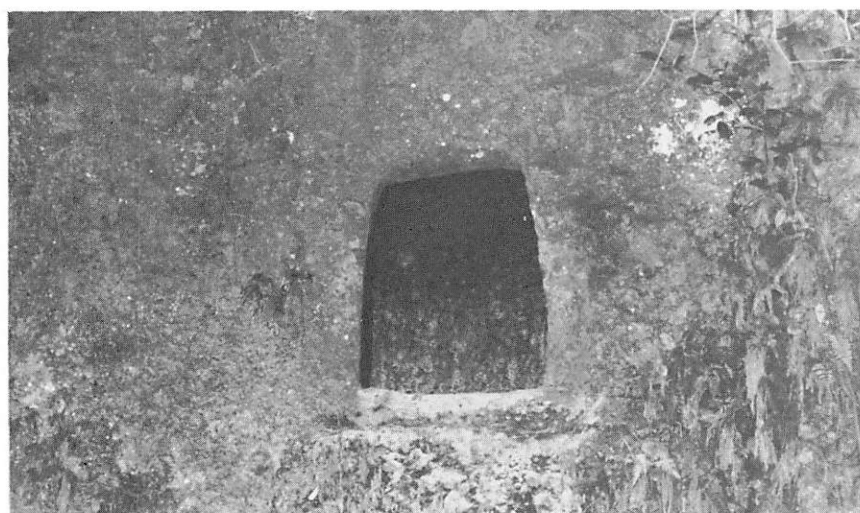
31号横穴内部
2 (礫床)



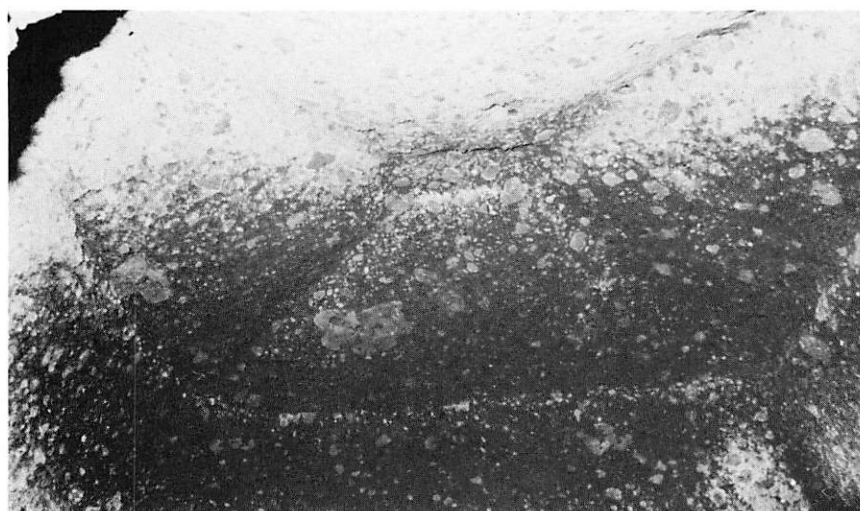
3 31号横穴



1 33号横穴



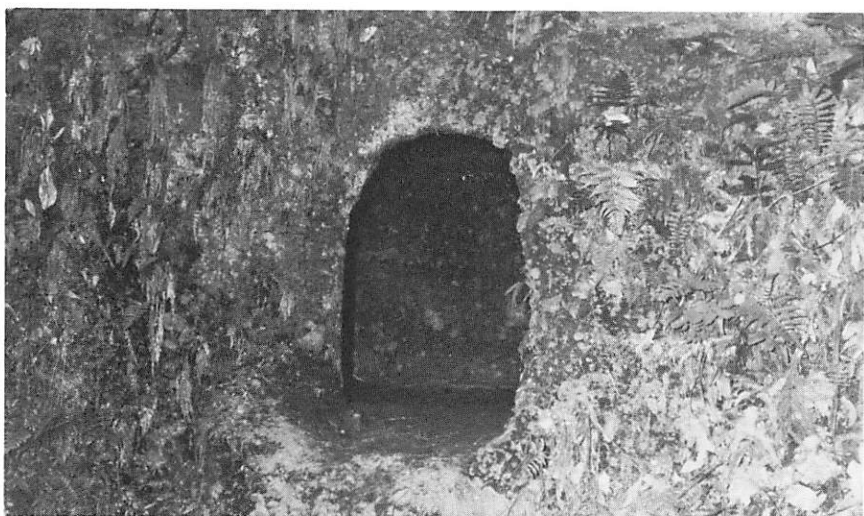
2 34号横穴



3 34号横穴天井



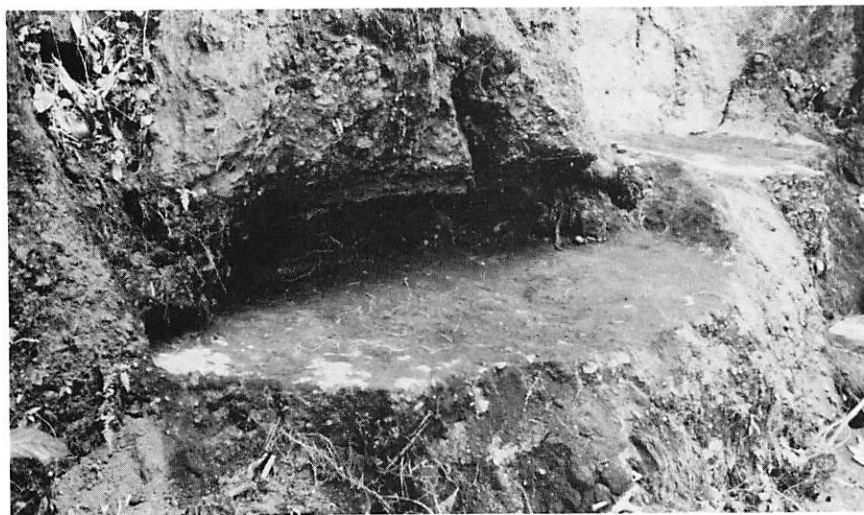
1 35号横穴



2 36号横穴



3 37号横穴



1 37-B号横穴



2 38号横穴



3 39号横穴



1 41号横穴



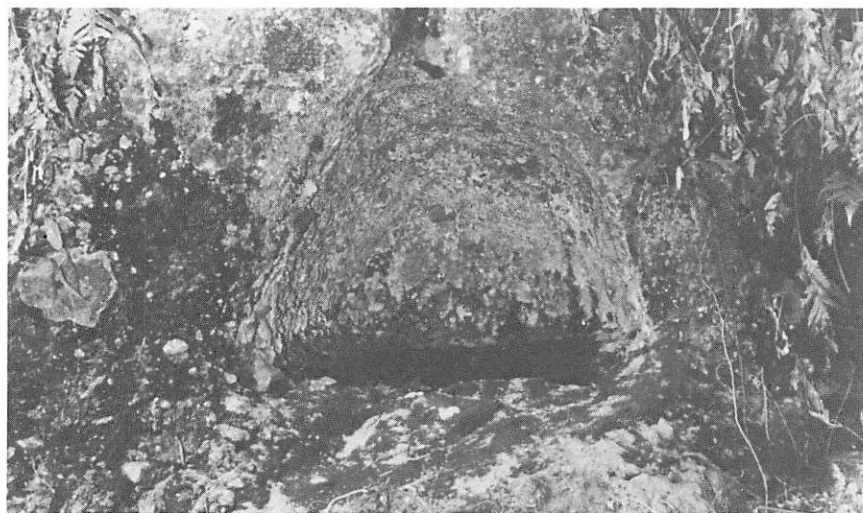
2 41号横穴天井



3 42横穴



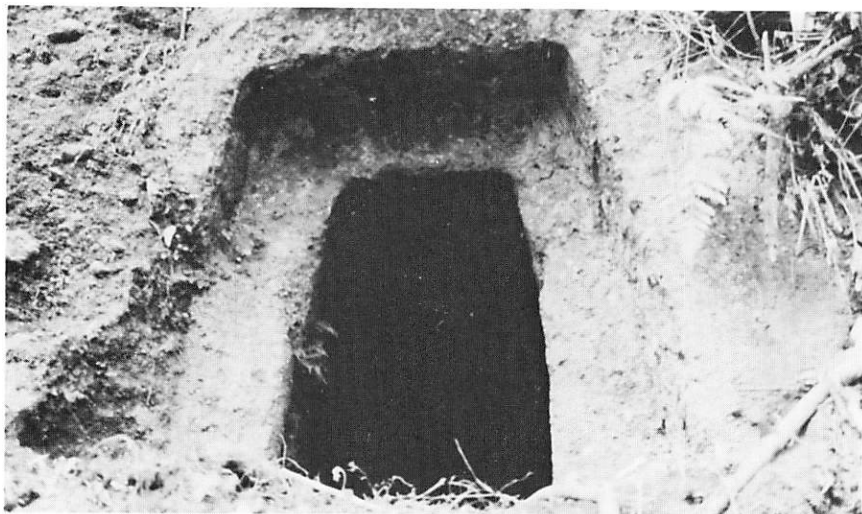
42号横穴遺物
1 出土状況



2 42-B号横穴



3 43号横穴



1 45号横穴



2 玄室より羨門
を見る



3 変則的な屍床

山鹿市立博物館調査報告書第6集

城 横 穴 群

昭和62年3月31日

編 集 山 鹿 市 立 博 物 館
〒861-05熊本県山鹿市大字鍋田2085

発 行 山 鹿 市 教 育 委 員 会
〒861-05熊本県山鹿市掘明町1026-2

印 刷 下 田 印 刷

正誤表

『城横穴群』 山鹿市立博物館調査報告書 第6集 山鹿市教育委員会 1987年
 菊池川中流域古墳・横穴群総合調査報告書(2)

頁	行 図番号	誤	正
24	2 行	12号横穴	12号横穴(図版1-3)
33	19 行	(図版7-2、8-1.2	(図版7-2・3、8-1.2
38	3 行	21号横穴(図版10-1.2.3 第22図)	21号横穴(図版10-1.2.3 第23図)
38	20 行	22号横穴	22号横穴(第24図)
38	25 行	入口部分で幅194cm、	入口部分で幅194cm、
63	13 行	通路密着で出さしているが、	通路密着で出土しているが、
73	7 行	各横穴の数値を表2、3に示しているが、	各横穴の数値を表3、4に示しているが、
	図版19-3	3 42横穴	3 42号横穴

文化財調査報告の電子書籍の末尾に挿入する奥付

この電子書籍は、『山鹿市立博物館調査報告第6集 城横穴群』を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

なお、平成17年(2005)に山鹿市、鹿北町、菊鹿町、鹿本町、鹿央町が合併し山鹿市となりました。調査記録及び出土遺物は、山鹿市教育委員会が保管しています。

書名：山鹿市立博物館調査報告第6集 城横穴群

菊池川中流域古墳・横穴群総合調査報告書(2)

発行：山鹿市教育委員会

〒861-0592 熊本県山鹿市山鹿 987 番 3

電話：0968-43-1651

URL：<https://www.city.yamaga.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2025 年6月 26 日